浜林生之助のこと(3)

――ある英文学者の小伝――

東　　博　通

1．留学を前に

『浜林生之助先生追憶特集号』に記されている年譜によれば，「昭和2年3月イギリスへ留学」となっているが，生之助が日本を離れたのはその年の5月である[1]。出発までの2ヶ月を彼は郷里の三重で過ごしている。これに先立って，高商新聞『緑丘』に「浜林先生訪問記」が掲載されていて，頭の毛を伸ばした着物姿の生之助の写真とともに，次のような記事が載っている。

> 夙に人々の口に噂されていた浜林先生の洋行は真実(ほんとう)になった。長く予期されて居た事丈又お目出度いと言わねばならない。「英文構成法」で何百人がやり込められ，静かな沈んだ講義に何百人が聞き惚れた事だったか……それも暫くお別れしようと言う。
>
> 十五日午後写真師を伴って玉の井寮にお伺いする。出して下さったお茶菓子を食べ乍ら落着いて暫く美しい英国の想像画を描いて戴く予定が狂って，「質問で来い」と仰言られる儘に，殊に「駈出しの記者はノートを取るものだ」というお説に従って貸して下さった洋紙に，鉛筆を走らせる。
>
> 「英国の国民性と言うと一口に言えば保守的だと言える。従って人好きはせず，一見近づき憎く，米人の様に明るい所があるまい，が併し一旦友達になったら好くのみ込んで呉れようし，割合に快よい生活が私には出来様と思っている，感傷的な点は幾分日本人とも似ているようだが，斯うした事を見て来るのも実は今度の研究題目の一つの中に加えてある。此の研究の題目は大変多くて仕度い事は種々ある。先づ第一名所を尋ねる事が一つだ。それから学校へ籍を置いて多分剣橋(ケムブリッヂ)になるだろうが，講義も英文学の方を多く聞きたいと思っている。
>
> 英国を想像に描いて呉れとは一寸六ヶしい注文だが……第一道がいゝね。何百年も経た家が今も其処此処の道の脇にあると言うからね。次に美しい木が多い。lane――つまり小道だがそれと hedge――生垣とが屹度よく見られるだろう。兎に角美しい国だ。倫敦も左程汚いとは思われないが，見るなら併し田舎が見度い。機会ある毎に田舎へは行って見ようと考えている。時候は春の五月だ。此頃のウァーズワースが唱うレークディストリクトやウェールズはよく人の行く所らしいが，私は却って南のウェセックスやデボン辺りがいゝと想像している。其他行く所では大陸だが，語学教授法を見る為には独逸，仏蘭西が好い様だし，スウイスやイタリーにも素通りだけはして来ようと思う。」
>
> 「元来英語の熟達は勿論困難な事だが，それは一つは教授の方法にも依るものだ。懸命に単語を習い構文も習って何年も経ち乍ら余り効果の現れぬのは何故だろう。其処を見て来るのさ。之は或は英語の背景(バック)と言うものを持たぬ為では無かろうか。其のバックだ。私は其れを英国で見て来て後から来る諸君の為に一生の事業として本を書き度いと思っている。題も決まってい

る。「英語と英国」と言うのだ。日本には此の種の物が殆ど無いと言っていゝ。之の準備に行くと言うのが当たっていよう。要するに向うで無くては得られぬものを得て来るのが目的だと言い得る。」

「私は此の四月から学校教員の定員外に入るのです。つまり在外研究員と言う名になるのだから或は今迄の学校に対して批評を加えても好いかも知れないが……学校は一口に言えば満足すべき状態であると思う。或は未だ自発的の勉強が不足して居ると言えるが，之は目的の不確立に原因して居て何うも出来ない事だ。それが又就職間際には極めて不勉強になる原因にもなるだろう。言わゞ制度の罪だ。が其れにしても入学当時諸々方々から出て来た君等が一つの校風と言うものを作り上げて円転滑脱と言った様な角の取れた者になって出て行くと言う事此れは極く面白い好い事だと思っている。が之が極端になって社交上の必要とか何とかから碁や謡は未だとして尺八や三味線を習いに通う者もあるそうだが，それ迄にしなくとも諸種の運動もやれるのだし，本末を転倒したやり方はやめたら好いと思う。」

「向こうで途々通信します。新聞にも時折載せて貰えるだろうが，一つ宜敷く頼む。」

先生のお発ちは五月なそうな。一路平安を祈って二年後のお土産を待つ事にしよう[2]。

同じ年に，大野純一も在外研究員に選ばれている。大野の留学先はドイツである。大野は明治31年（1898年）の生まれで，生之助より11歳年が若かった。彼は大正5年石川県の小松中学を卒業後小樽高商に入学し，同8年に卒業するとすぐ東京高商専攻部に進んだ。東京高商は翌大正9年4月に大学に昇格し，東京商科大学となる。従って，大野は専攻部最後の年の入学生である。東京高商では左右田喜一郎のゼミナールに属し，貨幣論を専攻した。大正11年に専攻部を卒業すると直ぐ母校の小樽高商に迎えられた。生之助と大野はウマがあったらしく，二人の交遊は生之助が亡くなるまで続く。後年，大野は生之助の次男正夫の結婚の仲人を勤めている。

この頃の教員の在外研究は，今と比べると随分恵まれていたと言える。小樽高商では，毎年教員が次から次へと在外研究に出掛けていた。『緑丘五十年史』には大正12年5月の教員構成が示されていて，それによれば，小尾範治（「修身」「ドイツ語」担当），村瀬玄（「簿記」「商業実践」担当），徳永修一（「法学通論」「経済学」担当），手塚寿郎（「経済学」担当），佐原貴臣（「経済学」「商工経営」「商業実践」担当），椎名幾三郎（「商業学」「商業実践」担当）が留学中であった[3]。当時の教員数は兼任教授を含めて44名であり，そのうち6名が留学していたのだから驚きである。また留学期間も長く，最短で2ヵ年，長い場合は私費滞在を含めると足掛け6年にも及ぶことがあった。例えば，手塚寿郎は大正9年11月に出発して，大正15年2月に帰国している[4]。大野純一も帰国したのが昭和6年1月であるから，約4年間留学していたことになる[5]。

生之助と大野の出発について当時の『緑丘』は，「本年度海外研究員として，欧州へ出向を命ぜられた浜林，大野両教授は，浜林教授は三月十三日朝，大野教授は四月十一日夜小樽を出発されたが，浜林教授は現に三重県の郷里に滞在中で，出発は来る五月十三日の鹿島丸とのこと，又大野教授も現に石川県の郷里にご静養中であるが出発は五月九日とか，尚同先生は婦人御同伴で独逸への旅をとらるゝ事になる由である。」と書いている[6]。

留学を前に，生之助が従兄の大西源一に宛てた挨拶状が大西家に残されていて，そこには留守宅として，「三重県多気郡斎宮　岡田辰蔵方」と記されている。この挨拶状にあるように，生之助の留

学中，家族は妻一枝の実家に身を寄せていた。斎宮は現在では明和町の一部になっていて，松阪と伊勢の中間に位置する広々とした田園地帯である。そこはかつて，その名が示すように斎王宮のあったところで，古代から中世にかけて伊勢神宮の祭主を勤めた斎王が住み，そのための役所が置かれていた。30 年ほど前から斎王宮の本格的な発掘調査が始まり，現在，東西約 2 キロメートル，南北約 700 メートルの範囲が国の史跡に指定されている。一枝の実家は斎王宮の中心があったとされる地点から程近く，旧伊勢参宮街道沿いにあった。父辰蔵は医院を開業していた。当時は広い屋敷に診察室と住居を兼ねた家や蔵が建っていたそうだが，その屋敷は今はもう存在しない。そこは，生之助が生まれた東黒部村からも 8 キロメートルほどの距離であり，その昔，彼が通っていたと思われる郡立高等小学校も，斎王宮近くの坂本の地にあった。生之助の姉志げは，当時，東黒部村の生家の近くで夫と一緒に呉服商を営んでいた。生之助は斎宮に滞在中，姉のところへも足を運んだことであろう。後年，志げは孫たちに生之助の乗った船の写真を見せながら，弟の留学の話をよく聞かせたという。

小林象三によれば，生之助は留学を前に名古屋で渡辺龍聖に招待されている[7]。渡辺は，当時も名古屋高等商業の校長職にあった。かつて自分が苫米地英俊に命じて全国の中等学校を捜させ採用した教員が，文部省在外研究員として留学の機会を与えられるまでになったことは，渡辺にとっても喜ばしいことであったに違いない。生之助は留学の準備の慌しさを縫って名古屋へ出かけ，久し振りにかつての校長と再会した。その時，渡辺から「パンクチュアリティについて説教された」という。渡辺は自分の豊富な外国体験から，異国での生活のアドバイスを与えたのであろう。

2．英国まで

生之助は昭和 2 年 5 月 12 日に日本郵船の鹿島丸で神戸を発ち，同年 6 月 26 日にロンドンに到着している。彼はこの神戸出港からロンドンまでの旅の様子を，「英国まで――鹿島丸船中にて」と題して小樽新聞（現北海道新聞）に書き送り，それが同年 6 月 20 日から 10 月 3 日まで 23 回にわたって同新聞に連載されている。この『船中記』は，当時の欧州航路や，荒波を越え一月半を要して行く航海の大変さを伝える興味深い資料でもあるので，参考までに末尾に掲げておきたい。

筆者の妻の実家に，神戸港における旅立ちの写真が残されていて，中折れ帽をかぶりレインコートを着た生之助が，甲板の上で，見送りに来た家族や親戚，友人に囲まれて写っている。生之助は，『船中記』でこの出港の模様を次のように書いている。

> 一人の船客に平均十人の見送り人がある，それに赤帽がつく，テープ売りが交る，大変な騒ぎである。自分の荷物がどこへどうなったのやら分らない。久々で会った友人に「御機嫌よう」と「左様なら」とを一しょにいっていると，いつの間にか船と突堤との間に，蜘蛛の巣のようなテープの網が張られている。赤や青や白や黄やが縦横無尽に錯綜するのはいかにも派手には相違ないが，
>
> 君がゆく海辺の宿に霧立たば
> わがたち嘆く息と知りませ
>
> と詠んだばかりで見送りにも来なかった万葉の人々にもすて難い情趣はある，なにしろ変って

鹿島丸甲板にて（中央が生之助，左が妻一枝（抱かれているのは次男正夫））

きたものだ。

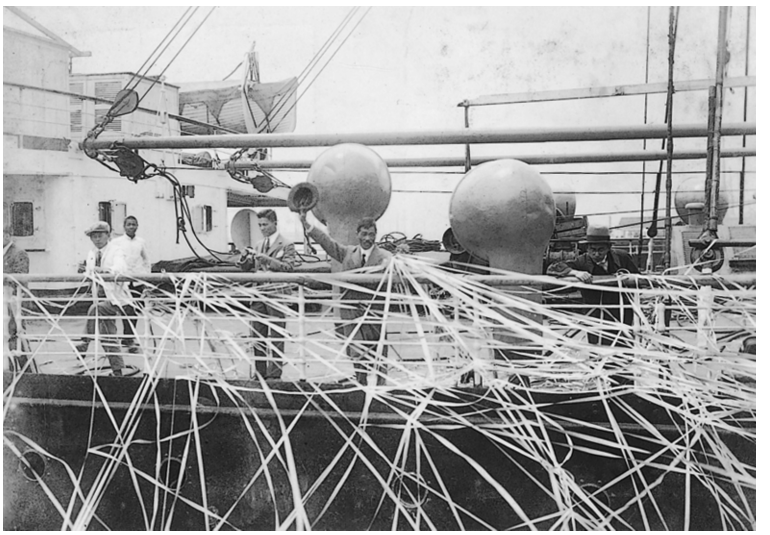
手に握ったテープが緊張する，と思うともう船が動き出しているのであった。下には眼にハンケチをあてゝいる婦人も見える，一寸変な気もちになる。まことに意気地のない話ながら事実だから致し方がない，あとで聞くと外の連中も平気ぢゃいられなかったと白状していたから，僕ばかりぢゃなかったとみえる。

船が速力（スピード）を出すと突堤の人影が次第に小さくなってゆく，それでも人垣は崩れない，船の上でもみんな欄干にかぢりついている。もう誰が誰だか見分けがつかなくなっても，まだ双方から帽子やハンケチを振っている。

この船には大野純一も夫人と共に乗っていた。大野夫妻は横浜からの乗船である。大野は大正12年に結婚して，その夫人は美人で知られていた。『船中記』で生之助は，「横浜から乗った大野さんが三日の長とあって得意顔に船中を案内してくれたり，既知の船客に紹介してくれたりする。その中に仏蘭西へ飛行機を研究にゆく金子さんがいる，独逸語を研究にゆく文留の川本さんがいる。」と書いている。この五人はあちこちの寄港先で市内見物をしたり食事をしたりと，パリに着くまでいつも行動を共にした。『船中記』には，香港で英語が通じずにレストランや両替屋で苦労したこと，ペナンでは自動車の運転手に「上等の英語では駄目」と悟って単語を並べてみたら通じたことなどが面白おかしく書かれている。後年，大野は「浜さんのキングズ・イングリッシュより，わたしのブロークンの方がよく通じたことがある」と自慢していたという[8]。

神戸を出てマルセイユまでは40日の船旅であったが，途中インド洋の荒波に船は激しく揺れ，船客は船酔いに悩まされた。生之助はこの時の模様を次のように記している。

コロンボを出てから始めて今までの揺れ方が，ほんの前奏（プレリュード）であったことが分った。縦揺（ピッチング）の振幅が十二尺あるとこの前の通信に高慢らしく書いたのが今更恥しくなった。アラビア海の真中



甲板から手を振る生之助

留学当時の大野純一

では三丈以上になったそうな，プロペラが始終空廻りをやっている，どうかすると浪がテープ・デックの手摺よりも高く見えた。神戸で乗ったときは山なす巨船と思った鹿島がこゝまで来るともう木の葉の様に見えて来る，折ふし風が雨を伴うてさあと来る，先が見えなくなるので汽笛を吹く，それがいかにも悲鳴の様に聞える。その木の葉に生命を託して唸きつゝ悶えつゝ浪のまにまに揺られてゆく人間の哀れさを泌々と痛ましく思った。

食堂も甲板も再びガラ空きになる。船室に見舞に行って見るとみんな痩せこけて泣き言を並べている。痩せるのも無理はない，腹は減っても胸は悶えて，身になる様なものはたべる気にならないのだから。

コロンボを出てからアフリカの東北端スコトラの島にかゝるまで一週間ばかりの航海に大野さんのたべたものはライスカレー一，天どん一，ビフテキ三分の一，それに折よしのアイスクリームと果物だけ，これで腹が減らぬとは人間も妙な状態になるものだ。もう孫子の末まで夏の印度洋は通らせないのだそうな。風が止まぬ以上，船がとまらぬ以上，慰め様もないので小樽の話を出すと始めて大野さんの眼が輝く。「今ごろはもう桜んぼが出始めたかしら，露のまゝの苺もうまいな，それから鯖の新しいのも……」とまるで子供。

船酔いのせいばかりぢゃない，実際船の料理にはもう皆がすっかり厭きて了った。第一材料がない，第二変化がない。大野さんはしまいにはメニューを見ただけでも胸が悪くなる様になった。海苔や梅干の様なものが無闇に恋しくなる。あるほどの伊達しつくして紙子かな，というところだろう。

大野さんの悪口ばかり書いたが，僕だって決して平気でいたのぢゃない，何か仕事を始めるとすぐ頭が重くなる，胸が悪くなる。止むを得ずトランプをやったり，花をやったり，ゴルフをやったり，一等へ逃げて行ったり，漫談をやったり——こんなだらしのない生活をやったのは生れてから始めてだ。

『船中記』によれば，船がアデンを出帆し紅海を航行している頃，一等の食堂で文部省留学生の茶話会が催されている。船には23名の留学生が乗っており，イギリスに渡る者が12名，ドイツに行く者が11名いた。そのうち語学で渡英する者が8人いて，その1人が長崎高商の伊東勇太郎であった。伊東は，生之助がかつて川内中学に勤めていたときの同僚である。彼は長崎県の生まれで，地元の長崎中学を卒業すると東京高等師範英語部に進み，明治42年に高師を卒業している。その後千葉県の成東中学に奉職し，同44年10月に川内中学に転任している。伊東は大正10年2月に行われた第2回高等学校英語教員試験の合格者である。この高等教員試験については前々回で述べたが，『英語青年』によれば，第2回も前年と同様，6名の合格者を出している[9]。その中には，やはり川内中学で生之助と同僚であった渡部行三も含まれている。生之助は川内中学に赴任して間もなく，大西源一に宛てた手紙の中で同僚の英語教員に触れ，「皆可なりに出来る人々で，僕の如きはその末席に列して勉学上多大の便宜を得ています。英語科は少なくとも関西においては他校に劣らぬつもりです」と述べており，当時の川内中学には若い優秀な英語教員が揃っていたことが分る。この第2回高等教員試験の合格者の中には，後年小樽商大で教授を勤めた古瀬大六の父，古瀬良則も含まれている。古瀬と渡部は合格発表後間もなく，東京商科大学に採用されている[10]。当時の官報及び『英語青年』を見ると，古瀬も生之助と同じ年に文部省在外研究員としてイギリスに留学していて，「語学で渡英する8人」の1人として鹿島丸に乗船していた可能性が高い[11]。因みに，古瀬が所蔵していた蔵書はのちに小樽商大に寄贈され，現在「古瀬文庫」として残されている。伊東勇太郎は

[第三種郵便物認可]　昭和二年六月二十日　小樽新聞

英國まで

鹿島丸船中にて

濱林生之助

(一)船出

昭和二年五月十二日。船をうけて英國留學の途に上るまづミスリーと發らう。

十日の夜は宿屋にて泊つて外に客がないのかと思はれるほどひつそり閑とした大廣間の一隅にビシンと蚊帳を下して心ゆくばかりに惰眠を貪つたが十一日は、生れ落ちるから眠り惜しみとあつて、神戸の港に近い、とある宿屋に乗込んで來たり、女中が茶を運んで來たり、どてらを貸してくれたり、「お疲れでございませう」といつて蒲團が捲返しに來るのを、「民謡を後に大胡坐をかいて、ホテルで女中に電話を數へて貰つたきりでんで相手にされないのとは實に泥の相撲だが、さて食の點に於て氣になると、どこあでも點かれない、朝はふと眼をさまして氣が中がかん〳〵してるので、「何千の出帆に乗り遅れては醜態だと慌て飛び起きると、何の事また時にもなつてるない、見ると客の眼覺いのも道理廣所きの廣子の外は、一體の廣子になつてゐて、初夏の太陽が一杯にそれを照してゐる。ホテルではカーテンやブインドやらが三面に窓をふさいでゐて、このまゝ寝たら寒風をあびたらうと考へたから、上の窓をあけたことを思ひ出す。お蔭に眼を擦ることを思ひ出す。お蔭に眼の方たかにかけて無駄な氣がするので、よく見てみるとまだ南京虫に食はれてゐる。またといふのは二度目だからである。ずつと昔、まだ神戸の宿屋に南京虫がゐることなどは夢にも知らなかつた。

一人の船客に電報十人の見送り人がある。それに送物がつく、テープ賣りが來る、大騒ぎである。自分の帽子がどこへどうなつたのやら分らない。久々で會つた友人に一御機嫌よう」と「左樣なら」とを一しよにいつてゐると、いつの間にか船と突堤との間に、柳橋の裏の樽テープの網が張られてゐる。赤や黄や白や黄やが織

船が出カを出すと突堤の人影が次第に小さくなつてゆく。それでも人影は崩れない。船の上でもみんな欄干にかぶりついてゐる。もうこれが、これだから見わけがつかなくなつてもまだたゞ帽子やハンケチを振つてゐる。眼鏡では見へなくなつたところ午後の鐘が鳴つたのを機會に、みんなが鐘を鳴めて食堂に下りるこの時始めて相手に相違ないが、

無邊に續く海邊の宿に佇立たばゆく海邊の宿に佇立たばと歌んだばかりで見送りにも來なかつた風雅の人々にもすべて船中はある間しろ驚つて來たものだと思ふとも船が動き出してゐるのであつた。下には眼にハンケチをあてゐる婦人も見える。一寸ぢゃ

の船を見送る。

生之助の『船中記』が載った当時の小樽新聞

高等教員試験に合格した頃は大分県杵築中学に勤めており，その後東京に出て大倉高商で教えた後，大正 13 年 4 月に長崎高商教授に任じられている。伊東の専門は英文学で，この留学の直前に『鑑賞と研究　英詩の味ひ方』（大正 15 年　大同館書店）を上梓していた。後年，伊東は長崎大学経済学部初代学部長に就任している。

船がマルセイユに着き，生之助たち 5 人は市内見物をした後，夜汽車でパリに向った。朝，車窓から美しい田園風景が広がる。パリに数日間滞在して市内見物をした後，6 月 25 日の夜，生之助はドイツに向かう大野夫妻らを駅で見送っている。そして，翌 26 日に英仏海峡を越え，ドーヴァーから汽車でロンドンに向かった。伊東勇太郎も一緒である。このときの様子を生之助は次のように記している。

> 汽車はケントの野を走る。牧場が青々と連って羊の群が餌をあさっている，山のようなものはちっとも見えない，ところどころにホップが植えてある。地図で見ると小ぽけな島国だが，旅行をしてみると大陸をゆく様な感がある，と誰やらがいった言葉が成程とうなづかれる。こんな広い野原をたがやしもせないで遊ばせて置く国は羨ましい，山のてっぺんまで畑にしてまだ食うに困っている日本は可哀想だ。
>
> 伊東君とふたりでしきりに途中通る筈のキャンタベリーの話をしていると，汽車は漸く野をはなれて町に入った。「大ぶん大きな都会らしいね，どこだろう。」と話していると大きいのも道理，もうロンドンにきているのだ。

こうして，無事に目的地ロンドンに到着した。神戸を出港して以来 45 日間の長旅であった。

3．ロンドンの生活

ロンドンに着いて 3 ヶ月近く経った頃，生之助は「英京の宿から」と題して高商新聞『緑丘』に次のような便りを送っている。

> 永らく御無沙汰いたしました，お詫びまでに一筆近況御報告申し上げます。
>
> チューブのハイゲイト終点から吐き出されて，ロンドンにては珍らしい急な坂をのぼるとそこがハイゲイト・ヴィレヂ，道の左側にウィティントン石というのがあります。例のディックが意地悪のクックにいぢめられて主人の家にいたたまれずこっそり逃げ出して帰る途中，この石に腰かけて休んでいると，下の町のボウ・チャーチから鐘の音がきこえる。それが「帰れ帰れ，ロンドン市長のウィティントン」との様にきこえるのだ。心を翻して再び主家に立ち返り，一生懸命に働いて，とうとうおしまいに三度まで市長になったというディックの出世物語を，諸君も中学のリーダか何かできっとお読みになったでしょう。この話は実はつくり話で，ディックは始めから金持の息子であり，あの猫も本当は細君のことをかたどったのだと聞くと頗る残念ですが，この間から，こちらの新聞ではディックの時代に一体猫がいたかいなかったかという論争が大分投書欄を賑わしました。こんな詮索をするのはその人は大好きらしいんです。でまあ結局は何だか分りませんが，そういういわれのある石を左に見て，もう少しのぼるとクロムウェル・アヴェニウ，これもクロムウェルの姫とかが住んだというのでつけたのだそうです

が，この通りが僕の今いるところなんです。ウオーターロー公園がすぐそばで，綺麗な花が一面に咲いて，池には白鳥が悠々と浮いています。その向こうはハイゲイトの墓地で，そこにはスペンサー，ヂョーヂ・エリオット，カール・マルクスなどが眠っています。このアヴェニウは二つの大通りを結ぶ横町で，どちらに出てもバスとトラムとが走っています。便利で静かで頗る我意を得たところです。それに，海抜三百尺，倫敦の一番高いところですから空気も下町ほど汚れていません。倫敦に住むならまづこの辺でしょう。家族は三人，みんな純粋の倫敦っ子で，主人はシテイの店に四十七年つとめている人物，丁寧に一々エイチを落として語り出す倫敦の昔物語には中々興趣の深いものがあります。

こういうところにいて僕が何をしているかと申しますと，今のところはまづ遊んでいるといってよろしい。気がむけば図書館に行って本を読む，金があれば芝居を見にゆく。但し早合点をして羨ましがって貰っては甚だ困ります。芝居を見るといっても，一々脚本を読んで勉強してゆくのですから，日本の芝居に行くのとは大分趣を異にします。ことに沙翁などと来ると一寸簡単に読むわけにも行かないから一寸考える様に楽ではないのです。きょうはこれからゴールズワーヂのファミリマンを見にゆくつもりですが，勉強に行くのです。学校にいくのと同じです。「英語の先生は何をしていても勉強になる，芝居を見ても喧嘩を見ても研究になる。」と来る時学校長にいわれたので，何とか喧嘩を一つ見たいものと考えていますが，不幸にしてまだ一回も見学しません。

七月から八月にかけて倫敦大学の夏期講習に出ていました。四週間通う間に二三回遅刻しました。そのころはハムステッドにいましたから，ベルサイズ・パークからチューブで通学しましたが，途中どうしても一時間はかかる。チャリング・クロスで乗り換えにまごつくと思う汽車が来なくて空しく七分待たされる。一度は停電に会いました。しかしどんな事があっても遅刻は遅刻で言いわけは立たない。講師の先生がまた甚だ几帳面で，九時二十分にはいつもちゃんと講壇に立つ。ことにスレーター博士などと来たら十分ほど前から椅子にかけて時間の来るのを待っているのだから助からない。僕は小樽で生徒が遅刻をすると閉め出しをくわせた覚えがあるから，どんな理由があるにしても，女々しい泣き言を並べて入る様なさもしい考えは毛頭ない，遅刻の場合は潔く閉め出しをくうつもりでいた。幸いに戸があいているので，入らなくとも話しは聞こえる。ところが，遅刻者が二三十人あって，みんなまごまごしているので，女どもが笑って騒がしい事一通りでなく，話が聞き取りにくいので困っていると，講師のリプマン氏が，「淑女紳士諸君，どうぞ席について下さい。」と言ったから，威張って着席した。先生が時々こうして生徒になるのはいい経験だと思う。同時に，生徒も先生にして，生徒が怠けたり，遅刻したり，不正をやったりしたら，先生としてどんな気持がするものか味わせて見るとよいと思う。

十月になると学校が始まる，成人教育といった風の夜学校も始まる，僕も芝居ばかり見ていられなくなるでしょう。倫敦大学へ通学するつもりでいます。本科へ入って土地の学生といっしょにいぢめられて見ようかと考えています。勿論書物以上の卓見を吐く先生はそう沢山はないにきまっていますが，講義に出れば書物以外の利益が得られますから。

旅行は来年ときめて，往復十志（シリング）の安切符でトーキーに行った外，ちっとも出ません。倫敦市中も見物らしい見物はやっていないのです。但し郊外は好きで，随分方々歩きました。どうも

僕は田舎者と見えて，市中の雑踏はあまり好みません。静かな田舎が気に入ります。けれども，市中だってもうそんなにまごつく様な事はありません，諸君がお出でになるならどこへでも御案内いたします。道に迷ったら倫敦名物のおまわりさん，実に懇切なものです。どうせ訊くのがいゝです。ことに汽車に乗る時など必ず確かめて乗るに限ります。すまして乗るとどこに連れて行かれるか分りません。方向は間違いはなくとも，勝手にどこでも飛ばして行きますから。

別に面白いこともありません。しかし面白くないこともありません，どうせ英国にはそう飛びつく様な味はないのです，しかしよくかみしめて見ると中々いいところがある。つまりするめみたいなところなんです。一ヶ月や二ヶ月居て好きだの，嫌いだのというのはそもそも英国を知らないのです。

ここへ来てからもう三ヶ月近くなります。その間お天気といっては両の手に数えるほどしかない。毎日毎日雨ばかり，「今年の様な年も少い」と敬老にきゝますが，日本だって毎年，近年稀な暑さだったり，稀有の寒さだったりしますから，アテになるものですか。どうせ年が年中こんなものと諦めていればいゝのです。お天気だったらもうけもの，と悟って了えばそれだけですが，こゝの人にはこれ丈の悟りが中々ひらけぬと見えて，毎日毎日こぼしています。ではこれで失礼します，向寒の候，そして試験も近いことでしょうから，御自愛を祈ります。

九月十七日午後一時　　浜林生之助[12]

ここに出ているロンドン大学夏期講習は，英名を Holiday Course for Foreigners といい，夏休みを利用して行われる外国人を対象にしたコースで，昭和 5 年にやはりこの夏期講習を受講した小林象三が、『緑丘』にこの講習のことを詳しく書き送っている。それによれば，その年は 7 月 18 日から 8 月 14 日まで開かれていて，受講料は 5 ポンド 5 シリング，27 カ国から 295 名の参加者があったという。午前中は英語音声学や英文学，ロンドンの歴史，英国事情などの講義があり，午後は市内見学，郊外への遊覧に当てられている[13]。生之助が受講したコースもこれと似た内容のものであったと思われる。

前回見たように，生之助は留学の準備に忙しい中で『ハーディ短篇選集講義』を書き終え，慌しく英国へ旅立って行った。その本が世に出たのは彼が英国に着いてからである。その年(昭和 2 年)の 12 月，『英語青年』の新刊紹介に生之助の『ハーディ短篇選集講義』が取り上げられ，次のような記事が載っている。

ハアデイ短篇選集講義　浜林生之助訳註．健文社の「近代英文学叢書」の別冊で，Hardy の *The Three Strangers, A Tragedy of Two Ambitions, On the Western Circuit* の三篇を収めて訳註してある。註も大そう丁寧で，訳もよいが，一寸こゝに気づいた事は本書の p. 48 にある盃の銘 “THERE IS NO FUN UNTiL i CUM” の I が大字と小字とを混用してあることに何等の註もないことである。これはアラ捜しではない。筆者も教室で教える際，また人からも問われて検べたが，古くは代名詞の I を小字で用いた例も N. E. D. あたりにあるようだし，ここでは百姓の無学さから大字と小字とを無差別に用いたものであろうという憶測以外には分らないでいるところなので，本書を見ると真先に捜したが，何とも書いてないので少々物足らなく思っているところである。何方か御気付きならばお知らせ下さいませんか。なお本書に収めた三篇は今迄訳又は訳註がないようにあるが，*The Three Strangers* の方は矢口達氏の「夢見る

女」及び宮島新三郎氏の英米十六文豪集中に「見知らぬ三人」（後者には「見なれぬ三人」とあったかも知れぬ）として収められ，*A Tragedy of Two Ambitions* の方は平田禿木氏の「テス」下巻の中に「二つの野心」として入れてあることをこゝに附言しておきたい。—K. H.[14]

この記事が載ったあと，生之助は間もなく次のような文を『英語青年』に寄せている。但し，この記事が掲載されたのは，昭和3年10月である。

“i CUM” 及び Eliot の墓

倫敦　浜林生之助

英語青年五十八巻六号で拙著「ハーディ短篇選集講義」を御紹介下されありがたく存じます。御指示の “THERE IS NO FUN UNTil i CUM” の I の小文字に関しては小生は単に羊飼の無智無学を示したものとして別に調べても見なかったのですが，成程そう承ればいつの頃から “ i ” を大文字で書く様になったかを研究したら面白いかも知れません，小生はたしかな事は知りません。序でがあって University College の Chambes (ママ) 教授（故 Ker 教授の後任）に尋ねて見ましたら，次のような返事を得ましたから，御参考の為にお送りいたします。

I think the intention of writing with the small *i* is to mark the writer as illiterate.

Of course, as late as the 14th Century, *ich* is written with the small *i*. But my impression is that already in the 14th Century *I* is generally written with the capital. But this rule has never been observed among illiterate people, and it is quite common at the present day for a badly spelled letter from a working man to show the small *i*.

序でに同じ（第五十八巻）第六号に George Eliot の墓のことが出ていますから一寸申し添えます。女史の墓は Waterloo (ママ) Park に隣る Highgate Cemetery にあって，高さ一間ほどの大理石に次の墓銘が刻まれています。

“Of those immortal dead who live again
In minds made better by their pressence.”
Here Lies the Body
Of
‘George Eliot’
Mary Ann Cross
Born 22 November 1819
Died 22 December 1880

小生はつい近くの Cromwell Avenue に住んでいますのでよく友人の案内を仰せつかって度々参詣しますが，いつ行ってみても外に参詣者の姿を見た事はありません。小説といえば Edgar Wallace の外読んだことのない連中が多いんですから，流石の女色も顔色なしです。小生は一度女史の話をもち出したとき，*He* is a fine writer. といわれてギャフンと参りました。

猶この Highgate Cemetery には女史の外，Herbert Spencer と Karl Marx とが眠っております。Spencer のは広い路に沿うた大きな大理石の極めて分りやすい墓ですが，Marx の方は，横町の裏店といった格で，分りにくいこと夥しいところです。　（三年一月八日）[15]

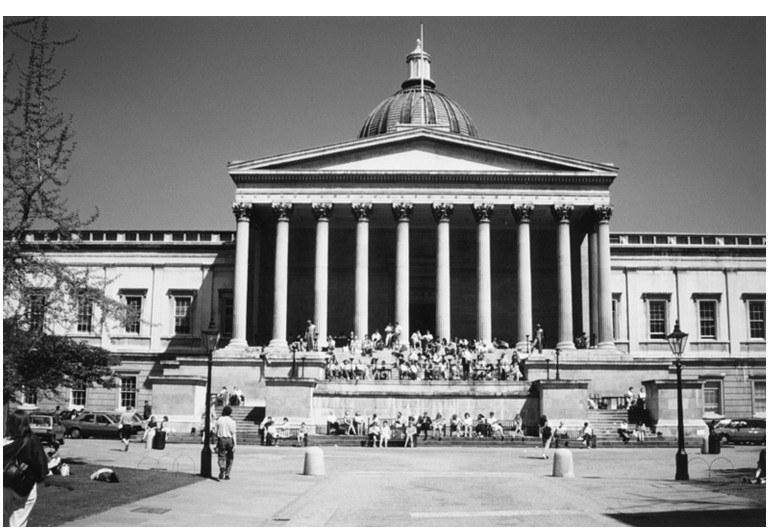
既に見たように，生之助は『緑丘』に宛てた便りの中で，「倫敦大学の夏期講習に出ていました」「倫敦大学へ通学するつもりでいます」と書いている。ロンドン大学はロンドンの市中や郊外に点在するいくつかのコレッヂやインスティチュート，スクールから成る連合大学であるが，生之助の通った「倫敦大学」は，上に出ているユニバーシテイ・コレッヂである。このコレッヂはロンドン大学を構成する機関のなかで最も古く，1826 年に創立されている。イングランドでは，中世以来長い間，大学といえばオックスフォード大学とケンブリッヂ大学の 2 つが存在するだけであったが，とかく閉鎖的であった両大学のいわばアンチテーゼとして作られたのがユニバーシテイ・コレッヂ（創立時はロンドン大学）である。この大学はいかなる宗派にも門戸を開き，女性の入学を最初に認めた大学である。また，産業革命の高まりと共に時代が要求する人材を養成するため，化学、物理、工学などの近代的な学問を教授した大学でもあった。このコレッヂは日本の近代化とも縁が深く，幕末に長州藩や薩摩藩が密かに派遣した留学生たちが学んだのもこのユニバーシテイ・コレッヂである。この密航留学生の中に，後の森有礼，伊藤博文，井上馨，山尾庸三らがいた。生之助の文章に出ている「Ker 教授」というのは，William Paton Ker（1855-1923）のことである。彼は中世英文学の泰斗で，夏目漱石が一時彼の下で学んでいる。ユニバーシテイ・コレッヂは大英図書館にも近く，生之助は大学の講義に出たり大英図書館を利用したりしながら，ハイゲートの下宿から通っていたのであろう。

ロンドンに来て 5 ヶ月ほど経ったころ，生之助は同僚の小林象三に英文の便りを出しているが，それが高商新聞『緑丘』に掲載されている。それには次のように書かれている。

London
Nov. 20, ’27

Dear Mr. Kobayashi,

Five months have passed since I arrived in this country, and looking back, I’m disgusted



生之助が学んだロンドン大学ユニヴァーシィティ・コレッジ

with myself to find that I have done practically nothing. It is true I have attended, and am still attending, several lectures at the University here, but I don't think I have much profited by these lectures. Still, perhaps I have done better than those who go to no school and who do nothing whatever except going to theatres (and there are many like that!)

Mr. Morrison (who is probably in Otaru by this time) will tell you how I am getting along much better than I can. I hope you will be good friends and see a great deal of each other. I'm sure you will like him because he is a very fine man in character as well as in scholarship.

Hoping you are all quite well,
yours ever,
I. Hama..[16]

生之助は以前にも，「大学の講義に出ても書物以上の卓見を吐く先生はそういないはず」と書いているが，この小林に宛てた手紙からも分るように，大学の講義からはあまり利益が得られなかったようだ。ここに出ている Morrison は，小樽に赴任することになった英語担当教師のことである。小樽高商ではかねてより英語担当の外国人教員を捜していて，生之助がロンドン滞在中に話をまとめたのだった。当時の『緑丘』は，「本校当局に於て長く物色されてあった英語担当教師は，現在英(ママ)浜林教授の斡旋に依って英人モリスン氏を今回新たに本校で嘱託する事となり，去る十一月末来樽直ちに授業をとっていたゞくこととなった。氏は生粋の倫敦児で牛津大学を今春了ったばかり極めてフレッシュな若々しい感じを与えて生徒を悦ばしている。」と伝えている[17]。モリソンは昭和5年3月まで小樽高商で勤めている。

昭和3年（1928年）が明けて間もなく，トマス・ハーディが亡くなった。その文豪の死は新聞でも大きく取り上げられ，著名な批評家による評伝が複数の有力紙に掲げられたという。ハーディは生之助が好んで取り上げた作家であり，たまたまロンドン滞在中にその死に遭遇したのである。生之助は，その死亡時の様子や実際に自分が参列した葬儀の模様を，「Thomas Hardy 逝く」と題して，次のように『英語青年』に書き送っている。

Hardy が亡くなった。

かねて病気の由はきいていたが，重患とも伝えられなかったので別に気にもとめずにいたところ，本月十二日の朝の新聞を見ると，大きな活字で訃報が載っているので，今更のように胸をつかれた。辞書と首っ引をして Tess を読んだ頃から何だか好きな人だった。いづれ春にでもなったら Wessex へ巡礼に行って，Max Gate の翁の扉を叩いて見たいと考えていたが，その人今や亡しと思うと淋しい。

英国人は凡てに慎重な態度をとって，棺を覆わなければ論を定めぬのが常であるが，Hardy は八十七という高齢であり，どこから見ても Victoria 朝に属すべき作家であるため，生前からちゃんと文学史に載って批評家の間にも大凡議論はつきていた。だからこん度翁の逝去に際して，*Daily News* には，A. G. Gardiner（Alpha of the Plough），*Observer* には J. C. Squire, *Sunday Times* には Edmund Gosse といった様な顔触れでそれぞれ評伝が掲げられたが，別に新しい意見も出なかった様である。私は翁の死亡と葬送とに関して私の見聞を下に少しく記し

て見よう。

新聞紙の伝うるところによると，翁は一ヶ月ほど前から風邪を引いて床についていたのだそうである。日頃は垂れこめてのみ暮していたのだが，詩作の半ばに inspiration を得んとして杖をひいて散歩に出たのが風邪のもとであったという。床についてからは Dr. E. W. Mann 氏を主治医として一日二回の往診を受け，看護には妻君がまたその任にあたっていた。就辱中も文筆のことは常に念頭を去らず，Reminiscences of George Meredith を書いたり，Walter De la Mare の詩を読ませていたりした。その “Listeners” はわけても好きで最後の二三日の間に数回読ませてぢっと聞き入っていたという。十日の日，彼は Authors' Society に送金すべき期限の来ていることを思い出して，署名はもとより一切の書き入れまで自ら床の中でやったのであるが，これが翁の絶筆であった。十一日の朝は小康を得て主治医も眉を開いたのであるが，夜の八時半頃から容態が急に悪化して，周囲の人々の心尽しもその甲斐なく，九時五分というに遂に身まかった。英文壇の巨星はかくして隕ちたのである。

この偉大なる天才をどこに葬るべきかに就ては大分いろいろのいきさつがあったらしい。Westminster Abbey に埋めたいのは国民の要望であった，しかし一方翁は生前に遺言して，家代々の菩提所であり，翁に先んじて，はやくこの世を去った先妻の眠っている Stinford（小説の Mellstock）のお寺に葬るべきことを求めていた，そして翁の身内のもの（Henry Hardy, Kate Hardy および Teresa Hardy）を始めとして，翁が好んで描いた村の人々もみなこの方に賛成であった。この二つの希望の間に板ばさみとなって Mrs. Hardy は大分心を痛めたらしいが結局心臓を Stinford に埋め，火葬にした遺骨を Abbey に埋めることに compromise が成立して，翁の死骸は心臓をとり出したのち，Woking に送られて火葬に附せられた。棺の上には簡単に

Thomas Hardy, O. M.
Born June 2, 1840
Died January 11, 1928

とあったそうである。

Egdon Heath にうすい霧がかかって，赤い朝日がのぼりそめたころ，翁の遺骸をのせた自動車はしめやかに Max Gate の屋敷を出た。花束は百合のそれが一つ，それには “To my darling, from his wife” とあった。静かな朝である，どこかで thrush がないている。野良仕事に出てゆく村の人々はみんなしばし立ちとどまって帽子をぬいでこの親しい友のかえらぬ旅へのかしまだちを見送った。――このしめやかな光景は翁の小説にでもありそうな場面であったそうである。

一月十六日，きょうは Hardy の葬送の行われる日であった。Stinford ではお天気だったそうだが，London はしとしと雨の降る日で陰気な空気が Westminster を包んでいた。私は学校を休んで Abbey に出かけて行った。

翁の著述の出版を引受けていた関係からか，葬儀万端の世話は Macmillan がやっていた様である。で，ここへ申込むと入場切符が貰えたのであるが，そのことを私がきいた時にはもう遅かった。切符がなくとも千人位は nave へ入れるという事だったから，ともかくも行って見ることにした。North Transept に一時間ほど前からもう大勢人が押しかけている。切符がなければ

名刺を代わりに出せばよいとそばの人が教えてくれたので，その中に交って待っていた。

倫敦でこうした群集の中に立っていると碌なことは耳に入らぬのを常とするが，きょうは流石に Hardy の votaries の集りとあって，何となく話が上品である。翁の作品を論じている人，郷里で翁の散歩姿をよく見かけたと話している人，さては翁の詩集をはなしたことがないと云って，愛誦する詩の暗誦をやっている人もある。扉が開くまで一時間あまり待たされたが，こうしたわけであまり苦にもならなかった。

扉が開くと切符も名刺もあったものではない，みんなどやどやと流れ込んで忽ち North Transept は立錐の余地も残さなくなった。翁の遺骨が葬られる Poets' Corner は South Transept なのだからわれわれのいたところは正面のいい場所であった。Poets' Corner には国王及び皇太子の名代を始めとして，学者，文人，詩人，出版業者，各種文学的団体を代表する人々，Hardy players などの顔がずらりと並ぶ。珍しい集まりである。あとできくと，知名の人でも申込みが遅いと入場の出来なかったのもあったらしく，Arnold Bennett などもやっと入るには入ったが，切符を手に入れるのに散々な思いをした，とあとで *Daily Express* に書を寄せて，ぷんぷん当事者にあたり散らしていた。

一時四十五分になるとオルガンの音がひびき始める。隅から隅まで人で埋められたアベが森とする。やがて金色の十字架を先に立てた葬列が粛々として sanctuary に進む，翁の遺骨をいれた棺は金色の薔薇の縫取をした棺衣につつまれて，そばに付添う所謂 pall-bearers は首相 Baldwin，前首相 MacDonald，G. B. Shaw，John Galsworthy，James Barrie，Kipling，Edmund Gosse，A. E. Housman，Dr. Walker 及び Prof. Ramsay という顔ぶれである。

"Let us now praise famous men and our fathers that begot us. The Lord hath wrought great glory by them through His great power from the beginning... Such as found out musical tunes, and recited verses in writing... Their bodies are buried in peace, but their name liveth for evermore."... 水を打った様な堂の隅々までしめやかな読経がひゞく。

かくして葬列は静々と Poets' Corner に進み，casket はしつらえられた小さな墓穴に葬られた。郷里の身内からせめてもの心遣りにとわざわざ送りとどけて来た Stinford の墓地の土をまづその上に落としたのだという。われわれ North Transept にいる者にはその光景は見る由もなかった。ただ "Lead, Kindly Light" という讃美歌を聞きながら，この寂しいことを考えて一生を終った詩人のために，未来の冥福を祈っていた。

式が終っても会衆は容易に去らなかった，みんな Poets' Corner のその新しい墓にお参りする気でいるからである。私もその中に交って順番の来るのを待っていた。係りの人が大勢で参拝者を順々に追い出している，そうであろう，勝手にさせて置いたら皆が参拝を終るのはいつのことか分るまい。やっと順番が来て棚の外から参拝する，場所は Dickens のそれに近く，Johnson, Thackeray も近所である，一面に花輪で埋められていた。

外に出ると空は曇って短い冬の日はもう暮に近かった。

Dorchester では翁を記念するために memorial と museum とを設立する計画があることを新聞紙は報じている。　(一月二十二日記)[18]

当時，ハーディの死は『英語青年』でも大きく取り上げられ，8回にわたってハーディ特集が連

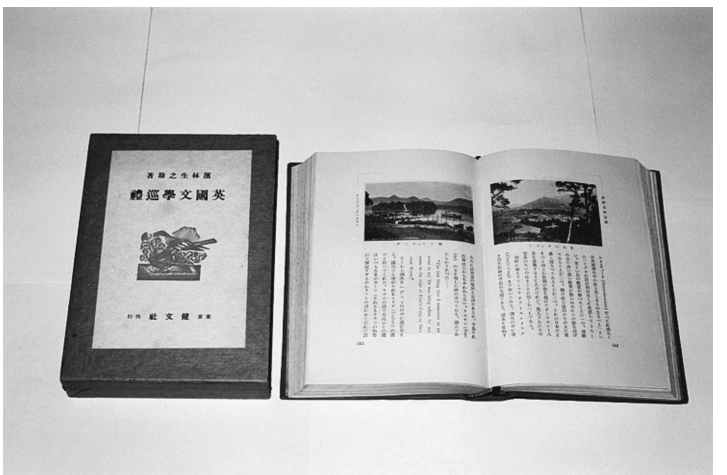
載されている[19]。

生之助はこのあとロンドンを去り，オックスフォードへ移った。彼は後年,「私が牛津へ居を移したのは四月の初め，春まだ浅い頃であった」と記している[20]。

4．文学巡礼の旅

オックスフォードに移り滞英生活2年目を迎えた頃から，生之助は盛んに旅行に出ている。旅の目的は，主として英文学ゆかりの地を訪ねることであった。彼は帰国後，滞英中に訪ね歩いた旅の思い出を『英国文学巡礼』（昭和5年，健文社）という本にして世に出している。これは400ページほどの内容で,「ウェセックス」「牛津及び付近」「レイク・ディスツリクト」「エディンバラ及び付近」「バーンス・カンツリ」「ブロンテ・カンツリ」「剣橋」「シェークスピア・カンツリ」「バース及び付近」「ディケンス・ランド」「倫敦」の章から成り，中にたくさんの写真が挿入されている。生之助はその本のはしがきで,「こうして書きあげて見るとイースト･アングリアがまるで欠けている，デヴォンやコーンウォールも行って見なければならぬところであった，スノードンにのぼってエールウィン・ランドを訪ねなかったことも惜しい，更に欲をいえば足を愛蘭土にのばしてシングの国などを見て来たらもっとすぐれたお土産が出来たであろう，今から考えると心残りは数々あるがその当時はそう遊びあるいてばかりいる事がすまない様に思われてつい機会をとりにがして了った。」と書いている。ここで，この本の記述や他の資料に基づいて，生之助の文学巡礼の足取りを時間を追って辿ってみたい。

彼は，先ず，昭和3年6月下旬から7月下旬にかけて，イングランド北部とスコットランドの旅に出ている。これはレイク･ディストリクトを巡り，エディンバラとその付近を訪ねたあと，スコットランドの国民的詩人であるロバート・バーンズの故郷を訪れ，最後に，ブロンテ姉妹ゆかりの地を訪ねるものであった。『英国文学巡礼』のこれらに関する章を読むと,「私たちは」とか「われわれ二人は」という表現が出てくる。このことから，この旅行は二人で出かけたことが判る。エディ



『英国文学巡礼』（健文社）（昭和5年）

ンバラに着いて素人下宿を訪ねた時，シェトランド生まれというそこのおかみさんのとても分りにくい英語に接する。その時の様子を，生之助は，「同行の伊東氏なにやら考えていたが，ハタと膝をうって，「あの調子をどこかで聞いたと思ったが，やっと考え出した，あれはヘンリ四世の中に出てくるグレンダワのアクセントだ」」と書いている[21]。伊東の名前が登場するのはこの一ヶ所だけであるが，これは伊東勇太郎のことである。そのことは，伊東が『英語青年』に宛てた次のような短信からも裏付けられる。

> キースリより　『小生濱林君と二人で Burns Country に十日滞留，Mount Oliphant，Lochlea，Mossgiel，Ellisland 等バーンズが耕した farm やバーンズ関係の土地を略々探し尽して当 Keighley に参り，昨日尋ね尋ねて Wuthering Heights を見て参りました。ご承知の通り同所はブロンテ一家が住んでいた Haworth から二哩ほど moor の高地を登りつくした所で，それから続く幾里の山々は悉く peaty moorland で荒涼そのもの，陰惨そのものであります。昨日は珍らしくからっと晴れた日でしたが，それでも吹き曝しの Wuthering Heights は咽ぶがごとく泣くがごとき風が嘯いていました。エミリーが Withens の地名に Wuthering という小説名を与えた命名の妙をさとりました。七月二十六日キースリにて伊東勇太郎』[22]

伊東と生之助は前年6月に一緒にロンドンに着いたが，生之助がそのままロンドンに留まったのに対し，伊東はオックスフォードに向かったと思われる。伊東は滞英中『英語青年』にたびたび便りを寄せていて，ストラトフォード・オン・エイボンからの短信（昭和2年8月26日付）には，「Shakespeare Festival で演じられる沙翁劇を見るため二週間前からそこに滞在している」と書いている[23]。また，その年の秋には「牛津より」と題する便りを寄せていて，大学に通って Onions，Wyld，Simpson，Gordon などの講義に出ていること，オックスフォードの秋色には捨て難いものがあることなどを伝えている[24]。彼は大学の秋学期が終ると大陸旅行に出かけ，パリからの短信には，「横浜高商の西村稠教授が倫敦から来合わせて二人して美術館と大革命関係の史蹟とを冬の日の短きをかこちながら探ってあるきました。」と書いている[25]。伊東には，『正述心緒』という歌集があり，その中で，「昭和三年英国留学中，半歳にわたる大陸旅行を了えて，五月上旬ロンドンに帰れば，故国の父はすでに三月廿八日を以て身まかり給いきとの電報，総領事館に来り居りしを，図ずも渡されて，悲傷に勝えず」と述べている[26]。大陸旅行から帰ったあと，生之助との旅行に出かけるまでの足取りは判然としないが，彼はオックスフォードに戻って来たのではなかろうか。そして生之助と再会し，二人はそこで交遊を結んでいたのではなかったか。『英国文学巡礼』の「オクスファド及びその附近」を読むと，伊東の存在を彷彿させる表現に出会う。例えば，「わたくし達は牛津在学中エイツ（ボートレース：筆者註）の賑いを見にゆく度にいつもジュードを思い出してその最後を語り合ったのである。」というくだりがある[27]。オックスフォードはハーディの小説『薄命のジュード（*Jude the Obscure*）』の舞台の一つとなった場所であり，伊東はその小説の全訳を行っていて，それが昭和2年7月に出版されている。この文を読むとき，生之助の語らいの相手はもしや伊東だったのではないかと想像される。

「ワーヅワースが聖地の冒瀆なりと十四行詩（ソネット）でしきりに憤慨した鉄道支線の御厄介になって終点のウィンダミア (Windermere) についたのは六月二十五日の午後二時半，汽車の中から降りだした雨はますますひどくなる計りで止みそうにもない。」『英国文学巡礼』の「レイク・ディスツリクト」

の章はこのような書き出しで始まっている。レイク・ディストリクトの旅は，主に詩人ワーズワースゆかりの地を訪ねるものであった。伊東と生之助はアムブルサイド（Ambleside）を拠点にして，この地をくまなく回っている。一日はライダル湖畔をへてグラスミア（Grasmere）に入り，ワーズワースが住んだダブ・コテジ（Dove Cottage）や詩人が眠る教会の墓地を訪ねた。また，同じ宿に泊まり合せた人たちにケジック（Keswick）へのドライブに連れて行ってもらい，ダーウェント湖（Derwent Water）を眺め，サウジ（Southey）やワーズワースが歌ったロドア（Lodore）の瀧を見物した。また一日，バスでホークスヘッド（Hawkshead）へ出掛け，ワーズワースが通ったグラマー・スクールを訪ねたり，*The Prelude* で歌われている教会を見物したあと，徒歩で峠を越えてコニストン（Coniston）へ出た。峠にかかるころ雨が晴れて，眼下にコニストン湖が光って見える。「いい景色である。こうなるともう足も軽い，傘をたたんで杖にしてすたすたと湖畔まで一と息に降りつく。」と彼は書いている[28]。コニストンではラスキンの墓に詣でたり，ラスキン・ミュージアムを訪ねている。また一日，雨の晴れ間をみて湖畔づたいに歩き，ウィンダミアまで出かけた。オレスト・ヘッド（Orrest Head）に登り，眼下に広がる湖の美しい情景に接したとき，生之助の頭に *The Prelude* の一節が思い浮かぶ。レイク・ディストリクトでの滞在予定日数が尽きてきた頃，二人はアルズウォータ（Ullswater）を訪れている。途中に通ったカークストン・パス（Kirkstone Pass）では，昼となく夜となくこの峠を歩いた詩人に思いを寄せ，また，ブラザーズ・ウオーター（Brother's Water）では詩の情景とはほど遠いひどい雨に幻滅している。レイク・ディストリクトの旅は散々雨に悩まされた旅であった。生之助は章の最後のところで，「降られ通した八日間の雨の徒然に土地の案内記を見ていたら，六月と十月は一番雨の少い時だと書いてあるので吃驚してしまった。それが本当だとするとここではハンブルグの人がいう様に一年のうち三百六十六日雨が降るのかも知れない。」と書いている[29]。

次に二人が向かったのはスコットランドである。「エディンバラ及び付近」の章の冒頭には，「文学巡礼の足が次第に北にのびていよいよ蘇国（スコットランド）へ乗り込んできた。エル・エム・エスのご厄介になって煤けた三等客車でエディンバラへ都入りをしたのは七月三日の午後である。」と書かれている[30]。エディンバラではメドウズと呼ばれる公園に沿った通りの素人下宿を拠点にして，スティーヴンスンゆかりの地を訪ねたり，エディンバラ城や美術館，カールトンヒル，ホーリールード宮殿等を見物した。二人はある日，シャラバン（char-a-banc，遊覧自動車のこと：筆者註）でスコッチ・レイ

ダブ・コテジ（『英国文学巡礼』より）

クスを訪れた。それは，ロモンド湖（Loch Lomond）に沿い，美しいベン・ロモンド（Ben Lomond）を望み，ウォルター・スコットの『湖畔の麗人（*The Lady of the Lake*）』の舞台となったキャトリン湖を訪ねる旅であった。後年，生之助はこの旅のことを次のように書いている。

> スコットランドの旅はさながら青葉の旅であった。ロッホ・キャトリンに向かう途中のツロザックスで，滴るような新緑の間を縫うて行くと，その間からアハレー湖が見えかくれし，時に湖水を隔てて名山ベン・ヴェニューの雄姿をのぞむ風情など，スコットならずとも「湖上の佳人」位書いてみたい気もちになる[31]。

このスコッチ・レイクスの旅は，「エディンバラ及び付近」の章に含まれているためエディンバラから出かけた感を与えるが，二人は，バーンズ・カントリーに入るために滞在したグラスゴーから足を伸ばしている。

このあと生之助たちはバーンズ・カントリーに入った。この章の冒頭，彼は，「グラスゴー（Glasgow）から乗合自動車にゆられて南へ四十哩ほど，途中キルマーノック（Kilmarnock）の町を通ってわたくし達がエアの停留場へついたのは七月十二日の午後四時近い頃だった。」と記している[32]。エア（Ayr）に着いた二人はしらみつぶしに下宿屋を当たるがどこも断られ，やっと商人宿の一室に落ち着く。浜に出ると正面にアラン島，左手遠くにはエアの岬が突き出ていて，夕日を浴びた古城も眺められる。しばらくこの宿に留まり，そこを拠点にバーンズの遺跡を訪ねている。まず二人が行ったところはアロウエー（Alloway）である。そこでは詩人の生家を訪ね，物語詩タモ・シャンタ（Tam o' Shanter）に出てくる廃寺を訪れている。その後，伊東の短信にもあるように，詩人一家が移り住んだマウント・オリファント（Mount　Oliphant），ロッホリー（Lochlea），モスギール（Mossgiel）の農場を訪れている。10日ほど滞在したエアを去り，二人はバスでダムフリーズ（Dumfries）に向かう。生之助はこの旅の情景を次のように記している。

> 途中ニウ・カムノック（New Cumnock）で乗換，サンカ（Sanquhar）で午食をとる。この辺の土地はバーンズが収税吏となってしばしば往来したところ。（中略）サンカからさきはニスの川に沿うて下るので甚だ景色がよい。この川はバーンズの一番すきな川だった。両側の木の美しさ，ホースチェスナットの大きな葉がくれにはもう大分実が大きくなっている。オーク，シカモア，エルムなどいづれも夏のおごりの姿美しく，日の光が青葉をもれて葉かげをパッと明るくする趣は得もいわれぬ。時々その間からニスの河が見えがくれする[33]。

ニス河を下ったこのバスの旅は，生之助にとって忘れ難い思い出になったようで，後年，いろいろなところでこのバスの旅を回想している[34]。バーンズは生涯で4回農場を転住しているが，最後に移り住んだのはエリスランド（Ellisland）である。そこはダムフリーズから6マイルほど離れたところにあり，生之助と伊東は農場近くを通るバスを見つけ出してそこを訪れている。二人が宿を取ったダムフリーズはバーンズが37歳の短い生涯を終えた地である。そこには詩人の墓があり，また，妻子と共に住んだ建物や，友人と一緒に通った居酒屋などが残されている。二人は長かったバーンズ・カントリーの旅をこのダムフリーズで締めくくっている。因みに，この「バーンス・カントリー」の章は，生之助が帰国後，昭和5年1月から4回にわたって『英語研究』に書いた「バーンズの遺跡を訪ねて」と題する紀行文に，筆を加えて掲載したものである。

次に二人が訪れたのはブロンテ・カントリーである。生之助は，章の冒頭，「ここはヨークシャア（Yorkshire）のウエスト・ライディング（West Riding），リイヅ（Leeds）から西北へ十六哩の小さな町，Keighley と書いて，キースリと “th” の音に読ませる乱暴なところだ。」と書いている[35]。二人はこのキースリに宿をとり，翌日バスでホーアス（Haworth）に出かけた。そこはブロンテ一家が住んだ牧師館があり，生之助の筆はこの館で次々と世を去っていった薄命の一家を描いて妙である。伊東の短信にもあるように，二人はホーアスから少し足を延ばし，小説『嵐が丘』の舞台となった場所を訪れている。荒涼としたムアを烈しい風が吹き抜ける。歩みを止めると，嗚咽するような風の音が丘からくぼみへ，くぼみから丘へと伝わっていく。生之助は，「それが七月ももう末の夏の最中である，冬の木枯の頃はどんなだろうかと思う。ワザリング・ハイツ（嵐が岡）の名ある所以であろう。」と述べている[36]。

伊東勇太郎との約１ヶ月に及ぶ旅行を終えたあと，生之助はケムブリッヂ大学での夏期講習に出た。この夏期講習は８月に行われたのであろう。彼は講習を受けるためにこの町に３週間滞在した[37]。ケムブリッヂ大学は多くの有名な文人を輩出しているが，生之助は滞在中町に点在するコレッヂを訪れ，その思い出を各コレッジで学んだ文人のエピソードを交えながら，「剣橋」の章に綴っている。

９月に入ると，彼はウェセックスへの旅に出かけた。それはハーディ文学ゆかりの地を訪ねる旅であった。ボーンマス（Bournemouth）に三週間滞在し，そこを拠点にして，ある時はシャラバンで，ある時は鉄道で，またある時は汽船を使ってドーチェスター（Dorchester），シャフツベリ（Shaftesbury），ウール（Wool），ソールズベリ（Salisbury），ウィンチェスタ（Winchester），ウェイマス（Weymouth），スウォネヂ（Swanage）といった町を訪れている。ドーチェスターにはハーディが長年住み慣れた邸宅や彼の生家があり，郊外の教会には彼の眠る墓がある。そこはまた，『カスターブリッヂの市長（*The Mayor of Casterbridge*）』の舞台ともなったところで，生之助はこの地を訪れるのを楽しみにしていたらしく，「ドーチェスタへついたときは流石に心のときめきを覚えた」と書いている[38]。「ウェセックス」篇にはハーディの作品の引用があちこちでなされ，ハーディ文学に寄せる生之助の思いがよく表れている。のちに彼は，『夏・旅・書物』と題する随筆の中でこのウェセックスへの旅に触れ，次のように述べている。

Max Gate のハーディーの邸宅（『英国文学巡礼』より）

南イギリスの旅では無論ハーディを読んだ。大ていは以前に読んだものだったけれども，親しくその土地を踏んでそこでもう一度読み直して見ると面白かった。

驚いたのはハーディの叙述の精密なことであった。「ヂュード」その他の物語りに出るソールスベリの大伽藍，海水浴場のボーンマス，さてはストーンヘンヂの風光など微に入り細を穿った叙述が，すこしも実物とちがっていないことだ。

彼は青年時代に建築技師を志して，南英のありとあらゆる有名な建築物を見て歩いた経験をもち，その旅行中に跋渉した山野をも手にとる様に知っていたという話であるから，彼の「ウェセックス物語り」はそのまゝ南英の旅行案内になるということを兼々耳にしてはいたが，こんなに忠実な叙述があろうとは現地を踏むまで想像できなかった[39]。

10月に入り大学の秋学期が始まった頃，生之助は小樽高商の生徒に便りを送っていて，それが「英京から――浜林先生近況」と題して高商新聞『緑丘』に掲載されている。

霧の都ロンドンに向けて英語御研究の為に昨年6月留学の途につかれた浜林先生から暫らく振りでお便りを戴くことが出来ました。是れは三年某君への十月十三日付けの私信の一節でありますが，その儘拝借して先生の御近況御知らせの一端としたいと思います。写真は極最近のもので，場所は牛津のツリニティ・カレッヂで撮られたものです。

「秋がきました。木の葉が盛んに散ります。古いコレッヂの壁にまつはるヴァーヂニア・トリーは真紅に燃える様です。これが日本だと青い月を眺めて我が身一つの秋にはあらねどと嘆息するところですが，月なんかにはお構いなしの外国，お昼の様に電気をつけて，ラヂオを聴き乍ら，踊る，はねる，玉突，トランプ，享楽気分の盛んなのには呆れる外はありません。貧乏を看板の留学生は安あがりの生活を余儀なくせられ，古本かって，はしゃぐ人々を欲しそうに眺め乍ら，古人を友に……」[40]

因みに，伊東勇太郎はこの頃ロンドンにいて，帰国の日が近づいていた。彼は，『英語青年』に次のような便りを寄せている。

小生この十二月で在留期限が満了いたしますので十一月廿八日サウサンプトン発英国を立ち米国に一ヶ月滞在，明年一月ニ日の船で桑港から横浜に向います。倫敦も秋意漸く深く風毎に雨毎にペーヴメントに散り敷く街路樹の枯れ葉が掃除人夫を忙しがらせております。今日同宿の瀬川君（四高教授）と Chalfont St. Giles にミルトンの家を訪ねにゆきましたが路傍に立並ぶエルムの木の葉が黄ばみまして風にほろほろと散るけしき金の粉を撒くようで夏の緑とは亦別個の趣があって英国の秋も捨て難いと思いました。（以下略）　十月二十四日ロンドンにて伊東勇太郎[41]

生之助のオックスフォードでの生活については，『英国文学巡礼』に，「最初そこ（レチレード（Lechlade）：筆者註）へ私を連れて行ってくれたのは同宿のパウエル君だった。」[42]「いつかシンフィールド（Shinfield）を見たいと願っていたのであるが，十二月のある日商用で近所までゆく宿の主人にねだって連れて行って貰って遂に望みを遂げることが出来た。」[43] などの記述があり，滞在中は町のどこかに下宿していたのであろう。また，「牛津に来てまづ第一に思い出すのはヂョンス

ンである。（中略）わたくしはヂョンスンの寄宿していたペンブルク・コレッヂ（Pembroke College）に友人がいて時々お茶に招かれて行った」とも書いている[44]。時々，都が恋しくなると日帰りでロンドンに出かけて行った[45]。また，次のような記述も見られる。

> ブラウニングのこの傑作（*The Ring and the Book*：筆者註）に由緒のふかい指輪と書物とがこの地のベーリオル・コレッヂ（Balliol College）に秘蔵せられている由を兼々きいていたが，見せて貰う手つゞきが面倒なので長い間そのまゝにしていた。牛津を去る日が近づいてから，そのころ講義をきいていたリー女史の紹介状を貰って二人で出かけて行った[46]。

この「牛津を去る日」がいつであったかは明らかでないが，少なくとも大学の秋学期が終るまではその地に滞在していたと思われる。

年が明けて昭和4年（1929年），この年の2月に生之助はヨーロッパ大陸を旅行している。彼はのちに『緑丘』に「ゲーテ百年祭に因みて」と題する文章を寄せ，その中で，「ドレスデンからミュンヘンに向う途中ライプチッヒで汽車を乗り換え，ワイマという小さな田舎町へ着いたのは，今から三年前の二月五日もう日も暮れ方に近い頃でした。」と書いている[47]。ワイマールを訪れた目的は，ゲーテが住んだ家や彼の別荘（ガルテンハウス）などゲーテゆかりの場所を訪れるためであった。生之助はしきりにゲーテの偉大さに感嘆し，次のように記している。

> ある意味に於てゲーテは沙翁以上である。何となれば，成程沙翁は英文学の頂上に立ってはいるが，その周囲には幾多の小さな山がある。彼の前にはチョウサがある，スペンサがある，同じ時代にもベン・ジョンスンがある。そうした伝統をうけてこの上に彼の偉大を築いた沙翁に比較すると，ドイツ文学の建設者として，ほとんど独力の徒手空拳で沙翁の塁を摩すほどの高峰をうちたてたゲーテの天才は世にも珍しいものと申さねばならぬ[48]。

昭和5年発行の校友会誌『緑丘学人』には，「旅のおもいで」と題する生之助の文章が掲載されていて，フィレンツェを訪れたときの思い出が綴られている。そして，その最後が，「二月半ばのイタリアの旅の思いで」という言葉で結ばれている[49]。また，「ルーブルを何度訪れたか知れない」とも書いていることから，この欧州旅行のときもパリに滞在してルーブルへ行ったのであろう。

欧州旅行を終えたあと，生之助はシェイクスピアの生地であるストラトフォード・アポン・エイボン（Stratford-upon-Avon）を訪れている。ここは以前にも来たことがあるらしく，『英国文学巡礼』の中で次のように書いている。

> 「どこが一番気にいりました？」
>
> わたくしが欧州の遍歴を終って二度目にストラトファドを訪れたときに以前知り合いになったその地の誰彼がこういって私に訊いた。
>
> 「そうですね，景色からいったらネイプルスなどはいゝところでしょう。青い空に煙を吐いているヴェスーヴィアスがあの湾に影をひたしている姿はまるで絵の様です，しかし町は汚くて落付きがない上に，人がずるくてその点はいやなところでした。歴史的の連想からいうとフロレンスは一番なつかしい町でした，しかしアルノはエーヴォンとは比べものになりません。景色の点ではここは駄目です。風光の明媚と史的の連想と人情の純朴と合せそなえたところと

いえばストラトファドより外にはありません。だから僕はまたこゝへかえって来たのです」――こう流暢にいったかどうかは請合いかねるが，ともかくもわたくしはこの様な意味のことを答えたのであった[50]。

4月23日はシェイクスピアの誕生日で，ストラトフォードではこの日を中心に祝賀行事が行われる。祝賀週間の日曜日には特別の儀式が行われ，生之助も町長の招待でその儀式に参加した。タウン・ホールから教会まで警官を先頭に，消防隊，楽隊，町長，参事会員，町会議員などが行列をなして歩む。教会では沙翁誕生の特別説教が行われ，式が済むとまた行列を組んでタウン・ホールへ戻り，祝杯をあげる。23日の誕生日には，各国の代表者が広場でそれぞれ自国の国旗を掲げ，日本の旗は駐英大使の手で掲げられたという。それが済むと皆が行列を組んでシェイクスピアの墓へ参って花を捧げた。午後は茶の会があり，夜には記念の特別興行が行われ，『空騒ぎ（*Much Ado about Nothing*）』が演じられた。会場は満員で，息ぐるしいほどの大盛況であったという[51]。生之助はストラトフォードの雰囲気がよほど気に入ったらしく，次のように書いている。

単にコスモポリタンな都会というだけなら外にいくらもあるだろう，しかしストラトファドほどインテレクチュアルでしかもコスモポリタンな町は少かろう。それはそこに沙翁という大きな共通点があるからだ。ともすれば外国人としてのけものにされ，されなくともされているだろうとひがみをもつわれわれもこの地をふむと一切こんな偏見から解放されて沙翁の一崇拝者としてみんなと肩をならべる，そのアトホームな感じは異郷の游子にとっては忘れがたく嬉しいものである[52]。

また，エイヴォン川のほとりの風景も心に残る思い出となったらしく，次のように記している。

英国は木の美しい国である，“leafy Warwickshire” と呼ばれるこの地方はわけても美しい樹木が多い。そうしてたまたまそれが清らかな水を伴うときはそこに言い知れぬ詩趣が生まれる。エーヴォンのほとりの美しい所以である，大詩人を生むにふさわしい所以である。わたくしは暇あるごとにこの川のほとりに出た，そうして岸辺をそゞろ歩いたり，水の上に舟を浮かべたりした，あるときはひとりで，またあるときは友だちとうちつれだって。

ヘンリ七世の御代にクロプトンが架けたという古い石橋がある，その上から見た夕ぐれの川ぞいの景色は忘れがたい思い出である。沙翁もいく度かこゝに立って行く水に思いをやり，岸の草花のめでたきを賞したことであろうと思う。狂乱のオフィーリアが舞台へもって出る花束の雛菊（デージ）や三色菫（パンジー）や迷迭香（ロウズマリ）や菫（ヴアイオレツト）や小田巻草（コラムバイン）はみんなこのあたりに咲く草だ。「斜に生えた青柳が白い葉裏を河水の鏡にうつす岸」などもこの川ぞいにはざらに見あたる景色である[53]。

生之助は，ストラトフォードを拠点にしてチャールコト・パーク（Charlecote Park），ウォリック（Warwick），ケニルワス（Kenilworth），コヴェントリ（Coventry）などに足を延ばしている。ウォリックでは有名なウォリック城を訪れ，古色蒼然としたその城の印象を，「欧州の旅では伯林や巴里の近郊で随分多くの城を見たが，フォンテンブローのナポレオンの離宮をのぞいてはこれほど立派な御殿を見た事がない。」と書いている[54]。

同じく4月に，生之助は西部地方を訪れている。『英国文学巡礼』の「バース（Bath）」の篇には，

エーヴォン川のほとり（『英国文学巡礼』より）

「ヴィクトーリア・パークには花が一面に咲きみだれていた。（中略）きょうは四月の二十八日である」の記述があり[55]，旅程を考えるとこの旅行はストラトフォードの旅のすぐあとに行われたものであろう。ブリストル（Bristol）とカーディフ（Cardiff）には特に感興を催さなかったようだが，廃墟となった寺院を見るために訪れたティンターン（Tintern）では，ワイ（Wye）川に沿って展開する美しい景色に魅了され，また，ティンターン・アベ（Tintern Abbey）では，昔の僧院の生活が想見できて興味深かったようである[56]。

生之助は，ロチェスタ（Rochester），チャタム（Chatham），カンタベリー（Canterbury）などチャールズ・ディケンズの作品の舞台となった場所や，ディケンズ自身が住んだ地を訪れている。それらはロンドン郊外，あるいはロンドンから日帰り圏のところにあり，ロンドン滞在中にこうした場所に足を延ばしたのであろう。ロチェスタは『ピクイック・ペイパーズ（*Pickwick Papers*）』や『エドウィン・ドルードの謎（*The Mystery of Edwin Drood*）』の中に出てくる町で，生之助がそこを訪れたのは英国での滞在も残り少なくなった頃であった[57]。因みに，ロンドン滞在中，彼は幾度か住まいを変えている。ロンドンに着いた当座はハムステッドに住んでいた。『英国文学巡礼』の中で，「わたくしは一ときサウス・ヒル・パークにいて」とあるのは，ハムステッドの住まいのことであろう[58]。そのあと，『緑丘』に宛てた便りの中にあるクロムウェル・アヴェニューに移ったのであろう。生之助が使用した大英図書館の入室許可証が残されていて，そこに記されている住所もクロムウェル・アヴェニューとなっている。また，チヂック（Chiswick）にしばらく住んだこともあった[59]。

時はずっと下るが，昭和 58 年 12 月発行の小樽商大同窓会報『緑丘』に，大庭定男氏が「ロンドンに残る緑丘人の筆蹟」と題する一文を寄せている[60]。氏によれば，ロンドンの日本クラブには昭和 4 年から 11 年までの来館者署名簿が残っていて，氏がその名簿を繰っているうちに，I. Hamabayashiというサインを見つけたという。生之助は 3，4 回そこを訪れているそうである。当時の日本クラブは談話室，ビリヤード，食堂などを備えた立派なもので，滞在者や旅行者にとっても何よりの憩いの場所であったらしい。そのクラブを訪れた人々のなかには，後年名を成した政治家，作家，実業家などが数多くいるという。そこはクラブのため非会員は会員の紹介がなくては入れず，生之助は加地幸一の紹介で来館しているそうである。加地は生之助の教え子で，小樽高商を大正 12 年に卒業し，当時，堀越商会の駐在員としてロンドンにいた。彼は，生之助の滞英中よく

行動を共にしていたらしく，のちに，留学中の生之助の思い出を次のように綴っている。

> 浜さんの会話は正確無比で，よく英国人の英語が文法的に誤りだらけで聞くに堪えぬというので，会話の途中で直してやっていたが，彼自身の英語は抑揚に乏しく，英国人には必ずしも聞き易くなかった。それでいて愉快な冗談や，辛辣な皮肉を連発するので，初めの頃は私は側にいてハラハラしたことが多い。それは冗談や皮肉が仲々一回で通じない。冗談や皮肉と言うものは，二度も三度も説明したり敷衍したりしては，興が醒めるものである。あとでは大分上達し，あるいは経験で先方に判ること請合いの奴だけをやるので百発百中，浜さんの wit は有名になった。英国人の間の浜さんの pet name は Hama だったが，「Hama は透き通る頭の持ち主だ」と言われたのを数回聞いた。
>
> 三十七年前の浜さんのこんな英国での話が未だ耳に残っている。ある英国の田舎の学校で，校長が生徒に声高らかに『ハムレット』は誰が書いたのかと叫んだ。指された生徒は校長の剣幕に恐れをなし，急に泣き出し，「私が書いたのではありません」と嗚咽した。その生徒は帰宅して父親に，今日校長先生にひどく叱られた旨を伝えた。父親はどうしたのかと問うたので，生徒は「校長は『ハムレット』は誰が書いたと私を指したので，私が書いたのでないから，わたしではないと答えた」と言ったら，父親は色をなして，「お前が書いたのなら正直に書いたと言いなさい」と怒ったと言うのである。英国人一般が如何に英文学に無知であるかという諷刺で，浜さんの原作ではないが，浜さんの性格には打ってつけの皮肉で，よく英国人に披露していた。留学土産の一つだったかと思う。
>
> 私はその頃，悩みが多かった。郷里では父が事業に失敗した後病死し，六人の弟妹が大学から中学に在学中であった。毎日の仕事も赴任怱々で大変であった。浜さんは「永い人生から見れば，いまの我慢と奮闘は血となり肉となるだろう」といつも慰めてくれた。実は，それにも増して毎日私を悩ませていた下宿での習慣があった。この事も先生に相談した。当時の英国は，未だビクトリア王朝の習慣が残っていて，毎日の会社への通勤は，黒の上着，縞のズボン，それに山高帽という姿であった。夕方帰宅すると，汚れのないシャツやカラーに取り換え，必ず髭を剃り，頭髪を梳り食堂へ行って主婦に挨拶し，一同揃って祈禱をして食事をする習慣であった。私は会社の責任者であったので，早く帰ることが難しく，退社の時間は不規則で，夕食は毎夕の如く滑り込みだった。髭を剃らないで食堂に行く，昼着ていたシャツの儘で食卓につく，しかもそれが祈禱の済んだ直後の滑り込みであったりしたから堪らない。初めは主婦に対する敬意が欠けるという不満が，後では主婦に対する侮辱だという事に発展し，不機嫌を通り越して喧嘩になる。半ばヒステリックになった婦人を相手に，英語で毎日喧嘩をする事は，そう簡単ではない。時々浜さんに応援に来て貰った。しかし浜さんの英語も喧嘩用ではなかったので，余り利き目はなく，「これでは君が可哀想だから，俺の下宿に来い」ということになり，早速浜さんの下宿に移ってしまった。そこに四年いた[61]。

加地によれば，生之助は模範的な留学生で，当時ロンドンでは評判であったという。

生之助はロンドンのことを，「ヴィクトーリアへ着いたそもそもの始まりからウォータールーを発つときまで，はなれてみたり舞い戻ってみたり，ともかくもまる二年間外遊中の中心地」であったと書いている[62]。

5．妻の実家と留守家族

ここで，生之助の留学中，家族が身を寄せていた一枝の実家と，生之助の子供たちのことに触れておきたい。先に書いたように，一枝の父岡田辰蔵は当時斎宮村で町医者をしていた。彼はもともとこの斎宮村の出身で，明治元年（1868 年）に森ノ内捨松・みふの二男として生まれている。明治 23 年に大阪医学校（大阪大学医学部の前身）を卒業したのち岡田ゑいと結婚し，岡田家の分家という形でゑいの実家の近くで医院を開業していた。ゑいは明治 5 年の生まれで，生家は地主であり質屋なども営んでいたという。親類には当時松阪の有名な木綿問屋があり，ゑいは叔母の養女になってその商家を継いでいた時期があった。ゑいは辰蔵とは 2 度目の結婚であった。後年，息子の稔は母親のことを，「家庭の複雑な事情に巻き込まれて，生涯結婚生活に人知れぬ傷を受けていた」と書いている(63)。辰蔵とゑいの間には 6 人の子供が生まれている。長女一枝は明治 29 年の生まれで，生之助とは 9 歳年下である。彼女は当時松阪に創設されたばかりの郡立飯南女学校（現松阪高校）に学んでいる。一枝はその第一回卒業生であり，卒業生名簿には「旧姓白塚」と記されている。戸籍を見ると，明治 43 年 3 月に松阪町日野町の白塚大三郎祖母ちゑへ養子縁組をしており，大正 2 年 4 月には養子縁組を解消している。一枝が白塚家の養女になった理由は，養子縁組をしていた期間が彼女の女学校の在学期間と一致することから，通学の利便性を考えてのことであったと思われる。飯南女学校は創立の翌年に郡立実科高等女学校と改められ，当時の学則には，「生徒ハ自宅ヨリ通学スルモノノ外其宿泊所ニ就キテハ学校長ノ許可ヲ受クベシ」とある(64)。現在では，一枝の実家があったところのすぐ裏を近鉄が走っていて，斎宮駅へは徒歩で数分のところであるが，その頃はまだ近鉄（戦前は参宮急行電鉄）はなく，女学生にとって斎宮村から松阪への通学が困難であったことは想像に難くない。両親にすれば，一枝が白塚家の養女となり，そこから女学校へ通う方法を選ばせたのであろう。

一枝のすぐ下の弟は忠亮といい，戸籍上は二男となっている。長男は生後間もなく死んだのか，戸籍には記載されていない。忠亮は明治 33 年の生まれで，地元の第四中学を卒業後，府立大阪医科大学予科に進学し，大正 14 年に大阪医科大学（現大阪大学医学部）を卒業している。支那事変が勃発すると軍医として従軍し，その後もずっと外地にいたが，昭和 20 年 4 月，ルソン島のバギオにあった陸軍病院が爆撃を受け，その時受けた傷のため死亡している。三男稔は明治 35 年の生まれで，小学校 6 年生のとき自分から進んで大阪市築港の他人の家に養子に入った。しかし，稔はその家が馴染めず，市岡中学を中退して実家に戻ってきた。父辰蔵は黙って稔を受け入れたという。帰って来てからあちこちの学校に編入学を試みたがどこも受け入れてもらえず，結局，大正 7 年の春，宇治山田商業の 2 年次に入学を許可される。稔は山商在学中，日本基督教団山田教会で開かれていた英語のバイブル勉強会に通い始めた。当初は英語の勉強をするのが目的だったようだが，聖書の魅力にすっかり取り付かれ，大正 10 年の 7 月には洗礼を受けている。当時山商のクラスには前回名前の出た西川正巳がいた。西川もこの英語バイブルの勉強会に出ていたという(65)。二人が在学中に学制が改まり，宇治山田商業は甲種商業学校となったため，在学期間が一年延びることになった。西川は大正 12 年の春，6 年がかりで山商を卒業したあと小樽高商に進学し，そこで生之助と出会うことになる。一方，稔は卒業を待ちきれずとうとう山商を中退し，大正 11 年の春，神戸神学校の予科に別科生として入学している。稔が神学校への進学を決めて山商を中退することを両親に打ち明けた

とき，両親は反対した。とりわけ母親は猛反対した。「この伊勢神宮のお膝元からキリスト教徒を出すとはご先祖さま，村の人たちに顔向けできない」，ゑいはこう言って，岡田本家を継いだ自分の弟の助力を借りながら，必死に説得を試みたという。後年，稔は，「私は夜十二時を更けるまで，本家の土間で（部屋に上がりもせず）この苦手な叔父を相手に懸命の論戦を戦わせました」と書いている[66]。稔が入学した神戸神学校はその後大阪神学院と合併し，神戸中央神学校となる。彼は2年間の兵役をはさんで，昭和3年にこの神学校を卒業している。その後，牧師となり，戦後は神戸改革派神学校の校長を勤め，昭和42年からは四国学院大学教授になっている。そして，平成4年，数多くの著作を残しながら89歳で亡くなっている。稔によれば，父辰蔵も学生時代には教会に通っていたそうであり，晩年結核で療養している時も聖書に親しんだり，説教集などをよく読んでいたという。稔は生之助の思い出を次のように語っている。

> 私は導かれて神戸神学校に入りました。それは大正十一年のことです。その後間もなく義兄は英国に留学することになって，神戸港から船出されたのですが，その時は波止場に見送って甲板の上で記念の写真をとりました。また横浜に帰朝された時にも姉たちのお供をして出迎えたものです。(中略)義兄は広島時代に一米人から受洗はしたが，キリスト教信仰は持っていない。ただ文学書として聖書は愛読しているというようなことを私に話された記憶があります。私のところに泊っていて「一寸コンコーダンスを見せろ」と言うので「私は持っていない」と答えると「それでよく牧師ができるなあ」とあきれていましたが，神学校を出たばかりの伝道者には，まだそこまで手が届かなかった頃のことです[67]。

稔の下に喜久子（次女）と左武郎（四男）が生まれている。喜久子は一時生之助夫婦が小樽で預かっていたことがあったが，郷里に戻ったあと，大正14年に18歳で亡くなっている。その翌年には左武郎も16歳の若さで亡くなっている。いずれも結核による死であった。辰蔵は自分が医者でありながら次々に病魔に倒れていく我が子を救うことができず，悶々と日々を送っていたという。その辰蔵も昭和13年に，結核のため70歳で世を去っている。ゑいについて，稔は，「私が，母の姿に女らしさ母親らしさを一番感じさせられたのは，この二人の末っ子の死んだ時だったと思います。」と書いている[68]。

生之助の留学に伴い，一家が小樽の官舎を引き払って一枝の実家に来た時，4人の子供のうち年長の春雄は小学一年生を終える頃であり，末子の正夫はまだ一歳半に達していなかった。春雄は実家近くの斎宮小学校に転校している。生之助が英国滞在中，次女照子に宛てた次のようなカタカナの手紙が残されている。

> テルチャン
>
> オテガミヲアリガトウ，マダガッコウヘモユカナイノニ　タイソウヨクカケマシタ。ゴホウビニ　ロンドンノ　ドウブツエンノ　エハガキヲアゲマス，ナニトナニダカアテゝゴランナサイ，ウマクアタッタラ　オカアサンカラ　ゴホウビヲイタダキナサイ。四ガツカラ　ガクカウヘイクノデセウ，ウレシイネ，カバンヲカッテモラヒマシタカ。エムピツヤ　フデイレハ　タクサンウチニアリマシタネ。
>
> エハガキヲ　トシニモスコシワケテヤリナサイ。マサオハワケナシダカラ　ムリヲイフテモ

妻と子供たち（左から照子，正夫，一枝，春雄，俊子）

ゴメンシテヤリナサイ，ソシテ　イロイロナコトヲ　オシヘテヤリナサイ。
　アタタカイヒハ　ナルベクソトデアソビナサイ。

父ヨリ

　テルコサマ

この手紙の日付けは不明であるが，文面から，照子の小学校入学が近くなった頃に書かれたものと思われる。照子は大正10年12月の生まれであるから，入学は昭和3年4月である。従って，生之助がオクスフォードに移る前，まだロンドンにいる頃に宛てたものであろう。

生之助がいつイギリスを去って帰国の途についたかは明らかでないが，ニューヨークから家族に宛てた絵葉書が残されていて，その日付けは「1929年6月23日」となっている。生之助が横浜港に着いたのは昭和4年（1929年）8月2日であった。（つづく）

註

(1)　『緑丘（浜林生之助先生追憶特集号）』1964．No. 35，p. 3.
(2)　小樽高商新聞『緑丘』1927年（昭和2年）1月26日.
(3)　『緑丘五十年史』1961．小樽商科大学，pp. 38-40.
(4)　『緑丘（手塚寿郎先生特集号）』1967．No. 55，p. 28.
(5)　『大野純一先生追想集』1983．「大野純一先生追想集」刊行会，pp. 173-4.
(6)　小樽高商新聞『緑丘』1927年（昭和2年）5月5日.
(7)　小林象三「ランダンより緑丘へ」小樽高商新聞『緑丘』1930年（昭和5年）10月13日.
(8)　『緑丘（浜林生之助先生追憶特集号）』1964．No. 35，p. 6.
(9)　『英語青年』Vol. 44．No. 11，p. 347.
(10)　『英語青年』Vol. 45．No. 2，p. 62.
(11)　官報124号（1927年（昭和2年）5月31日）及び『英語青年』Vol. 56．No. 12，p. 429.
(12)　浜林生之助「英京の宿から」小樽高商新聞『緑丘』1927年（昭和2年）10月18日.

⑬　小林象三「ランダンより緑丘へ」小樽高商新聞『緑丘』1930年（昭和5年）10月13日.
⑭　『英語青年』Vol. 58. No. 6, p. 211.
⑮　『英語青年』Vol. 60. No. 1, p. 30.
⑯　小樽高商新聞『緑丘』1928年（昭和3年）2月8日.
⑰　小樽高商新聞『緑丘』1927年（昭和2年）12月19日.
⑱　『英語青年』Vol. 59. No. 1, pp. 8-9.
⑲　『英語青年』Vol. 59. No. 1-8.
⑳　浜林生之助「思い出すことなど」小樽高商新聞『緑丘』1940年（昭和15年）7月25日.
㉑　浜林生之助『英国文学巡礼』1930. 健文社, p. 166.
㉒　『英語青年』Vol. 59. No. 12, pp. 429-30.
㉓　『英語青年』Vol. 58. No. 2, p. 69.
㉔　『英語青年』Vol. 58. No. 7, p. 234.
㉕　『英語青年』Vol. 58. No. 11, p. 393.
㉖　伊東勇太郎『正述心緒』1965. 丹桂書房, p. 112.
㉗　『英国文学巡礼』, p. 86.
㉘　同上, p. 151.
㉙　同上, pp. 160-1.
㉚　同上, p. 165.
㉛　浜林生之助「思い出すことなど」小樽高商新聞『緑丘』1940年（昭和15年）7月25日.
㉜　『英国文学巡礼』, p. 189.
㉝　同上, pp. 216-8.
㉞　「思い出すことなど」（昭和15年7月25日『緑丘』）や「新緑のおもいで」（昭和9年5月30日）の中で言及している。
㉟　『英国文学巡礼』, p. 235.
㊱　同上, p. 248.
㊲　同上, p. 260.
㊳　同上, p. 9.
㊴　浜林生之助「夏・旅・書物」小樽高商新聞『緑丘』1937年（昭和12年）6月19日.
㊵　小樽高商新聞『緑丘』1928年（昭和3年）12月5日.
㊶　『英語青年』Vol. 60. No. 6, p. 225.
㊷　『英国文学巡礼』, p. 122.
㊸　同上, p. 88.
㊹　同上, p. 95.
㊺　同上, p. 118.
㊻　同上, p. 113.
㊼　浜林生之助「「ゲーテ百年祭」に因みて」小樽高商新聞『緑丘』1932年（昭和7年）4月26日.
㊽　同上.
㊾　浜林生之助「旅のおもいで」校友会誌『緑丘学人』1930, pp. 21-3.
㊿　『英国文学巡礼』, pp. 277-8.
(51)　同上, p. 291.
(52)　同上, pp. 280-1.
(53)　同上, p. 298.
(54)　同上, pp. 300-1.

(55) 同上，p. 322.
(56) 同上，pp. 324-6.
(57) 同上，p. 346.
(58) 同上，p. 386.
(59) 同上，p. 366.
(60) 大庭定男「ロンドンに残る緑丘人の筆蹟」『緑丘』1983．No. 56，p. 26.
(61) 加地幸一「師弟の情に厚かった浜さん」『緑丘』1964．No. 36，pp. 8-10.
(62) 『英国文学巡礼』，p. 357.
(63) 岡田稔「私の神学的自叙伝」『岡田稔著作集』1993．いのちのことば社，第5巻，p. 374.
(64) 『松阪高等学校九十年史』2000．県立松阪高等学校，p. 8.
(65) 西川勉編『ひとすじの道――西川正巳遺稿集』1973．p. 9.
(66) 岡田稔「私の神学的自叙伝」『岡田稔著作集』第5巻，p. 375.
(67) 『緑丘（浜林生之助先生追憶特集号）』1964．No. 35，p. 28.
(68) 岡田稔「私の神学的自叙伝」『岡田稔著作集』第5巻，p. 374.

（この伝記を書くに当たり，今回も多くの方々のお世話になった。とりわけ，尼崎市在住の岡田忠良氏，高知市在住の鈴木純さま，三重県明和町在住の岡田隆郎氏からは貴重なお話を伺うことができた。また，浜林正夫氏には写真や色々な資料をお借りした。記して感謝の意を表したい。）

附録

英国まで

――鹿島丸船中にて

濱林生之助

（一）船出

昭和二年五月十二日、命をうけて英國留學の途に上る、まづミスリ〳〵と參らう。

十日の夜は奈良ホテルに泊つて外に客がないのかと思はれるほどひつそり閑とした大建物の一室にピシンと錠を下して心ゆくばかりに快眠を貪つたが、十一日は、生れ落ちるから眠り慣た疊にしばらくの別れを惜しむとあつて、神戸の驛に近い、とある宿屋に案内される、女中が茶を運んで來たり、どてらを貸してくれたり、「お疲れでございませう。」といつて番頭が挨拶に來るのを、床柱を後ろに大胡坐をかいて、鷹揚にあごで受け流す氣もちは、ホテルで女中に室を教へて貰つたきりてんで相手にされないのとは雲泥の相違だが、さて寢るという段になると、どこかで客の聲高に話す聲が氣になつて寢つかれない、朝はふと眼をさますと室中がが〳〵してゐるので、正午の出帆に乘り遲れては醜態だと慌てて飛び起きると、何の事まだ六時にもなつてゐない、見ると室の明るいのも道理、南向きの障子の外は一面の硝子戸になつてゐて、初夏の太陽が一杯にそれを照してゐる、ホテルではカーテンやらブラインドやらが三重に窓をふさいでゐて、このまゝ寢たら窒息するだらうと考へたから、上の窓をあけたことを思ひ出す。おまけに、顔を洗ふときに、何だか頸から胸のあたりにかけて痛痒い様な氣がするので、よく見てみるとまた南京虫に食はれてゐる。またといふのは二度目だからである。ずつと昔、まだ神戸の宿屋に南京虫がゐることなどは夢にも知らなかつたころ、知らぬが佛で瀬戸内海通ひの紅丸（くれなゐまる）から上陸するとすぐ水に近い宿屋に泊りこんで一晩中この虫に惱まされたことがある、それ以來神戸の宿ときくと身震ひをしてゐたのだが、なあにそれは港附近だけのことさ、と知つたかぶりに人のいふのを眞にうけて、この邊なら大丈夫と町の眞ん中に寢た結果がこの通りである。因にこの食はれたあとは、門司を出て響灘から玄海灘、楊子江へ入つて黄浦江を上つて下つて、支那東岸の諸島を右舷に眺める臺灣海峽の邊まで癒らなかつたものだから、いま〳〵しなんどいふばかりでない。こんな虫に包囲攻撃をされて、こんなまぶしい室の中でぐつすり眠れるお客さん達に對して多大の敬意を表すると同時に、ホテル式の厳重な固めをせなければ熟睡の出來ない自分が可哀相になる。

之を要するに、日本式の宿屋にもいゝところがあるが、洋式のホテルの方が勝れた點もある、それと同じ様に日本もいゝが、西洋の方がいゝところもある、外國へかしま立ちの首途に、日本の宿屋に多少愛想をつかしたのは幸か不幸か、これでまづ在外中に懐郷病にもかゝるまい。

それはさうとして、支度が出來たらそろ〳〵船に乘り込むとしよう。

歐洲航路の船客は神戸から乘る人が多い、僕の船室（キャビン）でも四人の中三人まで神戸で乘船した、だから神戸の埠頭は歐洲通ひの船が出る日にはごつた返す様な大賑ひを呈する。

一人の船客に平均十人の見送り人がある、それに赤帽がつく、テープ賣りが交る、大變な騒ぎである。自分の荷物がどこへどうなつたのやら分らない。久々で會つた友人に「御機嫌よう」と「左様なら」とを一しよにいつてゐると、いつの間にか船と突堤との間に、蜘蛛の巣の様なテープの網が張られてゐる。赤や青や白や黄やが縦横無盡に錯綜するのはいかにも派手には相違ないが、

君がゆく海邊の宿に霧立たばわがたち嘆く息と知りませ

と詠んだばかりで見送りにも來なかつた萬葉の人々にもすて難い情趣はある、何しろ變つて來たものだ。

手に握つたテープが緊張する、と思ふともう船が動き出してゐるのであつた。下には眼にハンケチをあてゝゐる婦人も見える、一寸變な氣もちになる。まことに意氣地のない話ながら事實だから致し方がない、あとで聞くと外の連中も平氣ぢやゐられなかつたと白狀してゐたから、僕ばかりぢやなかつたとみえる。

船が速力（スピード）を出すと突堤の人影が次第に小さくなつてゆく、それでも人垣は崩れない、船の上でもみんな欄干にかぢりついてゐる。もう誰が誰だか見わけがつかなくなつてもまだ双方から帽子やハンケチを振つてゐる。肉眼では見へなくなつたころ午餐の銅羅が鳴つたのを機會に、みんな諦めて食堂に下りる、この時始めて相（ファミリー・バセンヂア）客の顔を見渡す。

（二）船客

横濱から乘つた大野さんが

三日の長とあつて得意顔に船中を案内してくれたり既知の船客に紹介してくれたりする。その中に佛蘭西へ飛行術を研究にゆく金子さんがゐる、獨逸語を研究にゆく文留の川本さんがゐる、この二人はあとからも名が出るから一寸こゝで讀者諸君にも御紹介して置く。

あとは文留が大部分らしいが始めのうちはよく分らない、西洋人は五六人ゐる丈、日本人の方が壓倒的大多數なので、日本語で大いに國威を發揚してゐる。

同じ食卓に着物ならお化粧ならあくまでも毒々しい娼婦型の女が二人向ひあつてゐる、いやな奴だ。西洋人だつて好きな人もあれば嫌ひな奴もある、この二人とは僕は彼等が上海で上陸するまで遂に一語をも交へなかつた。聞くともなしにその話をきいてゐると、怪しげな英語で、マニラに七年ゐて上海に八年ゐたとか云つてゐる、まだ瀬戸内海を走つてゐるのだが、こんな話をきくともう日本を出た様な氣がする。何をしてゐる女かしら。ふとコンラッドの描いた化粧の女、「そりあ初戀はねえ、だけどあとの男は……」と言葉を切つたアニのことが頭に浮ぶ。

（三）門司

門司で上陸した時カバンをあけられたのは一寸意外だつた。

雨の降る中を案内されて早鞆海峡を見たり、下の關に渡つて安徳帝の陵に詣でたりする、大野さんは疲れたと云つて川卯（かはう）で寢てゐた。

夜は學校の卒業生に招待されて門司クラブで支那料理を御馳走になつた、卵を腐らせたのがうまいんださうだが、素人には本當の味は分らない。

（四）上海

門司を出てから二日目の朝起きて甲板に出ると船はもう楊子江に入つて、支流の黄浦江を遡つてゐる。隨分汚い水だ。兩岸には滴る様な楊柳が微風に靡いて、ところ〴〵に支那風の建物や洋館が隱見してゐる、沃野千里といふのがこれだらう、どつちを向いても山の影も見へぬ。あとで聞いたら、上海から二時間位汽車に搖られて行かぬと山の見へるところまで行けないさうな、以てその廣袤（くわうばう）を知るべし。

各種各國の船がうぢや〳〵碇泊してゐる間を縫ふて下のブイに船をつなぐ。「一番危険險なところですからお荷物に氣をつけて下さい。」とスチュワードが一々注意して歩いてゐる。外に出ると支那人の汚い奴がもうどや〳〵と上つて來てゐる、船員が「お前は物を盗むから入つちゃいけないぞ」と申し渡してゐる、隨分物騒な所らしい。

三井物産の佐々木さんに案内して貰つて上陸、生れて始めて外國の土を踏む。

普通にバンドと呼ばれてゐる河岸通りには正金銀行だの香港上海銀行だの莊麗な建物が並んでゐる。それだけなら別に珍しくもないがその綺麗な建築を背景にして汚い支那人が大勢うよ〳〵してゐるのは一寸外では見られない圖だらう。井上正夫のヂャンバルヂャンよろしくといふ様なむさくろしい奴にも時々出會ふ。

お晝は卒業生に招待されて四馬路の杏花樓（アンフーロー）で支那料理をご馳走になる。この邊は「茶館、酒樓、戯園等軒を並べ、夜は滿街不夜城と化して絃歌さんざめく群集雑沓の巷」ださうだが、僕の眼に映じた四馬路は――昔銀座の中央に岩谷天狗の眞赤な店があつて、勿驚（をどろくなかれ）税金二百萬圓といつた風の無暗に毒々しい廣告や色彩が行人の眼をそばだてしめた、この種の店が軒を並べて毒々しさを競ひ、その間を世界中の人種がめい〳〵勝手な風をして歩き廻つてゐるものと思つたらまづ大差なかろう。

圓卓をかこんで次から次へと運ばれる御馳走を突き合つてたべる。支那料理は、既に門司で卒業ずみだが、本家本元で喰べるとまた格別の味がする。中に家鴨の全煮（まるに）といふのがあつて、どこでも食べられるといふ話だつたから、いゝ加減に箸を突込んで引つぱり出すととさかがそのまゝの形でついて居り、鈍い眼球が光つてゐる頭だつたので、大野令夫人の忠告に從つてこれは箸をつけずに割愛した。

こゝを出てから自動車でぐる〳〵と市中を見てあるく。薪公園では日本の陸戰隊が練兵をやつてゐた。さつきから繁華な町の眞中に鐵條網が張つてあつたり、土嚢が積んであつたりするのを見て、多少心元なくなつてゐたのだが、元氣のいゝ海軍の兵隊さんを見てやれ〳〵と思ふ。その調練を見ながら佐々木さん盛んに軍國主義を説く。

翌日船の出帆迄にもう一度上陸して南京路をぶらつく。大野さんに令夫人、金子さんに川本さんに僕と一行五人である。俥夫がうるさくつけまとふ、大野さんが一々これに「不要（ブヨー）！不要（ブヨー）」と挨拶してゐる、序ながらこれは大野さんが知つてゐる唯一の支那語である。

上海の貨幣はいろ〳〵あつて贋金も少なからず流通してゐるから旅客は注意が肝要だとどの案内記にも書いてあるが、本物を見たことがないの

だから贋金の見分けがつく筈はない、注意が肝要かも知れぬが注意のしやうがない。金子さんは、「これ駄目！」と突き返されて、始めて贋造貨幣を珍らしさうに見て「とう〳〵つかまされた」と喜んでゐた。

上海の町には印度人の巡査がゐる、銀行會社の入口にも必ず一人づゝ威風堂々と立つてゐる、一ケ月二十五弗（ドル）位で雇つてあるのださうだが、支那人の鼠賊を追つ拂ふには屈竟ださうな。この印度人は非常に日本人に好感をもつてゐるから何か事があつたらこれに頼めと教へて貰つたが、別に印度人を煩はす様な悶着も起らなかつた。四辻を横ぎるときに、印度人の交通巡査がわれ〳〵に向つて「危い！左様なら！」といつた、あの顔で存外の愛嬌家ではある。

船は四時に出帆したが、このとき近くに碇泊してゐたわが「桃」や英艦の「アーガス」が飛行機の襲撃をうけたことを香港へ來てから聞いた、それから黄浦江が楊子江に合するところの呉淞（ウーソン）沖で近く南北の會戰があるといふ記事を讀んだ、やれ〳〵危いところだつた！

（五）ヴエラ

上海から楊子江の河口までは四十浬ある、海に出ないうちに日が暮れてしまつた。尤も呉淞（ウーソン）沖で潮待ちをするとあつて二時間近くも船をとめてゐた。

源を西藏（チベット）に發する楊子江は流域三千里、兩岸がかすかに見えてゐるのはたしかに雄大だ、暗くなつて水の汚いのも分らなくなつてしまつた、折から東の波間から大きな月が躍り出る、僕が十五夜の滿月だといふのを、上海で値切らなくてはすまない様に癖づけられた大野さんが、一日値切つて無理矢理十四日にして了ふ。

楊子江畔の月の出、仲麿のやうなセンチメンタルな氣分にならないまでも少しは詩情が動きさうなものを、これまた意外、この天地の壯觀を前にして、微風に顔をなぶらせながら、船尾の甲板では甚だ穩やかならぬ話がはづんでゐる

事の起りはかうである。

この船の特別三等に一人の英國の女が乗つてゐる。名をヴエラ・バーゼスといつて今年十八、日本人に連れられて東京に來てゐたのが父親が病氣になつたので、一人旅をして家に歸るのだといふ、生れは倫敦（ロンドン）のサレーサイド、癖の無い分りやすい英語を話す女だ。ヴエラは教育はあまりないらしいが、日本で仕込まれたせいか、天性お轉婆なのか、ともかくも英國人にしては珍しく愛嬌があつて誰にでも話し相手になるのが取柄とあつて到るところでもてゝゐる。

ヴエラは横濱から乗船したのださうな、神戸につく迄は日本人の獨占で、どうせ向ふへ行つたら先生をとつて會話の練習をしようといふ連中うまい奴を捕まへたと後生大事に機嫌をとつていゝ氣になつて稽古臺にしてゐると、月にむら雲、神戸から乗つたスコットランドの連中數名、揃ひも揃つていゝ老人のくせにすつかりヴエラを自分達のものにして了つて、日本人の先取特権を侵害した、この恨みをどうして晴らさうかといふのが話の中心である。

中でも一人のデップリ太つた五十男、話の様子では年中海に出る船頭らしいのが、しつつこくヴエラにくつついて、檻の中の虎みたいに甲板の上を連れ立つて行きつ戻りつやつてゐる、あいつを毒殺してはといふ議が起る。毒殺は愚にして拙だ、一體船中で毒殺といふ法は無い、板（プランク）を歩かせるとかマルーンと云つて島へ置きざりにするとか然るべき方法がいくらもある、少しはスチーヴンスンでも讀むがいゝといふ抗議が出て毒殺説はお流れになる。海の中へほうり込むのはどうだらうといふ説が出る、楊子江は恐ろしい河で下の方に逆流があつて渦を卷いてゐて落ちたが最後助かりつこは無いさうな、何と名案ではござらぬかと提案者が鼻をうごめかしたが、猫の頸に鈴をかけるのと同じで、相手が強さうなのに恐れをなして、誰一人自分がやらうといふものがないのでこれも自然消滅、結局はそんな直接行動をとらなくとも三寸不爛の舌を揮（ふる）つてうまくヴエラをこつちに引きつけ様といふ穩健説が勝ちを制して、呼び出しの役は、馴染の古いところから大野さんが相つとめることになつて、漫談會は解散した。

潮が變つたのか船が動き出す、月はもう三竿の高きにのぼつてゐる。

「汝は今晩八時にわれ〳〵の茶話會に加はるであらうか？」と大野さんが交渉して來る。氣を利かしたつもりのスチュワードがどう感違ひをしたものか、八時にヴエラを僕のキャビンに連れて來たので僕は湯上りのだらしないところを見つけられて少々面喰らつた。

船中、あみだくじといふわけにも行かないのでめいめいに思ひ〳〵のものをもちよつて甲板でコンパをやる。ヴエラを中心にして話の花が咲く——といふと聞えがよいが、實は會話篇の始めの方を音讀してゐる様な体裁と思へば大した間違ひはない。

一人、二人と仲間がふえて、

グループが段々大きくなる。あとから來た英學者の一人がヴエラに「お前ヂョーヂ・エリオットは好きか。」と無理なことを訊く。ヴエラのいふ「彼(ヒー)は非常に面白い。」いかさまヂョーヂは男の名だ。まづこの程度の女と思へばよろし。

その中に毒殺され損つたデブさんまで出て來る、仕方がないから仲間に入れてやる、話して見ると仲々面白い親爺だ、毒殺するのは可愛想だ。怪しい文句のうたをうたつてきかせてから今度はお前の番だと隣りの人をいぢめてゐる。この邊の体裁總て洋の東西に變りはない。この親爺、誰も名前を知らないので不便で困る。何とか名を附けやうぢやないかといふ相談が出てピクヰツクはどうだといふと、ヴエラが「勿體ないわ。」といつた。勿論これは僕が勝手に日本の女の言葉に直したので實際は「彼はそれに値せぬ」といつたのだがともかくもピクヰツクを知つてゐるのは感心だ。とう〳〵ヴエラが一晩考へてこの親爺に羊飼(シエパド)の稱號を奉ることになつた、ヴエラ自身が小羊(ラム)でその番をするからださうだ、成程さういへば狼らしい奴もその邊に澤山ゐる。

その外ヴエラはいろんな人にいろんな渾名をつけてゐる、が、横柄な女、高慢夫人などは隨分知慧がない、何といつても教育がないのだから致し方が無い。しかし教へることに興味をもつて、下らないことを何遍でもくり返してくれるから、成程會話の先生には倔强だらう。度々こんなコンパをやらうぢやないかと約束してその晩は閉會した。

（六）香港　上

上海を出てから三日目の朝まだき船は香港の港に入る。入口左手にむき出しの大砲が三門僕たちの艀(はしけ)を睨んでゐる。「大砲をかくして置いて寫眞を撮るな、なんて、日本みたいなケチ臭いことは英國は云はねいぞ。寫眞なんか撮りたけりゃいくらでも撮れ」と羊飼(シエパド)が香港の總督みたいな顔をしていふ。けれども船の掲示板には「撮つちやいかん」と出てゐたから、とう〳〵撮らなかつた。

香港は丁度雨期の眞最中である。しばらくは町も山も一面の霧に包まれてゐたが、そのうち霧が晴れてゆくと左手の山麓に沿ふて蜂の巣みたいに穴だらけの四角な建物が並んでゐる町が夢の樣に姿を現はす。「仙境(フエアリ)の(ランド)魔法(オブ)城(ヂヤンチヤンテツド・キヤスル)を見るやうだ。」と僕がいふと、ヴエラが傍から「わたしも丁度さう思つてゐました。」といふ、人の眞似をするな。

その中船がとまる、例によつて汚い支那人がどや〳〵入りこんで來る。甲板に出てみるとマッチの軸で賭博を始めてゐる。賭博は彼らにはお茶を飲むのと同じださうな。しばらく見てゐると、同じ二等に乘つてゐる教育のあるらしい支那の青年が傍に來て「賭博(ギヤンブリング)か?」と訊く。「さうだ。」といふと「困つた癖だなあ、どこでゞもこんな事を始めて。」と眉をひそめる。文字通りの列國環視の中で、かうした同國人の醜態を眼の前に見せつけられてゐる青年の心に一寸なつてみる。

香港の見物は自動車で島のぐるりを一周してピークに登るのがお定まりになつてゐる。僕たちも例の五人で案内人に連れられて文字通りのお上りさんとなる。

棧橋を出たところがクヰインス・スクエアでその右手にはクヰインス・ビルディングだのプリンセス・ビルディングだの、丸ビル式のでかい奴がいくつもならんでゐる。雨がぱら〳〵降つてゐるのでその軒下で自動車を待つてゐると、通りがかりの支那人が無雜作に紙片を突きつけて金子さんを驚かす。何だといふが分らない、紙片を見るとアレキサンドリア・ホテルと書いてある、ホテルを尋ねてゐるのらしい、例のいかめしい印度人の番人に引渡してやる。生れて初めて上陸したばかりの人間をつかまへて道をきくとは氣楽な奴だ。

自動車にのつてドライヴに出かける、蜂の巣の中には人間がうぢや〳〵うごめいてゐる、これが總督の邸宅で、これが植物園で、これが醫科大學で、と案内者が一々説明してゆく。町をはなれてからも道の綺麗なことは變らない。東京の眞中に入れても勿體ないほどの道路を惜しげもなく山の中へ縱横に通してゐる。ヂョン・ブルは生れつき頑固で、一旦方針をきめたら徹底的にやり通す性格である上に、金が豐富なのだから、日本人が競爭しても叶はない。この島だつて隨分氣候の惡い、それこそ瘴癘(しやうれい)の地だつたんだが、不屈不撓の努力でとう〳〵自然を征服して了つたんだ、いま〳〵しいほどしつこい奴だ。

一時間半ほどのドライヴですつかり島を廻つて了つた。丁度雨が晴れ間なので、ケーブルカーに乘つてピークに登る。車内に掲示があつて、前の席は總督及隨員の席だから閣下がお出のときはかけてはいけないとある、御威光ぶりにまづ敬意を表する。

こゝの軌道は一部平坦なところがあるので、車躰の構造は普通の電車と變りがない、この點は日本で今方々にやつてゐるケーブルカーと多少趣を異にしてゐる。從つて傾斜の急なところへ來ると、窓か

ら見へる建物がみんな傾いて見へる。大野さんは扇を糸で吊して見て妙だ妙だと喜んでゐる。

終點で下りると支那人の駕屋が大勢ゐる。そこが八合目位で、そこにまた山を鉢卷に卷いてゐるアスファルトの道がある。それを五分の一ほど歩いて山の上から蜂の巣を見下す。折よく空が晴れて香港の町が手にとる樣に見へる。この人口は五百萬あります、と案内者がいゝ加減なことをいふ。そんなにあるものかと多數決できめてしまふ、尤もたしかなことはこちらも知らない。いや誰も知るまい。上海できいたときは百萬乃至二百萬といふ答へであつた。乃至はよかつた。國勢調査をやらないから致し方がない。

町の上を舞つてゐる鳶が足の下に見へる、港に輻輳してゐる船の上を飛行機が二三臺飛んでゐる、それも遙に下の方だ。金子さんがお得意の飛行機の講釋を始める。朝飯をとらなかつた令夫人のお腹に氣兼をして、山上の展望を割愛して降る。

千歳ホテルといふ日本人經營の旅館で晝飯をたべる、まだ日本を出てから十日にもならないのにそんな畳の上をなつかしがる。そろ〳〵船の洋食に厭きて來てゐる際とて、とろろ汁や香の物も馬鹿においしかつた。

案内者を追つ拂つて五人で勝手に町を歩く。大野さんが、海岸通りを走つてゐる二階の電車ダブルデカーといふ奴を珍らしがつて是非乘つて見たいとせがむので十仙（セント）奮發して二階に乘る。冷しくそして安く町を見物するのにはいゝ方法だ。勿論この電車がどこへ行くかは誰も知らぬ、兪園と書いてあるから大かた遊園地の樣なところへ行くのだらうと見當をつけてゐる丈で、下されるところまで行く氣で冷しい顔をしてゐる。

競馬場まで來ると、修繕中の道路が通行止めになつてゐるので否應なしに下されて了ふ。少しあるくと墓地に出た、一寸入つて見る。金子さんはめかして新しい靴を穿いたものだから豆が出來て困つてゐる、大野さんは無暗に喉をかはかして、墓地内の噴水の水を飲みたいといひ出す。墓地を出て誰もゐない競馬場の觀覧席で休憩する。かうしてゐると豆はいゝが、喉はます〳〵ひどくなる。仕方がないから、競馬場の殘りを半分廻つてまた電車の二階に乘つて町の中央迄歸つた。

（六）香港　下

大野さんの喉に敬意を表して、電車を降りると早速安樂園といふ料亭に上つた、令夫人の威光で婦人室に通される。

ボーイがメニューをもつて來る、見ると九品あつて八十仙とある、馬鹿に安い。その分量がまた頗る驚くべきもので、これだけあつたら僕の樣な上品な人間なら優に二日分の食糧はある。支那人はこれをみんなたべるのか知らんと今更の樣に驚嘆する。

デザート・コースに入ると、ボーイが「珈琲か、お茶か？」と訊ねに來る、代りにアイスクリームを食べやうと衆議一決したのでボーイにさういふと「變へられない（ノー・カン・チエンヂ）」といふ。變へられないのは承知だ、別にお金を拂ふんだよ、といつてやると分つた樣な顔をして引下る。しばらくすると又やつて來て「珈琲か、お茶か？」と訊く。「アイスクリームだよ。」といふとまた「ノー、カン、チエンヂ！」分からない奴だ、こいつ英語を知らぬと見へる。みんなでいろ〳〵にわい〳〵いふと、それでも到頭アイスクリームをもつて來た。

勘定をもつて來たので「日本の金をとるか？」と訊くと、勘定書の説明を始める、アイスクリームの代が計上してあるのを小言をいふとでも勘違をしたらしい。こんな奴を相手にしても仕方がないから、收銀處といふ札が出てゐる勘定臺にゆく。書き附けを見せて「日本の金をとるか」ときくと、また説明を始める、こいつも駄目と見へる。仕方がないから紙幣を出して見せる、いけないといふ、金子さんが磅（ポンド）の金貨を出して見せる、矢張りいけない、英領でも英貨は通らないのと見へる。向ふではしきりに「外（アウトサイド）、外（アウトサイド）」といつてゐる。外で兩替をして來いといふらしい。

「兩替屋はどこだ」ときく、矢つ張り分からない。最後のランチが八時だのにもう七時半を廻つてゐる、困つたことになつて來た。仕方なくみんなが揃つて出てゆくと店の小僧が先に立つ、さては此奴が案内するのと見へる。馬を附けるといふことがあるが、こんな調子かなと考へる。半町ばかり行つた煙草屋へ入る、金を替へるかときくと、いくらでもといふ、商賣柄だけあつてこいつ仲々流暢に英語を話す、始めて明るみへ出た心もちになる。

立て替へつづきで金子さんはもうすつかり邦貨をきらして了つた。この邊で一つ精算をしようと、船へ歸つてから喫煙室で計算をやる。この計算が上海以來うつちやつてあるので面倒なこと夥しい。甲が邦貨で出したのもある、乙が上海の墨銀で拂つたのもある、兩の香港の金へ甲乙の上海の金や邦貨を兩替して足したこともある。上海では邦貨一圓で一弗（ドル）六仙（セント）だつた、香港

では邦貨一圓が九十四仙（セント）だ。考へるほど分らなくなつて來る。平生金融だの貨幣論だのと金のことばかりいつてゐるくせに、邦貨一圓は凡て一弗（ドル）の計算にしようと大野さんが亂暴なことを云ひ出す、異議もあつたが、さて簡単に計算する。名案も浮ばないので、とう〳〵この横車が通つて誰が損をしたのか得をしたのか分らず了ひに終る。

翌日は十一時の出帆だといふのを、大野さんと二人切りで、トースト丈けで朝飯を棄権してまた買物に上陸する。

香港や上海の金を殘して置くのが厭なのである丈使つて了ふことにする。

郵便局を出ると香港の五仙貨幣一つ殘つてゐた。それで道ばたの煙草屋で煙草を買ふ。錢を出して、ゴールドといふ煙草をとると煙草屋の親爺がうなづいて見せる。向ふには異議はないらしいがこちらに損があるかも知れない。ドラゴンといふのをとる、矢つ張り默つてゐる、ネイヴイカツトをとるといけないといつて指を八本出す、八仙なんだらう。どうも過不足なしといふところを見つけるのは骨が折れる。グローブをとつて大野さんが「幾何（いくら）」と書いて見せる、さつぱり通じない、この親爺無學と見える。諦めてグローブにする。その次には大野さんが日本の銅貨を二つ出してこれで一箱せしめ様とする、親爺承知しない、こんな煙草屋には勞働者相手の卷煙草の一本賣りがある、そんな箱が三つ口をあけてある。大野さんそれに眼をつけてそれから二本ぬき出す、親爺が默つてゐるのでもう二本ぬき出す、中々圖々しい。あとできくとこの一本賣りは矢張り二本で一仙なんださうだが、日本の一錢はこゝの一仙には通らないんだから、それだけはこの親爺損をしたわけだ、大野さんも罪な人だ。

こん度は大野さんのもつてゐる二十五仙（セント）で俥屋をひやかす、「棧橋！」といつて二十五仙（セント）出してみせるといけない、指を三本出す、そんなには金が無い。その中よい鳥が來たとでも思つたものか四方から車夫が集つて來る。日本でいつたら一寸丸の内といつた様なところで汚い車夫の包圍攻撃をうけたのは些か面喰らつた。二人で二十五仙しかないとも知らないで摑み合はぬばかりに奪ひ合ひをやつてゐる奴もある。大野さんうろたへてしきりに「不要！不要（ブーヨー）」と唯一の單語を振りまわすが一向利き目が無い、無いのも道理、香港では同じ意味を「無配（ムーペイ）」又は「無有（ムーユー）」といふのださうな、錢も同じだ、手を振りながらやつと圍みをぬけて出る、腋の下から汗が出た。でもしまひにとう〳〵目的を達して一人十仙（セント）づつで棧橋まで支那の俥に乘つて見た。

香港は上海ほど物價は安くないが秩序の維持されてゐることは上海とは比較にならぬ。旅客は安心して一人歩きが出來る。俥夫だつて無暗にねだりはせなかつた、それでも泥棒町といふのがあつて公々然と臓品の販賣をやつてゐて、自分の盗られた品と判然しても金を出さぬと手に入らないさうな。時計なんか嘘みたいに安いから行つて御覧なさいとすゝめられたが馬鹿らしいから行かなかつた。日本のやうに無暗と警察の威張る國も満更悪いことばかりではない。

十一時蜂の巣の町にわかれを告げて出帆する。

（七）新嘉坡まで

香港まで來ると急に暑くなつた。寒暖計は八十度位なんだけれど、濕氣の多いせいか非常に身にこたへる、キャビンの中へ入るとむつとする、これから寢苦しい夜がつゞく様になつた、これで終りまでからだがつづくか知らと心細いことをいふ人も出來て來た。

かう暑くなるとそろ〳〵禮儀が亂れて來る。ワイシャツを着てダブルカラをつけてゐるのがいかにも苦しい。西洋の女の涼しさうな服が羨ましくて仕方がない。「あいつ等生意氣だ、われ〳〵にこんな窮屈な思ひをさせて」とそろ〳〵不平が出る、國にゐると自分達も女に重いお太皷を脊負はせてゐることは棚にあげてゐる。

御承知の通り船のお湯は鹽水だ、こいつに入つて出て來ると汗がとめ度なく出る、ダブルカラなど思ひもよらぬ、といつていくら浴衣一枚でもキャビンの中は狹苦しい。遂に最も勇敢なのが思ひ切つてそのまゝ甲板に飛び出すと、待つてましたといはぬばかりに續々と浴衣姿が甲板に並ぶ、よくぞ男に生れけるとばかり、碧い眼の女どもを尻目にかけて、甲板椅子（デッキチェア）の上にふんぞり返ると、煙は遠く波をかすめて、浪の彼方は呉か越か、明月に似た太白がきらきらときらめき出す。

衣食足つて禮節を知ると孔子様が仰しやつた、成程衣食足るのはその第一條件には相違あるまいが温度の適當なこともたしかにその一條件だ、流石に西洋の紳士達も欄干のエナメルが溶けて着物にくつつき出すとたまりかねて運動シヤツで胡魔化し出す、中にはネクタイまでさぼつてゐる奴もある。

日本人では夕食後洋服を着てゐるのは一人もなくなつた。着物がゆるめば氣もゆる

む、左黨は更に蜀を望んでビールを呼ぶ、醉ひが廻ればもう孔子樣とは緣が切れる。デカンショがはじまる、はては安來節の合唱とあつて合唱隊（クワイア）が甲板の一隅に陣どると、スチューワードが帽子をざるの代りにして怪しい鰌掬（どぜうすくひ）の踊りが始まる。お弟子さんの晝寢を叱つて糞土の牆（しやう）は塗るべからずと仰しやつた聖人がこれを御覽になつたら何といはれるか知ら。

マルセイユまでの四十日をただ遊ぶのは勿體ないと僕は大分慾ばつていろ〳〵仕事をもち込んで來たのだが、二三日經つとそれは絶對不可能だと分つた。第一は落付いて仕事をする樣な場所がない、第二には少し仕事にかゝると矢張り氣分が惡くなる。それに暑さが加はつてからはからだ一つをもてあまして、寢不足の重い頭をぐらつかせてゐるのだから碌なことの出來る筈はない。仕方がないからデツキゴルフをやつたり、麻雀をやつたり、晝寢をしたり、漫談をしたりで一日をつぶしてしまふ。岡でみんなが一生懸命やつてゐるのを考へると、甚だ相濟まぬ氣がするが、目的地に向つて進行するといふ仕事丈はやつてゐるのだから外はまづ止むを得ぬと妙なところであきらめをつける。

尤もどこでもみんな同じ狀態らしい。甲板椅子でゐねむりをしてゐる、ぽかんと海を眺めてゐる、たまたま本を讀んでゐるかと思ふと大衆文藝位が落ち、西洋人の見てゐる本だつて横に書いてあるだけで、縱に書き直したら講談倶樂部位のところだ。喫煙室に入つて見ると花合せ、麻雀、チエス、トランプ、それからビール、呆れてものがいへない、なに、僕は何をしてゐるかつて？、僕は、そのそれかういふ狀態を視察してあるいてゐるのさ。

香港から大分澤山西洋人が乘りこんだので一等の方では兎角日本人が壓倒され勝ださうな、そして双方ともツンとしてぎこちない思ひで日を送つてゐるといふ。われわれの方は特三をいれて西洋人と日本人と略（ほゞ）同數でしかも頗る平民的に交り合つてゐるから一向窮屈な思ひはせないですむがあまり品のよいのが少いのは少々悲觀する。

羊飼（ヒツジかい）で通つてゐる船長は世界を跨にかけて何十年かを海で送つた古强者だ。上海から乘つた片目の親爺は漢口の落武者で、喰つき相な恰好をしていつもマドロスパイプを放さぬところはどうしてもデイケンスにありさうな奴、その外朝からウヰスキーをあほつては痰ばかり吐いてゐる髪の毛の薄い男、上陸する度にトフヒーを買つて來てはヴェラの機嫌をとつてゐる顎の無い男等等、碌なのはゐない。此奴等みんなシルヴァの手下で、いつか僕たちを縛りあげて凄い文句を並べる海賊の一味ではないか知らと時々考へて見る。この荒くれ男の中に交つて、學校に行くため倫敦に歸つてゆくといふ十二のイーヴァが海で捕へたカナリヤを飼ひならして手にのせてパンや菜つ葉をたべさせてゐるのはレフレツシングな光景だ。

この海賊共が、相手になつてやればいゝ氣になつて、夕食がすむといつもウヰストに呼びに來るのはいゝとして、同じ身分とでも思つてゐるのか、お前、お前と仲間扱にする、見損つて無禮を申すな、かう見へても我輩は日本政府の命をうけてお前達の國へお前達の生活を研究にゆく留學生だ、かうして他愛もなくお前達とトランプを弄んでゐる間にでも絶えずお前達に觀察の眼を光らせてゐるのだ。

二十四日正午の報告には北緯七度五十七分と出てゐる、夜甲板に出て見ると北極星が地平線にくつつきさうになつてゐる、思へば一路はるけくも來つるものかな、あすは未明に新嘉坡（シンガポール）に入港する豫定だ。

（八）新嘉坡

午前六時新嘉坡（シンガポール）に入港する、と忽ち名物の錢拾ひ、カヌーに乘つた素裸の黑い奴が舷側を目がけて集まつて來る。銀貨を投げてやるとつと飛び込んで拾つて來るのは別に珍らしくもない藝當だが、卷煙草をくはへてゐる奴が矢庭に火のついた方を口に入れて、飛びこんで拾つて上つて來ると、すましてそいつを口から出して氣樂さうにすぱりすぱりとやるのは些か珍とするに足る。「あいつ等黄色い唾を吐くよ」と大野さんしきりに妙なことを感心してゐる。

九時過ぎに例の五人で上陸した。新嘉坡は自動車で駈廻るべき町である、ぢつとしてゐるとすぐ汗が滲み出る。町をかけぬけてゆくといろいろの臭ひが鼻をうつ、支那人街特有の臭ひ、甘つたるいパインアプル罐詰工場の臭ひ、胸の惡くなるゴム會社の臭ひ、すぐ頭に來るカレーの臭ひ等、等。

町には種々雜多な人種がのらりくらりと歩いてゐる、支那人、マレー人、印度人、日本人それに白人種、まるで世界人種博覽會を見るやうだ。眞黑なのは印度人の一種ださうな、茄子みたいに黑光に光つた見事な奴が時々眼につく、佛像は色もそのまゝにあらはしたものぢやないかと不圖考へた。但し悉達太子は元來金枝玉葉のおん身でもつとお白く在した筈だが。

町をはなれると椰子の林に出る、これがタンヂヨン・カトンだ。六七丈もあらうといふひよろ長い椰子の木が矗々（ちく）と立ち並ぶ林の中を走つてゆくと、何だか野蠻人になつてしまつたやうで、運轉手自慢のドウヂがとんだ時代錯誤の樣な氣がする。

そのうち水源地に出た、青い池の向ふにこんもりと茂つた森がいくつも並んで、ひつそりと靜まりかへつてゐるのが何となく物凄い。何萬年と落ち積んだ朽葉に磁氣が生じてこれに觸るれば忽ちに生命を失ふといふ恐ろしい熱帶の森の物語を思ひ出す。「この奥には鰐が住んでゐて時々出て來ます」と案内者がとんだ打こはしをいふ。壯美と滑稽とは相距る僅に一歩のみ、これで僕の空想は滅茶滅茶にされてしまつた。

水源地を出てからゴム園を訪ふてゴムの採取方法や製造法を說明して貰ふ。

こゝで一旦切りあげて旅館で晝飯をたべてから、ヂヨホールに出かける。ヂヨホールはヂヨホール王國の首都で新嘉坡から十八哩、その間を工場のベルトをのばして敷いた樣な黑いつや〳〵しいアスファアルトの道がつづく。その上をドウヂが快く滑る、兩側にはゴムの林がはてもなくひろがつてゐる。

新嘉坡とヂヨホールとの間の海峽にはコーズウエーが築かれてゐてこの島を半島につないでゐるが、その兩端には稅關があつて土人の役人が見張りをやつてゐる。阿片の密輸出入などは中々嚴しく取締るのださうな。第一の關門では若い番人が「お通りなさい！（ゴ・アヘッド・マスタ）」と云つたきりであつたが第二の關門では自動車をとめて中をぢろ〳〵のぞいた。

自動車はヂヨホールの王樣の宮庭へ遠慮なく入つてゆく、いかめしい歩哨が立つてゐるが何ともいはない、宮殿の前を通ると中では何か催しがあるらしく、輕快な音樂の音が聞へてゐた。

それから回々教の會堂を見た、堂は大理石の素晴らしい建築だが、中はがらんとして說教壇の外何もないのは何だか少し物足らぬ氣がした、番人にお禮を二十仙やつたら「テレマカセ」といつてにつこりした、「有り難う」といふ意味ださうな。

その次には國王の墓所を見た、大理石の立派なものだ。丁度土人が二人經典を開いて鼻唄でもうたふ樣な調子でお經を讀んでゐた。五分ほど前に覺えたばかりのテレマカセを早速役僧に應用してこゝを辭した。

新嘉坡（シンガポル）へ歸つて植物園を見た、熱帶植物が一と通り集めてあるらしく、その道の人が見たら貴重な研究資料が豐富にあるのだらうが、悲しいことには無學で豚に眞珠だ。それに說明が小さな札に書いて木の根元に立ててあつたり、まるきり無かつたりするので、いよ〳〵豚と眞珠との距離が大きくなる。造花みたいな大きな蘭の花や、お化けみたいな羊齒類に脅かされた位をお土產にしてこゝを出る。この植物園には野生の猿が澤山ゐて春日神社の鹿みたいにぞろ〳〵集まつてくるのは可愛らしかつた。

こゝを出てから僕は一人一行と別れて永福氏に招かれて行つた。氏は大規模な漁業をやつてこゝに住むこと十三年、土地の事情に精通してゐるので、町の内外をドライヴしながらいろんな說明を聞かして貰つた。船に歸つたのは十一時だつた。南十字星（サザンクロス）が南の空に光つてゐた。

（九）ペナン

ペナンは可なり下らないところだ。蛇寺や極樂寺のつまらないことも已に定評がある。けれどもぢつとしてゐると暑くてたまらないから贅澤な納涼をやる氣で、自動車を駆ってどの位つまらぬものか、見にゆく例の五人である。

蛇寺は生きた蛇を本堂にうぢや〳〵飼つてゐるのでこの名がある、隨分奇拔なことを考へついたものだ――といつて了へばもうそれでおしまひだ。役僧が手眞似で蛇に卵をやれといふ、五十錢奮發してやつたら、そのまま蛇のそばの箱の中にいれて置く、これぢや同じ卵を何回も賣るのかも知れない、人を馬鹿にしてゐる。

途中ところどころに學校があつた、こいつを一つ參觀しようと衆議一決したが、その意味を運轉手に傳へるのには一寸骨が折れた、この先生たち二人とも土人で、知つてゐる英語といつては、商賣上の蛇寺（スネークテムプル）と極樂寺（オヤイニーズテムプル）の外には、警察署（ポリーススステーション）と鐵道（レールウエー）と學校（スクール）だけらしい、就中ポリーススステーションは非常に得意で前を通る度に教へてくれる、ステーションをスタイションと發音する。一體こんな小さい町にいくつポリーススタイションがあるのか知ら、こんな奴には上等の英語では駄目だ、遂に一策を案じて「スクール、ストツプ」とやつて置いたら、感心にとある學校の前でとめてくれた。

「お邪魔をしてすまぬが授業を見せてくれまいか」と入口にゐた若い教師に頼むとこの男には英語が分らぬと見えて奥の方から校長さんをつれて來た、校長は流石に偉い、早速來意を諒して快く承諾してくれた。

五人でぞろ〳〵入りこむ、

小さな學校だ、一室に四學級をみんないれて一所に教へてゐる、教師は二人一組は生徒の優秀なのが教へてゐた。學科はいづれも算術、土語でやつてゐるのだから言葉の内容は分らぬが、一組は分數の寄せ算で生徒は中々よく活動してゐた。校長さんに聞いたら、就學は七歳から十一歳まで滿四ケ年の義務教育、授業は午前中三時間といふ事であつた。

その次には世界動物園と看板だけは馬鹿に大袈裟な動物園に入つた。入場料一人前四十仙は高い、もつとまけろと大野さんが例の手で談判したが、番人が「駄目、駄目」と笑つて取合ない、こいつ感心に日本語を知つてゐる。

中は猿の種類だけが馬鹿に多い位のもので別に珍しい動物もゐなかつた、鰐の子が汚い池の中で晝寢をしてゐた。上野のは安いな、と遠いところから感心してこゝを出る。

極樂寺前で自動車を降りた時土地名物の驟雨に會つて長い石段を駈けあがつたのは苦しかつた。このお寺は土地名物の一つになつてゐるが、それは回々教ばかりの半島に佛寺とあるので珍らしいものになつたので、われ〳〵の様に佛教國から來たものには何の奇もない、只支那人が中でたべ物を賣つてゐる位がわが國のお寺と變つてゐる丈だ。

東洋ホテルで自動車を返して晝をたべた、海沿ひの宏莊な建物で食堂の大廣間も感じがよかつた、只一つスープがカレーの辛いのだつたのには驚いた。

こゝを出てからランチの時刻にまだ少し間があるので例によつて土人の店をひやかす、一つ二十仙の椰子の實を十仙にまけろと大野さんが身振り可笑しく談判してゐる、近所のたどんみたいな子供が集まつて來て面白そうに囃し立てる、みんなが包圍攻撃のそば杖を喰ふ、漸く云ひ値の二十仙を投出して圍みを衝いて出た。波止場の賣店で大野さんがまた何かを愚圖々々やつてゐると思つたら、その中細卷の葉卷を得意げにふかして歸つて來た、何か買物をした序にまけさして、貰つたのださうな、それは土人の吸ふ二三仙の安たばこだ。船へかへるランチの中で黒奴（くろんぼ）は愛すべき人種だと衆評が一致した。

（十）古倫母まで

ペナンを出るとそろ〳〵風が強くなつて浪も高くなつて來た、コロンボへは五日目でなければ着かぬ、少々心細くなつて來た。

モンスーンだと船員が説明する、モンスーンは七八月に吹くとあるが――と抗議を申込んだが、議論に勝つても風は止むまいからやめた、實際は六月から九月まで吹く風ださうな、一年の三分の一吹き通すのは可成しつこい風だ。

「まだ五月ですよ」といつて借金取りの様に追つ拂ふわけには行かない、搖られ放題に搖られてゆく。

夜になるとます〳〵ひどくなつて來た。隣にゐた羊飼（セパード）、本名は船長（キャピテン）ミラといふ、三十三年を海で暮して來た老水夫に話しかける。

「大分荒れますね。」

「この位では荒れるとはいはぬ」

「だつてこれは疾風（ゲール）だらう。」

「ゲールは四・八だ。これは四・六だからゲールとまでは行かぬ。強風（ストロングブリーズ）だ。」――おや、この老爺までいつか大野さんの手を覺えてとんだところで値切りよる。

朝になると食堂は半分からつぽ、甲板には追々日本人の影が少くなつて來た。新鮮（フレッシュ）な空氣（エア）を信仰する西洋人共は醉つても甲板に出て甲板の上で苦しんでゐる。姫御前のあられもないそこで公然と小間物店をひろげてゐるのもある。飛んで行つて介抱するのが紳士としての義務だらうかと考へて見たが、ものを云つたことの無い婦人だから傍を向いて知らぬ顔をしてゐた。「汝はそれをいかに考へなすか」とヴエラに訊いたら「わたしだつてさうするわ、知らぬ方なら」と賛成してくれた。ヴエラだとさうはいかぬといふ結論になるがこの女は鈍感で船醉ひなどする柄ぢやないからそんな心配は杞憂といふものだ。

海賊共は流石に長年海で鍛へた丈けあつて平氣の平左である。「海が靜かなうちはとんと食慾がつかなかつたがこれでやつと蘇生した。」と洒々してゐる態度、忌々しいなどの段ぢやない。堂々たる海國男子が――と地團太を踏んで見ても、地團太丈けぢや氣分は直らないから致し方がない。ゴルフをやつたり漫談をやつたりしてゐると僅に人間らしい氣もちでゐられるが、何か讀むか書くかするとすぐ頭が痛くなる。この通信だつて可なり苦しい思ひをして稿をつづけてゐるのだ、粗末に讀んでは罰が當らう。

大野さん夫婦はさつぱり食堂に姿を見せない、船室に行つて見ると御馳走を前に積んで頭痛鉢卷の躰とある。「どうしたんだい。」ときくと「これをどう處理したものかと途方に暮てゐるところだ。」と細い聲を出す。食べないとスチュワデスの伯母さんに散々叱りつけられるのださうな。この不景氣な世の中に、御馳走を食べなきやならぬといつて困るのはちと贅澤がすぎませ

う。

弱つてゐるのは大野さんばかりぢやない、もつとひどいのがザラにある。水ばかり飲んで唸つてゐる人、もう外國行きはこり〳〵だとこぼす人、歸りは米國經由をやめてシベリアから歸るといふ人等、等。頑張つて食堂に出てゐる連中も、來たかと思ふとすぐ歸つて了ふ。スチュワードの連中まで一人二人と寢込んでしまふ仕末である。

船の人に訊いたら上下動（ピッチング）の振幅が一番ひどい時に十二尺だつたといふ、僕たちのゐる船尾ではこの十二尺を完全に味はつてゐたのだから少しは醉はせて頂きたい、甲板に出てゐると青い巨大な浪が山の樣に去來するのが實に壯觀だ――これを海岸の岩の上からでも眺めてゐたら一層の壯觀だらうと思ふ、その都度搖り上げ搖り下げられるのは、總ての理論に拘らず、どうしてもあまり氣もちのいゝものではない。

おまけにこの航海中、新嘉坡（シンガポール）から乘船した甲板乘客（デッキパセンジャー）の一人が病死したので話しはます〳〵滅入つて來る。「歸るにしても同じ道のりだし……」と青息吐息の人もある、さらでも厭なこの航海が、風は逆、潮は逆と來て速力半減といふのだからます〳〵以て仕末が惡い。六月一日の夜に入つて錦蘭島の燈臺が見え出したときには、本當にやれ〳〵と思つた。

（一一）古倫母

六時半に一等の喫烟室で旅券の檢査がある。香港でも新嘉坡でもやらなかつた事でこゝが始めてだ。獨立運動、赤化運動を恐れての取締ださうだが、上陸せぬことにきめてゐる人々、たとへばヴェラの如きでさへ、無理やりに檢査して「碇泊中上陸を許可す」とスタンプを押すのは隨分人を馬鹿にしてゐる。

八時半モーターボートで上陸する、例によつて例の五人である。

黑ん坊がうるさくつきまとふ、お話にならぬほどしつこい、自動車をすゝめるもの、旅館を呼ぶもの、案内をねだるもの、新聞を押し賣りするもの等々、あれだけ物好きな大野さんが閉口して取合はなくなつたのを見てもそのうるささ加減は想像が出來やう。何といつて追つ拂つてもどこまでも圖々しくついて來るのがある、小さな子供まで一錢二錢をせびらうとつきまとふのだから助からない、自動車の中へ花を投げこんで、くれたのかと思ふと代金をよこせと來る、ヴイクトリアパークで肉桂の樹を見てゐると馴々しく寄つて來て肉桂の講釋を始める奴がある、うつかり相手になつてゐるとあとでどうかお志をと來る。みんな乞食だ、その乞食が厚顏無恥でどこに潛伏してゐるか分らないのだから油斷も隙もならぬ。

これは後の話だが、十時半ごろ波止場に歸つて來ると、黑ん坊が覺束ない英語で、「もう日本の船ない、サンパンに乘るよろしい。」とうるさくついて來る。實際は十一時と十一時半とにランチが出るのだ。圖々しい嘘をいふにも程がある、「待つて見ろ！」（ウエイトアンドシィ）と冷やかに云つてやると、「よろしい、私待つて見てゐる！」（オールライト・アイ・ウエイト・アンド・シィ）と洒々として相變らずぺちやくちややる、流石の僕も堪忍袋の緒を切らして、「默つてろ！」（シャットアップ）と大喝一聲してやつた。

之をマクス・オレルにきく「英國にはとてもうるさい女が時々ゐる、あなたは何來死んでもいゝ覺悟がおありですか――といつて汽車の中で說教を始める奴がそれである。こんな奴に捕まつたらもう最後である、これを擊退する唯一の方法は「私英國ない」（ミーナットイングリッシュ）とやるに限る。さうすればいかに圖々しい奴でも「あら仕樣がないわね！」（オー・ホワット・ア・ピティ）といつて默りこんでしまふこと請合である。」と。しまひにはわれ〳〵もこの故智に倣つて佛蘭西語や獨逸語を振り廻すことにした、なに關係があつてもなくても、文法に合つてゐても合はなくてもただ無暗といゝ加減なことをまくし立てればいゝのだ、結局これが尤も有効だつた、なまじひ英語なんかで相手になつてゐると果しがない、日本語も駄目である、とても流暢な奴がゐるから。

えゝと、大分話が前後したが、例によつて自動車で町を見てあるく。案内の男、印度人だが、二十人のガイドの一人とあつて、ペナンの先生よりもよほど英語は達者だ。

始めにヴイクトリア・ブリツヂへ行つて見た。いまこの地は雨期の最中で、十九年來の出水とかで河の沿岸は浸水家屋が可なり多かつた。

こゝにはヂヤツク・フルートといつて西瓜位の大きさの菓物がある、こいつが幹の中ほどにぶらりと下つてゐるのはとても奇觀だ。自動車の中へとりよせて走りながらたべて見る、粘々してゐるが中々うまい。

途中で蛇使ひを見つけて一と藝やらせる。例のコブラといふ恐ろしい奴だが毒牙はぬいてあるのだからわけはない、妙な笛を吹きならしてこいつを籠から出して首にまきつけたりいろ〳〵いやらしいことをやる、その外は手品だ、實に下らないものだ。十分位見てゐてみんなで五十錢やつたら「安い安い。」といつて怒つた。

ヴイクトリア公園で車をとめて降りて歩く、少し暑いが日の光を通さぬほどに繁り合つた青葉の蔭を歩く心地はすがく〳〵しい、昔は肉桂の樹が澤山あつたが切つたり枯れたりして今は一本しか殘つてゐないさうな。

その次には妙なお寺へつれて行かれる。釋尊の像や一代記の繪卷物がべた一面にならべてあるところで何の奇もない、土人の坊主が紋切形で說明する、中々名文だが惜しい事にはアクセントやイントネーションが滅茶苦茶で聞きとりにくいこと夥しい、大かた誰かに作つて貰つた文を盲暗記に覺えてゐるのだらう、この坊主が同じ紋切形で最後に謝禮を要求したのには一寸驚いた。

その次にはマウント・ラヴイニアへ行つてお茶を飲んだ。海沿ひの奇麗なホテルだ。ボーイが客を奪ひ合つてぎやあ〳〵騷ぐのは見苦しい、それから寶石だのべつ甲細工だのを賣る賣子が附きまとふのも頗るうるさい、早々にしてここを出る。

ガール・フエース・ホテルへ着いて車を返した。こゝは當地で第一流のホテルである。こゝで一部屋借りて出帆まで靜養することにした。

お晝はこゝの食堂でたべた。川本さんが錫蘭（セイロン）式のライスカレーを註文してゐる、七八種もある藥味を突き附けられて些か面喰らつた態であつたが、痩我慢か意地か結局うまい〳〵とたべてゐる。外の連中は見ただけで辟易して了つた。

午後町をぶらつきにゆく。ミカドで大野さんが寶石を買ふといつて、あれでもない、これでもないと二時間近くも待たせたのにはうんざりして了つた。待くたびれてとう〳〵僕も何するといふアテもない指輪を一つ買つてしまつた。

夕飯は町で簡單にすませた、あとでパインアツプルを二つたべたらその金で十仙だつた、日本の金では八錢位か、その上内地でたべるのとはまた格別の味がある。

ホテルへ歸つて室の中のお湯へ入る、くぢ引で順番をきめた、眞水のお湯は船の客には何よりも御馳走である。九時すぎにホテルを出た。少し町をあるくつもりでゐたが、七時には戸を閉めるといふ。町は眞暗でひつそり閑としてゐるのでつまらないこと夥しく、ミカドで珈琲を御馳走になつて、十一時のランチで船に歸つた。名物の浪が防波堤にくだける樣が夜目にも白く光つて物凄い。十二時に碇をあげて出帆する。

（一二）アデンまで

コロンボを出てから始めて今までの搖れ方が、ほんの前奏（プレリユード）であつたことが分つた。縱搖（ピツチング）の振幅が十二尺あるとこの前の通信に高慢らしく書いたのが今更恥しくなつた。アラビヤ海の眞中では三丈以上になつたさうな、プロペラが始終空廻りをやつてゐる、どうかすると浪がテープ・デツクの手欄よりも高く見へた。神戸で乘つたときは山なす巨船と思つた鹿島がこゝまで來るともう木の葉の樣に見へて來る、折ふし風が雨を伴ふてさあと來る、先が見へなくなるので汽笛を吹く、それがいかにも悲鳴の樣に聞へる。その木の葉に生命を託して唸きつゝ悶えつゝ浪のまにまに搖られてゆく人間の哀れさを泌々と痛ましく思つた。

食堂も甲板も再びガラ空きになる。船室に見舞に行つて見るとみんな痩こけて泣き言を並べてゐる。痩せるのも無理はない、腹は減つても胸は悶へて、身になる樣なものはたべる氣にならないのだから。

コロンボを出てからアフリカの東北端スコトラの島にかゝるまで一週間ばかりの航海に大野さんのたべたものはライスカレー一、天どん一、ビフテキ三分の一、それに折よしのアイスクリームと果物だけ、これで腹が減らぬとは人間も妙な狀態になるものだ。もう孫子の末まで夏の印度洋は通らせないのださうな。風が止まぬ以上、船がとまらぬ以上、慰め樣もないので小樽の話を出すと始めて大野さんの眼が輝く。「今ごろはもう櫻んぼが出始めたか知ら、露のまゝの苺もうまいな、それから鯖の新しいのも……」とまるで子供。

船醉ひのせいばかりぢやない、實際船の料理にはもう皆がすつかり厭きて了つた。第一材料がない、第二變化がない。大野さんはしまひにはメニューを見ただけでも胸が惡くなる樣になつた。海苔や梅干の樣なものが無闇に戀しくなる。あるほどの伊達しつくして紙子かな、といふところだらう。

大野さんの惡口ばかり書いたが、僕だつて決して平氣でゐたのぢやない、何か仕事を始めるとすぐ頭が重くなる、胸が惡くなる。止むを得ずトランプをやつたり、花をやつたり、ゴルフをやつたり、一等へ逃げて行つたり、漫談をやつたり――こんなだらしのない生活をやつたのは生れてから始めてだ。吹聽してもいゝ事は毎日一時間位づつヴエラと一しよに本を讀んだことだけ。

一日の長いのにはうんざりした。向ひ風で一時間十哩そこ〳〵しか速力が出なくてア

デン着の豫定がまる一日遲れた上、毎日時計が遲れて行つて、一日が二十四時間と二十分位あるのだから助からない。八日の夕方スコトラの島が見へ出した時は心からほつと一と息した。

日本を出てからもうやがて一と月になる。船客同志も大分馴染んで來て、酒はキの御曹司宅さんと商大出の林さんとがお互に支那人とのみ思ひ込んで苦しい思ひをして英語で話してゐたなどといふ珍場面はもう見られなくなつた。

結局日本人と英國人とが一番多い、僕の隣の船室ではデンマークとスペーンとオランダとイギリスとが雜居してゐるが、こんなのは例外で、大ていは同じ國の人間同志を集めてある、食卓も同じだ。僕の食卓は例外の一つでデンマーク夫婦と雜居してゐる、この夫婦が奇怪な、その癖流暢な英語で三度〳〵まくし立てるのには少からず辟易する。

いつの間にか無愛想なむつゝりした英國人達とも口をきく樣になつた。話して見ると仲々ものゝ分つた人間もある、親切な人間もある。英國人はするめと同じでよく嚙みしめて見なければ味の出ない人間だ、一口嘗めた計りでうまくないと捨てゝ了へば永久にその味を知らずに終る。香港から乘つた船客にオランダ人でシルヴァといふのがゐる、その男は二日と經たぬ中に自己の一切を廣告して了つた、そしてその後は語るべき何物をももたぬことになつた。こんな手合に較べると錦を着てもけを上にしてゐる英人は何となく奧床しい。

グラスゴーに學んだといふ若いスコットランドの技師がゐる、話をしてみてこの男が本を讀んでゐるのに感服した、教育があるので訛りもなくて言葉も非常に分かりよい。たゞ低い聲で早口にいふのは困るが英人にはこんなのは澤山ある、ともかくもこれなどは發見の一つだ。

次は片目の老人、いやいつまでもワンナイド・ゼントルマンでは人聞きもよくないので、食卓の配置圖でしらべてみると驚いた、エフ・エス・ブラウニングとある、汚いブラウニングもあればあるものだ。訊いて見たら詩人とは緣もゆかりもないさうだが、「ブラウニングさん、お早う。」なんて挨拶するのは變な心もちだ。だがこの老人の偉いのは名前ばかりぢやない、これでこの老人生粹の倫敦兒ださうで倫敦の地理と歷史は仲々精しい。殊にデイケンズの愛讀者とあつてデイケンズ時代の倫敦と來たら氣焰當るべからざるものがある、それに作品の文學的價値についても文字通の一隻眼を具へてゐるらしいのは賴もしい。「倫敦へ着いたら乃公が隅から隅まで案内してやらう。」といつてゐるから、この老人にはまた倫敦で會ふかも知れない。「デイケンスの所謂何とか云つて見ろ、逆捻をくはしてくれる。」といつた風の恐ろしい面構だが、まあ我慢をするとしよう。漢口在住の貿易商ださうな。羊飼事船長（シヒヤバード キヤプテン）ミラーはえらい隱し藝をもつてゐる、醉へばロバート・バーンス（この老人はバルンスとアールをひびかせる）の詩を暗誦するのがそれだ、都々逸を怒鳴つたり、かつぽれを躍るのよりはよほどましだ、けれども部下の連中は可なりこいつにあてられてゐるらしく、僕がもつと〳〵とせがんで聞いてゐると、「お前は珍しい男だ、乃公がこいつを始めると皆逃げ出すんだが。」と御機嫌甚だ麗しい。隨分下らない詩も覺えてゐるが、「百姓の土曜日の夜（コタス・サタデー・ナイト）」を世界一の立派な詩だといふところなどは中々賴もしい。僕は蘇格蘭（スコツランド）の人に讀んで貰はうと思つてわざ〳〵バルンスの詩集を携へて來たほどの熱心家だ、息の熟柿くさいのを我慢して更くるまで拜聽に及んだ。

この老船長（キヤプテン）に手の話をして貰つたことがある。この老人の右手の中指が半分切れてゐるが、始めから苦になつてゐたのだがどうしたわけかと訊くのもあまり無躾なので控へてゐたところ、或日四方八方の話の序に機會を得たのでその手の話を聞かせて貰つた。隨分ひどい目に會つた手ではある。指の無くなつたのは針金（ワイヤ）に卷かれてもぎとられたのださうだが、この手の歷史はそれだけぢやない、掌に一寸位の傷痕がある、これは南米智利（チリ）の港で、若い血氣盛んなころ、酒場で醉つた楊句に土人と喧嘩をしてナイフで突さゝれたのださうな、「ハンケチで卷いて置いたら、ハンケチがあんな色になつた。」と甲板にころがつてゐるゴルフの赤い球を指す。まだある。その次が大變だ。この前の世界戰爭には地中海で獨逸の潛行艇にやられて乘船が沈んだ時、夢中でつかんだ繩が掌の皮をすつかりむいて了つたんださうな、それから二晝夜浮木にすがつて波に漂ふてゐたが、生傷に鹽水のしむのは可なり痛かつたとそぞろに當時を追想して眉をひそめる。それぢや勲章でも貰つたかときけば、「四つ貰つたけれど、みんな子供のおもちやにくれてやつた。」――はこの男の云ひさうな言葉である。この老水夫が身の毛のよだつ樣な物語を平氣で吃々とやるのをきいてゐると、何だかコンラツドの小說の中へ入つて了つた樣な氣がする。

ヴエラの話は分りよくてよいけれど、この女のものを知らないのにはうんざりする。海峡（ストレーツ）も、北極星（ポールスター）も、クレオパトラも知らない。かう並べると何だか三題噺の樣だがこれはみんな世間話の間に自然と出て來たのだ。この位のことを心得ないであんなに早く本が讀めるのはどういふわけだらう、この女は日本を出てから頁數にして一冊三百頁位の本をもう十冊位讀んでゐる。實に不思議だ。――それからこれほど何でも心得てゐる僕が本を讀む段になるとさつぱり進行しないのは二の不思議だ。

（一三）アデン

印度洋のモンスーンがたゝつて豫定より一日遲れた六月十日の午前にアデンに着く。

只見る草も木もない褐色の岩山がいくつも〳〵によきによきと並んでところ〴〵に信號所や要塞が見へる、山の麓に沿ふて役所らしい建物がかたまつてゐる、ときどき思ひ出した樣に自動車が一つ二つ建物の間を縫ふて走るのが隱見する外はひつそり閑と靜まりかへつてゐるのがいかにも暑い國らしい。

紅海の咽喉を扼（やく）する要害の地、ヂヨン・ブルが例の手でまきあげて軍隊の駐屯所にしてゐる所で、軍事上は頗る重要な港だらうが、われ〳〵には仕方のないところだ。だが船にかうしてゴロ〳〵してゐたつて猶更仕方がないので、晝をたべてから一時のランチで上陸する。大野夫人は印度洋を夜晝ぶつ通しに寢つづけたので歩くと頭がふらつくといつて一行には加はらなかつた。

波止場についてもやつぱりひつそりしてゐる、コロンボではうるさくて閉口したが、かうなると少しもの足らぬ。一向町らしいものもなささうだが、ともかくも自動車でドライヴしてみる。

恐ろしく暑いところだ。新嘉坡（シンガポール）でも古倫母（コロンボ）でもぢつとしてゐると暑いけれどドライヴしてゐる間は涼風腋下に湧く趣があつたが、こゝはさうでない、まるで木のない焦土の上に吹く風はさながら熔鑛爐の吐く息にも似て、いつか室蘭の製鋼所で大砲を鑄造してゐるのを見てゐた時の樣な氣もちになる。機關室などで度外れの暑さに慣てゐると自負する金子さんがこの暑さを百十度だと隨分精密な推定をする。かうなるとなまじ風なぞ吹かぬ方がよほど樂だらうと思はれる。金子さんがもつて來たカオールをみんなでわけて、口の中に一寸四方ほどの涼味をつくつてドライヴをつゞける。

山越えをして舊アデンへ、土人の部落を見にゆく、軒下に大勢土人がごろ〳〵して阿片をのんでゐた。駱駝にひかせた荷車に時々出會ふが、それが馬と同じ樣に見へるから妙だ。

三ケ月に一度位しか降らぬ雨を貯へて飲料に供するといふタンクが澤山出來てゐる。植物の生長せぬのも雨が無いからだ。雨降りには氣がよふぐほど雨の嫌な僕だが、こんな焦土を眼のあたりに見せつけられると少し考へざるを得なくなる。

長い、眞暗なトンネルをぬける。トンネルの中は流石に比較的涼しいが、かすかに白く圓く見える向ふの出口をめあてに自動車が平氣で疾驅するのには膽を冷やした。

時間があるので鹽田を見にゆく。運轉手の英語が中學二年程度なので説明をきくことも出來なかつたが、見たところでは日本の鹽田と同じ仕掛らしい、ただ眞白な鹽の山がいくつも〳〵露天につく〳〵と並んでゐるのは珍らしかつた。

町にかへつて運轉手に金を渡すともう三ルピーよこせといふ、一時間七ルピーの約束だ、まだ五十八分しか經つてゐないぞといへば鹽田を見に行つて二十七哩とか走つたから十ルピーだと頑張つて承知せぬ。ロクに英語も話せないくせに生意氣な奴だ。仕方がないから波止場の巡査のところへ連れてゆく。すると巡査め、チヤンと氣脈を通じてでもゐるのか、すぐと運轉手の肩をもつて、印刷の賃金表などをもち出して來て何やらくど〳〵と説明する。そんな表など見る氣はない、こちらは約束通り時間で拂はうといふのだ、何哩走らうとどこへ行かうとこつちの知つたことぢやないとこつちも中々負てゐない。丁度そこに居合せた船の事務員が仲裁に入つてくれたが、どこまで行つても水掛論で果しがない。面倒くさいから「もう歸らう〳〵」とさつさとランチへ引あげた。ランチが出てしまへばもうこつちのものだが、川本さんが一向姿を見せないので氣をもんだ。人質にでもとられたのではないかと心配したが、あとできいたらパイプを買ふとあつて、負ろ負ぬと押問答をしてゐたのださうな。氣樂な男だ。氣樂といへば巡査も元氣だ。事務員に「姓名をいへ」といかめしいことをいつてゐたが「知らないよ（アイドントノー）」とすましてゐたら、そのまゝ默つて引つ込んで了つた。これが日本のお巡りさんだと「本署まで一寸來い」とやられるにきまつてゐる。

アデンは恐ろしいところだ。人間到るところ青山ありとどこにでも落着いて樂しい生活を營むことを忘れぬヂヨ

ン・ブルもこの地ばかりは手のつけ様がないと見へて、兵隊さんは二年で交代するのださうな。もう大分前にスコツトランドのある聯隊が罰としてこゝに駐屯を命ぜられたことがあつたと例の技師先生が話してゐた。

（一四）紅海

午後六時にアデンを出帆した。日がくれてもやつぱり暑い。この邊で追風が吹いて、その風速が船の速力と同じになつて、煙突の煙が眞直に昇る樣なことが始まつたら事だ、けふなんか風があるだけまだ〳〵いゝ方だと水夫長（ボースン）に聞かせて貰つて、そんなものかなと諦めをつける。

「今夜十二時と一時との間に涙の瀨戸を通る、貿易風に乘じて印度に渡るアラビヤ人がこゝで故國に分れを惜しむところから名をつけたものだ、この海峽は三哩ほどで下關位のところだ。」とデンマークが教へてくれたが、ねむいから十時ごろには床に入つて了つた。朝になつたら、「折角教へてやつたのに、なぜ起きて見なかつたか。」と怒られた。

十一日のお茶の時間に一等の食堂で文部留學生の茶話會を開いた。新潟高校の西川さんが最年長者とあつて一場の挨拶を述べられた。それからめい〳〵自己紹介をやつた。二十三名のうち、英國に渡るものが十二人、獨逸が十一人、このうち語學で渡英するものが八人ある。

紅海に入つてから思つたよりすずしい。でも夜の甲板は涼みの客で毎晩賑やかなことだ、しまひには小人閑居してダンスを始めた。安ものゝ蓄音機をもち出して怪しいステツプの幾組かが出來る、怪しくなかつたとしても隨分單調な子供くさいものだ、こんなことを何回もくり返して朝の三時四時までも厭きないなんていふ人の氣が知れない。英國人はいやに大人びて、どんなことでも子供くさいと鼻であしらふ人種だが、こんな馬鹿げた眞似をさも鹿爪らしい顏をしてやつてゐるのは天下の絶景だ。原始時代の人間がやつてゐた通りのことをいかめしい二十世紀の文明人がやるのだからいかに辯護してみてもそこに大きな矛盾があるが、僕とても自分でやるのだとそんな矛盾に氣はつくまい。

印度洋あたりからそろ〳〵甲板に寢るものが多くなつた、十一時頃甲板に出てみると死屍累々の觀がある、隨分危なつかしいところでぐう〳〵やつてゐるのもある。それはいいとして毎朝六時には水夫が甲板を洗ふので、朝寢坊の連中には非常に困るらしい、水夫長が「起きろ！（ウヱクアプ）起きろ」と呼び廻つてゐる。ところが西洋の女の中には恐ろしく圖々しいのがゐて、ポンプで近所をざあ〳〵やつてゐるのに平氣で鼾をかいてゐるのがある、しまひには他人の私有のソーフアをこはしたとかで、危く國際問題が起りかけたが、そこは女の特權でそのまゝ事ずみになつた。水夫たちもよつぽど忌々しいと見えて「死んでる、死んでる。」といつてお經を唱へながらソーフアの廻りをぐる〳〵やつてゐたりした。

六月十四日の朝である、いゝ氣もちで夢のつゞきを見てゐると耳元でこの「起きろ！（ウヱクアプ）」をやるものがある、船室の戸をあけつ放しにして寢るので何時でも何人でも出入自在なのだ、眼をさますとデンマークが傍に立つてゐる、何だと訊くと「シナイ山が見へるから起きて見ろ。」といふ、シナイ山だつてやつぱり只の山だらうと思つたが起きる迄動かないから、寢呆け眼をこすりながら甲板に出てみる。日が出てゐるのでまぶしいが地平線上には少しの雲もない、雨の降らぬのが特色の紅海にして珍らしい好天氣だ。デンマークの指さす方を見るとうね〳〵と連る一帶の山がうす紫に此の空を劃つてゐる、「左の端のあの一番高いのがそれだ。」と教へてくれる。すつかり眼が覺めて考へて見ると、この山を見ることも日本を出るときから樂しみの一つにしてゐたことが思ひ出されて來たので「よく教へてくれた、有り難う。」とお禮を云つてやつた。

埃及（エヂプト）の墳墓を發くときつと中から書きものが出る、世に「死者の書（ブツクオヴザツド）」と稱するのがそれだ。これは死者が黄泉で裁きをうけるとき、かういへ、あゝいへと裁判のうけ方を指示したもので、身分の高い低いに從つて精しさに相違はあるが、根本の要迄は共通だ、即ち、私はこんなことは致しません、こんなことも致しませんといつた類の世にいふネガテイヴ・コンフエシヨンがそれである。これがモーゼの十誡と同じところを見ると、シナイ山で神樣から授かつたのは少々怪しくなつてくるが、こんな詮議を始めたら、世に怪しくないものは澤山はあるまい、まあ傳説のまゝに神祕的なものとして置かう。

（一五）埃及　上

午後五時過ぎにトウイフイツク港につく、これがスエズ運河の東の入口だときいてゐたが、その入口なるものが容易に見つからない、方々もち廻つた末とう〳〵デンマークに解決をつけて貰つた、この男も船長でこの邊は何遍となく通つたことがあるのださう

な。

埃及（エヂプト）の入國は中々やかましい、査證に關しても郵船から特に注意をうけてゐたが、果していろ〳〵面倒であつた。査證は英國の官憲がやつたが、旅券を調べに來たのはトルコ帽を被つた埃及の役人であつた、この邊が埃及獨立運動の過渡時代を如實に物語る樣に思はれて一寸面白かつた。

カイロ行きの案内はトマス・クツクと南部氏と二ケ所でやるが、後者は邦人であるのと郵船に特別關係があるのとでとても競爭にはならぬらしい、この日はクツク社の社員は手持無沙汰で歸つて行つた。僕たち三十幾名かの一隊は南部氏の案内者アントニオに連れられて上陸した。

港務所で檢疫がある、といつても醫務室の入口に立つてゐる醫者の前を通るだけ、にこ〳〵した感じのいゝ男だつた。賴まれもせぬのに舌を出して見せてやつたのは僕と同室の桂田さんだけ。

港務所の前で八臺の自動車に分乘する、僕たちの一行五名は南部氏に紹介されてゐた大野さんの威光で一隊の先頭に立つた、先頭に立つたのを威張るのぢやない、これから砂漠を突破するのにあとになつたら砂煙がたまつたものぢやない、卽ち特に記す價値のある所以である。一寸書き落したが、僕たちは船が五時の終列車に間に合はなかつたので、自動車でカイロに向つたのであつた。

十分ばかりでスエズの町につく。こゝで二三度稅關の役人らしいのが自動車をとめて中をのぞいた。

町を出るといよ〳〵砂漠にかゝる、アラビヤ砂漠といふのがこれである。北極星の位置で見ると、自動車は西西北の方角に進んでゐる、スエズからカイロまで一直線に走るのらしい。砂漠の中ではあるが廣い道がついてゐる、折からの月明に乘じて文字通りのこの無人境を疾驅してゆく心もちは惡くない。――が、それは僅の間であつた。この行程九十哩、時間にして三時間半はかゝるのだから、三分の一ほど行くともう厭きて了つた、おまけに寒さが身に泌みる、――砂漠の中で夏の最中に震へるなどは一寸うけとれぬ話だが、實際砂漠は晝と夜との氣溫の差がそれほど激しいのである。わけても薄着の夫人のあらはな腕がいかにも痛々しいので夫君と僕とが中にはさんで外套の代りになり、その上に川本さんの縞の風呂敷を被せた圖は、晝間見たら珍であつたらうと思はれる。

（一五）埃及　中

そればかりではない、途中であとの車がパンクしたので二度ほどそれを待ち合せた、かうなるとます〳〵いやになつて來た。一體誰かの紀行を見てこゝでは自動車がパンクしたと出てゐるから、やらぬと氣がやまぬのと見へる。スエズから僕たちの車に便乘してゐたカイロの洋服屋さんと世間話をしてわづかに退屈をまぎらはせた。ヴイナスはもうとくに沈んでしまつた、月は――この月がのぼるのか沈むのかがさつきから議論の種になつてゐるのだが、洋服屋さんは十一時までのぼつてそれから沈むのだといふ、お月樣はどちらにも團扇をあげかねたと見へて、とう〳〵動かなくなつて了つた。

カイロに着いたのはもう十二時近かつた、サヴオイホテルに落ついて一とやすみして寢たのは一時頃だつたらう、それでゐて朝の五時にはアントニオに叩き起されたのだから眼が痛い。六時過ぎにホテルの前に自動車隊の勢揃ひをして金字塔を見物に出かけた。

ナイル河を渡る、隅田川位の大きさしかないが、六月は水量も最も少い時ださうな。モーゼが蘆の葉蔭にかくされて危きを免れたのもこの河、クレオパトラがアントニーと舟を浮べて長夜の宴を張つたのもこの河、上下茫々五千載、國興り國亡び人來り人往いて――と中學生流の感慨が湧く。

橋を渡つてアカシヤの並木を過ぎてゆくとやがて目ざすギザの金字塔が遙かにその姿を行く手に現はす、隨分小さい。

途中自動車を捨てて駱駝に乘る、一寸馴れると頗る乘り心地のいゝものだが、二分置き位に酒手をねだられるのは可なりうるさい。これに對しては一切分らぬ風をして無言の行をつづけるのも一法だが僕は何とか云ひ出しさうな形勢と見てとると、質問をしたり、駱駝をほめたり、出たらめの世間話で機先を制して一切ねだる機會を與へぬ策略をとつた、しかしあまり仲よくなりすぎて默つてわかれることが出來なくなつたので、最後に銀貨を一つくれてやつた。

一番大きいシエオブの金字塔について廻つてスフインクスのそばに下りる、こゝでサラと呼ぶ土人の案内者が演說口調で說明する、頗る流暢にやるが、プがブになりクがグになつて、プリーズがブリーズ、クラスがグラスだから、それを一々考へて直してきゝとるのは骨が折れる。それがすんでからみんなで記念の寫眞を撮つた。

シエオブの前でサラ先生また一場の講演をやる。内容は

別に何の奇もない、高さがどれ丈で、石がいくつあつて等々の誰でも知つてゐること――いや知つてはゐないが、どの本にも書いてあつて、調べればすぐ分ることばかり。

金字塔の次ぎには、舊カイロの遺跡を見る。こゝは地震で潰れたのだと説明をしたが、日本ではあるまいし、この説明は眉唾ものだ。僕と同室の東大の西洋史の先生山中君にきいたら、トロイと同じ様に何かの原因で人の住まなくなつた町が砂に埋もれて了つたのだらうとの事であつた。

次ぎはマメルツク・トウムへ行く、中には名士の墓が一杯ある、イブラハム・パシヤの墓などはわけても有名なものださうな。石に針でコツ〳〵と彫刻をしたもので何年とかかゝつたのだとサラ先生反身になる。

次はモハメツド・アリのモスク、中々忙しい。このモスクは古くからあつた城塞の中へ、現埃及王朝の始祖アリが建設したもので今も金曜の禮拜日には國王が臨席される。雪花石膏でつくつた輪奐の美を極めたものだ。この城塞は――いや、こんなこと書いて讀者をあてるのはよさう、物好きな人はベデカを見るがよろし、英語のよめぬ人は郵船でただでくれる「埃及見物」といふ本を見るとよい。何しろ興趣の深い物語りに富んだ城である。

最後が埃及博物館、これが世界にきこえた大仕掛なもので、一時間や二時間では素通りする位のものだが、サラ先生に引つ張られて目ぼしいものだけを拾つてあるく。ピラミツド建築當時の監督であつた男の木像がある。その表情の眞に逼つたところ、大英博物館の埃及部に藏せられる「書記生」と並べ稱せられて世に定評のあるものだ。「さるアメリカの女がこれを一萬弗で買ふといつたが、金づくぢや……」とサラがせせら笑ふ。

古代の彫刻にも中々面白いのがある。王様の生活を繪にしたのがあつて、饗宴やら、音樂やら、舞踊やらがあまりにも近代のそれに酷似してゐるのを指して、「この頃流行なんてものはみんな埃及から出てゐるのだ」とサラ氏氣焔當るべからず。

ミイラなんか掃くほどあるから澤山では珍しくもないが、ラムセスやメニフタのそれは足をとめてのぞいた。メニフタは出埃及の王様で、モーゼがイスラエルの民を率ゐて逃げ出した頃の領主らしいと説明がついてゐる。その人の面影を今眼のあたりに見る心もちは一寸妙である。

（一五）埃及　下

この博物館で尤も價値のあるのはツタンカーメン王の墳墓から出た數々の寶物であらう、カーナヴオン伯の劃時代的なこの發掘がいかに世界を驚かせたかは今更いふだけ野暮である。この室に入つて見ると絢爛目を奪う様な美術品がところせまき迄に陳列されてゐる。今更の様に古代埃及の文化に驚嘆の眼を睜る。

いつまでゐたつて限りがない、せき立てられてこゝを出て中央停車場にゆく。こゝから十一時發の急行でポートサイドに向ふ。みんな頭の先から足の先まで埃だらけである。

汽車の中は恐ろしく暑苦しい、砂漠の埃が舞ひこむので窓はすつかりしめてある、中には煽風機が廻つてゐるが、吹き起す風そのものが暑いのだから結局何の役にも立たない、お晝を食堂車でたべた外なすこともない車中の四時間を苦しみ通して、ポートサイドについてほつとした。スエズ運河に沿ふて走つてゐる時も暑苦しいのに變りはなかつた。

ポートサイドのうるさい事はコロンボ以上だ、さらでも暑苦しい日ざかりに薄汚い物賣り達につけまとはれる厭はしさは知らぬ人には想像がつくまい。這々の体でとある喫茶店に逃げこんだがやつぱりいけない、二束三文の安ピカものを突きつけて何といつてもはなれぬ奴、いつの間にか股の間へもぐりこんで靴を磨かうとあせる小僧、勝手にひよ子や卵をもち出して食卓の上で手品を始める男等々、たまりかねて、暑いのを我慢して中の室の一番奥へ逃げこんだ。勘定のときにウエーターがお釣の中から勝手に一志の銀貨を頂戴してお禮をいつたなぞもまづ一寸類のない圖々しさであらう。

もう一つ驚いたのは目貫の通りの立派な店へ繪葉書をひやかしに入つたとき、風采の堂々とした店主が妙な手つきで一同を隅の方へ連れて行つて、いやらしい寫眞を買はぬかとすゝめた事だ。これが海岸通の大通である、奥の方へ入つて行つたらどんな目に會ふか知れない。いろんなことですつかり疲れてしまつたので、時間は早いがきりあげて我家と頼む船に歸つて來た。こゝで積込む石炭が粉炭なので船の中は眞黒になつてゐたが、それでも乞食と泥棒の町よりは氣樂だ、顔を洗つて着物を着換へたら生れ變つた様な氣がした。

こんなところに來てこんな人間を相手にしてゐたら容易に人を近づけない様になるのは當然だ、英人が紹介されない未知の人間に氣をゆるさぬのは度々こんな目にあつてゐるからかも知れない、彼等の

無愛想もかう考へるとあながちとがめるにも及ばない。

十五世紀ごろの英國の小説にラツクアペニといふのがある、チヨーサーのカンタベリ物語と共に當時の人情風俗を知る材料として史家の珍重するところであるが、それにはケントから出て來た一人の男が倫敦の商人に捕まつて散々な目に遭ふ場面がある。その邊がポードサイドの今日に酷似してゐるのは可笑しい、今後五百年ほどたつたらポートサイドも倫敦の樣になるかも知れない。日本は警察のお蔭でこんなうるさい思ひをせずにすむ、外國に來てからつく〴〵日本の警察の有難さが思はれる。

七時過ぎに碇をあげて出帆した。右舷に歡呼の聲が湧くので行つて見ると眼の前に山の樣な軍艦が横たはつてゐる。われ〳〵はその前を靜々と通つて行くのであつた。それはローヤル・ソヴリンと呼ぶ英國の超弩級艦ださうな、向ふでも水兵がみんな甲板に出て何やらしきりに連呼すればこちらの英人たちも、平素はむつゝりと默り込んでゐる連中までわい〳〵歡呼を浴びせてゐる。どつちもなつかしく嬉しいのだらう、われ〳〵ももし日本の軍艦だつたらどんなに心強いことかと思ふ。

國を出てから一番有難いのは御國の光である。日本よ、どうか強い、偉い國になつておくれ……こんなことを考へてゐる中に船はレセツプスの銅像を左に見て徐に地中海へと乘り出した。

（十六）地中海　上

十七日の朝窓の外が騷々しいので眼をさまして起きてみると、クリートだ、クリートだといふ聲、例のデンマルクが例の調子で何やら喋り立てゝゐる。寢呆眼をこすりながらその仲間入りをする。隨分大きな島だ、高い山が所々に聳へて峰には雪が光つてゐる。

この島に宮殿が發掘せられてからクリートの文明は急にやかましく論せられる樣になつた、山中さんの話では、それは時間的にも空間的にも埃及（エジプト）のそれと希臘（ギリシヤ）のそれとの中間にあつて橋渡しの役をつとめたものらしいとの事であつた。

ひとりこの島のみといはぬ、地中海ほど古くから世に知られていくた劇的の場面を目擊した海は外にあるまい、夜、月の光を浴びて舷側に立てば、しろ金色に碎ける浪の中から、埃及や希臘や羅馬（ローマ）やカルタゴのありし日の面影が幻の樣に浮んで出る。

十八日の午後になると右舷に山が見へ出す、伊太利の長靴の先なのだ、西洋だ、西洋だとみんな双眼鏡を手にして騷いでゐる。その中左舷にシシリーが見へる、生憎少し曇つてゐたが、近づくとエトナの裾を長くひいた姿がくつきりと見へて來る、頂近くから煙を吐いてゐる、八合目あたりに雪も見へる、さう高くは思はれぬが、地圖を見ると一萬八百七十呎（フイート）と出てゐる。

やがてメシナ海峽を通る、一番せまいところは二浬位ださうで兩岸の人家が手にとる樣に見へる、左手のメシナはシシリーの港でイタリー本國からこの島に通ふ汽船のつくところだ。

夕方になると左手にストロムボリの火山が見へる、海の中からぬつと出て左右に裾をひいた姿は一寸櫻島に似てゐる、頂上から煙が出てゐる、山麓には海に沿ふて人家が見へる、四千人位の人がこの島に住んでゐるさうな。こんなところに住まなくてもよささうなものだが、あの大震災のあくる日にでも平氣でみんな東京に住んでゐた、人間には妙な横着なところがある。

そのストロムボリが時々火を噴く、あたりが暗くなるとそれが非常に奇麗に見へる、みんな船尾に集まつて火柱の立つのを待つてゐる、火が見へると拍手するやら喝采するやら、まるで花火でも見てゐる氣だ。

夜があけるともうナポリだ。ヴエスヴイアスが煙を噴いてゐる、「お茶をたてゝゐるのだ」とデンマークがふざけてゐる。ほの〴〵とあけてゆく海の彼方、うね〳〵と連る山に沿ふて現はれて來るナポリの姿は、一寸外に類を見ぬ美しいものである。

やがて船が岸壁に横づけになる。出帆まで二時間足らずしかないけれど、物好きに一寸歩きに上陸する。

伊太利は乞食と泥棒にかけては西の方の大關だが、日曜の早朝であるためか、さううるさくはない、いゝ工合だ。運轉手がしつこく自動車をすゝめるのを柳に風と受け流してゐたらおしまひに日本語で「馬鹿野郎！」といつた、いはれたのが不名譽か、いつたのが名譽か。

でも、まさか始めての土地を出たらめにあるくわけにも行かないので若いガイドがすゝめるまゝに一人あて六片づゝ（ペンス）の約束で市中を見てあるく。日曜で、辻々の新聞賣場を除く外、店はすべて閉つてゐるので町は非常に靜かだ。見物にはうるさくなくていゝが少し淋しい、電車の走る華やかな大通りからせまいきたない横町が見へてゐる。離宮前に出るとナポリの港が眼下に見へる、その向ふにはヴエスヴイアスが悠々と煙を吐いてゐる、案内の男よほどこの山が得意と見へて、見へ

るたんびに指して教へる、大野さんが勘定したら五遍「ヴエスヴイオ！」をやつたさうな。

　ガレリを一廻りするともう時間がなくなつて來た、お互に伊太利へはいづれゆつくり遊びに來るつもりだから、けふはこの邊で割愛することにした。歩いて喉が乾いたので、ガイドに案内させてうす汚い横町へ珈琲をのみに入つた。十才ばかりの男の兒が四五人煙草をくれとせがむのでくれてやると甘さうにすぱり〳〵とやつてゐる、呆れたものだ。コーヒーはにがい一點張り、お菓子もわるあまい外に味はない、それで勘定となると一人が二志づゝ、一杯五十錢のコーヒーを飲んだわけで吃驚したがあとのまつり、十一志耳をそろへて拂つてこゝを出た。日曜だから高いのだといふ説明であつたが、隨分人を馬鹿にしてゐる。このガイドが案内料を拂ふときに約束の外に附けを請求したから「お前は氣に入らないから、心附けなんか一文もやらない。」とづけ〳〵云つてやつたら「オール、ライト」といつて洒々と歸つて行つた。

　この鹿島が前の前の航海にナポリへ寄つたときは客の一人が一人で横町のバーへ飲みに入つて魔睡劑を盛られて裸にされた事がある。旅客はそんなところであまり物好きな心を出さぬがよい。船に歸つて、例の蘇國の技師に「もうナポリを見たから死んでもよい。」といつたら「それはヴエユラについていふべきことだ、ナポリは臭ひを嗅いだら死んでもいゝのだ。」と答へた。なるほどナポリの横町は隨分くさい。海から見てゐる方がよつぽどきれいな町だ。

（十六）地中海　下

　八時半にナポリを立つ、もうマルセーユまでは一晝夜半である。みんなどこからかフランス語の本をもち出して來て勉強を始める、泥棒を捕へて繩をなう位の段ぢやない、中にはアー、ベー、セーから始めてゐる豪傑もゐる、學生が試驗の前に一夜漬の勉強をするといつて小言をいふのは誰だ。

　十九日の夜はマルセーユで上陸するもののために船でお別れの御馳走を出してくれる。食堂は奇麗にかざつてどの料理もうまい、お菓子その他いろ〳〵の料理に「さようなら」と平假名文字が浮してある、一ヶ月以上馴染んだこの船にもう明日限りでお別れになるのかと思ふと淋しい、誰の心もちも同じらしい。印度洋あたりで無暗とはしやいでゐた連中が地中海へ入つて急に浮ぬ顔をしだすのは別れを惜む心もあるが、何だか心細くなるせいらしい。港々で團體をつくつて見物してゐたのが、マルセーユで下船するとおのがじしちり〳〵ばら〳〵になつてゆく、知らぬ國でひとりぼつちになるのが眼の前に見えて來るからだ、大ぼらを吹く奴もかうなるとから弱虫だから可笑しい。

　二十日は朝から浪が荒い。コルシカを通りすぎてからマルセーユまでは潮流の關係でかいつも浪が高いらしいが、けふは風も中々強い、またエンヂンが空廻りを始めた。大野さんが寢込む、何を、高の知れた内海のくせに生意氣なと海づらを睨んで見ても、大自然の威力の前にはいかに人間の小さきことよ、やつぱり頭が重くて胸がつかへる、僕は一等へ避難して、ピツチングの中心とおぼしきあたりに二時間あまり金子さんと小さくなつてゐた。

　七時マルセーユに入港する。音にきいたイフの城が海の中に浮いてゐる、丘の上の高い塔はノートルダムのお寺ださうな。大きな港らしいがもうそこまで來ると、憚りながら東半球を股にかけた半可通だ、いろんな港や町を見て來てゐるから、こんなこと位では驚かない、いよ〳〵來たな、と思つただけだ。長の航海を終つた感想がこれだけぢや少々物足らぬが、實際は上陸後の豫定をつくつたり、荷物を整理したり電報を打つたりしてゐるので長つたらしい呑氣な感想に浸つてゐる餘裕がないのだ。

　僕の荷物は倫敦まで船に託することにしたが大陸方面行はそこであげるので、これが一寸面倒だ。税關は夜の方がぞんざいでいゝとかでその日の中に檢査をうける。いゝ加減なものらしい、あけずにすんだ人もゐる、あけられた人もせい〳〵一つぐらいだ。船から荷物を運んだポーターが酒手をねだつたり、制服の役人がそつと袖の下を請求したりするのです〳〵いゝ加減な感を深くする。檢査がすんだのは夜の十時、疲れて夜の町を見物にゆく勇氣もなく、そのまゝ船に居候をする。

　朝になつてきいたら、上陸した連中は怪しげなるところへ怪しげなるものを見に行つたのが多いさうな、マルセイユ名物の一つと豫て噂に聞き及んでゐるのがこれださうな、面白かつたかと問へばナニ下らないものだと答へる人が多い、そんなら見にゆかなければいゝのに。僕はいゝ氣もちでキヤビンに分れを惜んでゐたからこの名物を御紹介するわけには行かぬ、この邊でこの紹介があるだらうと樂しみにしてゐた讀者があつたらまことにお氣の毒樣。ではこれで上陸します、左樣なら、御機嫌よう。いろ〳〵と面倒

を見て頂いた船員諸君、毎日世話になつた司厨の諸君、それから晝夜話相手になつてまづい英語を厭きもせずにきいてくれたヴエラ・バーゼス孃、ロバート・バルンスで教へをうけた船員（キヤビテン）ミラー、倫敦でまた會ふ筈のにせ詩人、ねむい時によく起して山や島やを見せてくれたデンマークの夫婦等々、では縁があつたらまたお目にかゝりませう……僕たちの一行が下船するのを見送りに來たヴエラも淋しい顔をしてゐた。

（十七）マルセイユ

クツクの店で二度笑はれた。「正直な案内者を」といつたときに「クツクです」といつてにやり、その次ぎには「英語の出來る男を」頼んだときに「勿論！」で又にやり、でも船へ來てゐたクツクの百〇九號は酒の匂をぷん〳〵させてあまり正直さうでもなく、英語もあまり上手ではなかつた。

笑はれるほど駄目を押して來て貰つた案内者はスヰス生れで、正直ではあつたが、英語はあまり上手でない、まづ横濱の車夫の少し上手な奴位、それでも感心にマルセイユの歴史や地理はよく覺えてゐた。

港としての價値を外にしてはマルセイユなんて下らないところだ、博物館や美術館もないではないが船から這ひ上つたばかりのまだ不たしかな足もとで特に入つて見るほどのものではないらしい、なまけ者の揃つてゐる僕たちの一行は自動車で町を一と通りぐるりとやると、あとはホテルで晝寝をした。

そのぐるりとやつた間に見たところは、トランスポルダーの橋、何の事はない倫敦のタウー・ブリツヂの下の橋をなくした様な恰好、下に橋がない代りに、上の橋からぶら下つてゐる臺があつて、それが電氣仕掛で、人間は申すに及ばず、自動車でも何でもそのまゝおんぶして向ふへ渡す、こんな工夫をすることはフランス人は天才だから飛行機の様なものでも上手なんだらう。

次ぎは船から高いところに見へてゐたノートルダム・ド・ラ・ガルドの寺院へ登る。七十度位の急勾配をリフトがのぼるのだが、お寺參りをしよふといふ敬虔な心とはどうやらそぐはない。この寺院の本尊は航海の安全を守つて下さるとかで、船の模型の奉納などがある。まづ小樽の水天宮といふところだ、丘の上にあるのもよく似てゐる。僕たちも暗い本堂に入つて航海の無事に終つたことを感謝した。實をいふとそれはあまり平安な一路でもなかつたのである、暑かつたことや、荒れたことや……船の一等運轉士の話ではまづ悪い方では二番目位、あれで紅海が暑かつたら一番目になるはずだつたとのこと、それが無事にすんだのは有難いことに相違ない。

本堂をでて廻廊を歩きながらしばらく山上の眺めを恣（ほしいまま）にする。左手は陸と島とにかこまれた青い水の港、その中にイフの城が浮き、右手は町が遠くの山ふところまではてもなくつゞいてさながら一大パノラマを見るやうな。本尊マリアの像を浮したメダルを記念に買つてこゝを出る。

本堂參拜の時間二十分位の間に寫眞をしあげて賣る男がある、一枚三フラン、邦貨で二十五錢位だから僕たちも記念の撮影をした。石段を下りてくると、成程看板に僞りなくちゃんと出來てゐる。妙な藝をやる男だ。

その外マルセイユの町をかたどる女神の像が高く聳へるカンテイニの噴水や、公園や、美術館や、取引所や、この町での目ぼしいものは一と通り見て歩いたが、とりたてゝ興味をひいたものもない、あとは晝寝をして湯に入つて夕食後町をぶらついて十一時十五分發の夜行で巴里に向つた。

（一八）巴里まで

夜汽車は僕は非常に苦手だ、だから日本では寝臺を買つて辛うじて眠りをとる事にしてゐるがこの線では寝臺券が無暗に高い。「一晩位我慢するさ。」と横暴な多數に壓倒されてコムパートメントの隅の方に小さくなつてゆられてゆく。

知らぬ國を夜汽車で旅行するのはあまり氣もちのいゝものではない、啞の旅行と來てゐるのでなほ更心細さが身に沁みる。それにこのピー・エル・エムといふ線は元來あまり評判のよい鐵道ではない、ピーはパリの略字、エルはリヨンの略字、エムは當然マルセイユの事だらうと思ふとさうではない、メディテレーニアンの略字ださうで、これからして不都合だ。それに用心が悪くて、時間が不正確で、時々あとから來る汽車がぶつつかる……そんなことを考へてゐると十二時をすぎても寝つかれない。火を消して暗くした室の中が時々パツと明るくなつて一尺四方の圓い光りの中に大野さんや川本さんの顔が浮く、矢つ張り眠られなくて煙草をふかしてゐるらしい、みんな同じかな。

でも一時ごろからうと〳〵し始めて、いつの間にかリヨンは通りすぎてしまつた。眼をさますと初夏の野が繪の様に美しい。青い草、緑の木、ところ〴〵に牛がゐて人の影は少い、平和な眺めだ、いゝ景色だ……

「おい〳〵、景色どころぢやないよ、大變なことができた。」……折角人が牧場を見てゐるのに、大野さんが無理やり窓からひきはなして、何やらしきりに研究してゐる議場の中心へ僕をつれてゆく。

きいて見ると成る程これは大變らしい。

時間表によると僕たちの乘つた汽車はマルセイユを二十三時十五分（卽ち午後十一時十五分）に出て翌日の十四時二十分（卽ち午後二時二十分）に巴里につくことになつてゐる、そのつもりで大野さんと金子さんとはその時刻に出迎へを賴むと知人に電報を打つてあるのださうな、ところがその汽車はどうしてももつと早く巴里につきさうである。六時頃に通るはずのリヨンは四時すぎに通つたさうで僕は寢てゐて知らなかつたが、何でも大きな橋があつて奇麗な町だつたと寢惚け眼で見て來た連中が口を揃へて證明する。さうだとすると少し困る、第一出迎へがゐないし、第二リヨンで朝飯を食ふアテが外れるし、第三にはちと取越苦勞かも知れぬがその汽車が果して巴里に行くかどうかさへ疑問になつて來た。どうためつすかしつ時間表を繰つて見ても僕たちの乘つてゐる樣な汽車は揭げてない。成程これぢや景色どころぢやない、誰かに聞いて見なければならない、生憎汽車がラピードと稱する最大急行で大ていの驛はぶつとばして行くから驛夫にきくわけには行かぬ。車掌を探して……と廊下へ出ると幸ひ乘客の世話でもするらしい婆あさんが通りかゝつたから、アケラール・アパリ？巴里へいつ着くかときいたつもり、和文佛譯がかうなると冗談ではない眞劍勝負である、これが文法に合つてゐるかゐないかは問ふところでない、片唾を呑んで婆あさんの皺を眺めてゐると、ケンヅ・アプレ・ミデイとはつきりいつてくれた、十二時十五分につくのらしい、これで時間が分つたし第一巴里へ着くことが明瞭になつたのは嬉しい。メルシ・ボークー・マダム。

その次ぎは朝飯あゝ厄介だな、なぜ人間は腹が減るんだらう。何にしてもケンヅ・アプレ・ミデイまではもちさうもない、土地の連中は途中の驛でパンなどを買つてかぢつてゐるが、こちらは停車時間が分らないから恐ろしくてそんなまねはできない。その中金子さんが誰かにきいてその汽車に食堂車のあることを發見したといつて手柄顏に報告にくる。はてナ、さうと大野さんと端から端まで歩いて探したときはどうしても見つからなかつたんだが――どうせゐたいの知れなゐ汽車だ、七化八化位はやるんだらう、何にしても食堂車のあるのはもつけの幸ひだ、早速……とどや〳〵とみんなで入りこむ。

フランス流のプチ・デヂヤネ、僕はこれが非常に好きだ。ことにこの日はないものとあきらめてゐたのが思ひがけなく手に――ではない、口に入つたので美味いふべからず、食堂をでてたばこをふかしながら車窓によると何といふ美しい景色であらう、か方の村には赤い屋根の家が緑樹の葉かげに見えがくれして、敎會らしい建物の尖塔のみがひとり高く天を摩してゐる。近いところには鐵路に沿ふて川がある、兩岸には猫やなぎが族生してところどころに小舟が浮く、水はあくまで碧く澄んで、どつちの方角に流れてゐるのか分らない位靜かである、これがセイヌの上流だ。

その中汽車はフオンテンブローの森に入る、オークやバーチの青葉若葉が車窓をなでる、日光が入りくんだ枝と枝との間を洩れて葉蔭に明暗の縞を織る、下には灌木が茂つてゐるが縱横に走る少徑はあくまで手入れがとゞいてゐる。抑もこのフオンテンブローの森といふのは……一寸待ちたまへよ、こゝにベデカがある、えゝと四百二十四頁、さうだ、この森は周圍が五十六哩、面積は四萬一千九百四十エーカ、佛國第一の美しい森で東北にはセイヌの流れ東南にはルカンの平野があり――なに、そんな案内記の翻譯はよせつてかね、ぢや惜しいが割愛しよう、でも日本人の書く紀行文は大ていはベテカの譯なんだよ。

そんなことをいつてゐる内にもう巴里へきてしまつた、見たまへあれがエツフエル塔だ！

急にあたりが暗くなつた、さうだ、ガール・ド・リヨンの構内へ入つたのだ、時計をだして見ると十二時十五分、やつぱりお婆さん正直だ、まづ〳〵これで無事に巴里の都入りといふ段どりにはなつたが、時間がちがふから迎への人は無論きてゐない。仕方がないから構内のビユフエで晝をたべることにして、そこから松永君に電話をかける。何、電話がかけられたかつて？失禮なことを申してはいけない、かけられなければいつまでもガール・ド・リヨンにゐるわけぢやないか、どうしてかけたかつて、そんなくどくどしいことを聞く必要はないさ、ともかくもかけたんだ、かけて松永君を呼びだして荷物を受けとつてタキシに乘つてオテル・ヴイオレに乘込んだと思ひたまへ。

（一九）巴里　上

この家は町の中心に近くてそのくせ靜かで、宿料が安く

て英語が通じてあつらへむきの旅館である。一行大に松永君の勞を多として各自の室にをさまる。

夕食後松永君の案内でイタリヤ街からコンコルドに出て行く。各國から各種各樣の人間が集まつてゐる都のこととて、われ〳〵が歩いてもふり向いても見ないのは氣もちがいゝ、但し夫人のキモノは大分珍しいと見へて、男女を問はず、ちらりと流し目に見てゆく。夫人いささかテレ氣味ですた〳〵と急がれるのでお供格のわれ〳〵も遲れじと群集をわけてゆく。

コンコルドから左に折れてチユイレリの公園に入ると急に人かげが少くなる、池がある、その向ふに木がならんで蔭が暗い。この公園は林泉の美をもつてきこへたところだが、夜の闇につゝまれた靜かさも又格別の趣きがある。われ〳〵は公園からルーヴルをぬけて、とあるテラスでアイスクリームを飲んだ。日本ではいつでもかくれて飲んだり食つたりする癖がついてゐるので、かう通りの方へ開き直つて大つぴらに飲食するのはいささか極まりが悪い、でもみんなさうしてゐるから羅馬（ローマ）に入つては羅馬（ローマ）に從ふことにする。

あくる日のあさ、クツクに行つてシヤラバンの切符を買つたまではよかつたが、日佛銀行を尋ねるのには弱つてしまつた、それも十二時から二時までは銀行が休みになるので、十二時までの十分位の間に行かなければならない、あとで考へると近いところを二度も三度道をきいてやつと十二時五分に銀行についた、歸りかけてゐる行員の中に日本人がゐたので地獄で佛、漸く泣きついて皆の用を果すことが出來た。

晝食はクツクの前のラルーといふ料理店へ入つた、うまい〳〵といゝ氣になつて食べてゐたら、勘定になつて一人前百二十フラン、世が世だと邦貨にして五十圓ほどになるところだが、まづは十圓ほどですんだらう、珍しがつて桃といちごをたべたのだ祟つたらしい。

午後はクツクのシヤラバンで世界各國のお上りさんたちと一しよにクル〳〵と巴里を半分ほど見てまわる。東京邊にもこのごろある遊覽自動車といふ奴、町のまん中で案内者が自席に突立ちあがつて「みなさん、これが有名なオペラで……」と英語で說明するのだが、それを謹んで拜聽してゐるのはどう考へてもあまり体裁のよい圖ではない。

サン・シヤペルだの、パンテオンだの、ノートルダムだの、ペール・ラシエーズの墓地だのといふところは降りて見物するのだが、まご〳〵してゐると案内の先生を見失ひさうになるので氣が氣でない。それにこのイテイナラリは巴里の名所の粹をぬいてあるのだから、どこへ行つても「これが有名な……」の有名づくしで少々有名にアテられ氣味になる。僕のいふ「何か少し有名でないものを見せて貰ふわけには行くまいか。」案内の先生眼をパチクリして答ふるところを知らず。

夜は松永君が來て少し夜の巴里を御案内しませうといふ、みんなぞろ〳〵とあとについてでる。目ざすところはモンマルトル、まづ東京の淺草といふところだらうが、淺草ほどに俗惡ではない。「これが有名なムーラン・ルーヂユです。」と松永君までが有名でアテる。その有名なところを一寸覗いて見やうと一番安い切符を買つて立見をすると、舞臺では半裸體の女が大勢金ピカの着物をきて飛んだりはねたりしてゐる。一としきりすむと破れる樣な喝采だ、何が面白いんだか僕たちには分らない、石井さんの舞踊の方がよつぽど上手だ。

そんなことを考へてゐるとうしろから誰かが背をつゝく、振り返つて見ると毒々しくぬりたてた女がゐて、何とかゞどうやらしてアヴエク・ムアといつた。何がアヴエク・ムアだ、我輩はこれでも日本帝國を代表してゐるんだ、お前たちの樣な女にお言葉を下し給はると思ふか、いへたにしてもいつてはやらないぞ、汚らはしい、下れ……、だがこの女容易に下らうとはせない、一しよに酒を飲まうだの煙草をくれだのいろんなことをいふ。ついそばにおまわりさんがゐるんだが、にや〳〵笑つてゐて一向助けてくれない。こんなところに長居は無用と早速みんなを引つ張つてこゝを出た、成程これは有名なところらしい。

（一九）巴里　下

六月二十四日、けふもクツクのシヤラバンで殘りの半分を見て廻る。巴里に來て何を見ても驚かぬ決心でゐたのだが、ルーヴルの規模の大きいのには些かびつくりした。まさかこれほどとは考へてゐなかつた、われ〳〵は彫刻と繪圖の一部分を見ただけだが、それでも與へられた一時間ではその一班をも窺ひ得られぬ程に思はれた、何しろ昔からのありとあらゆる巨匠が至るところの隅から手招いてゐるのだから。そこに何ケ月通つたとかいふ話をよく聞くが、無理もない事と絶望してこゝを出た。

例のコンコルドから大統領官邸を右に見て、シヤンゼリゼーをぬけてゆくと凱旋門に出る、これも思つたよりは大

きい。門の中央に無名戰死者の墓があつて香華が絶えない、その傍には千八百七十年九月四日この國が共和國になつた日と、千九百十八年十一月十一日世界大戰の終つた日とが特筆大書して記念されてゐる。

その次に降りたのはトロカデロの宮殿、廻廊に立つとエツフエル塔が眼の前に見へる、足もとの庭の芝生が美しい。その劇場はオペラなどに比して頗る汚らしいが、こゝでは藝術的價値のある作品が屢々上場されるのださうな。

次は廢兵院とナポレオンの墓、中々忙しい。廢兵院（アンヴァリド）といつても名ばかりで事實廢兵を收容してゐるわけではない、廢兵は多く看守などに採用されてそれ〴〵職を得てゐるさうな。この名ばかりの廢兵院にナポレオンの墓があるのでそれを見――いやそれにお參りをするわけだ。巴里に來てからヂヤン・ダークとナポレヲンとはいやといふほど聞かされだが、大奈翁（ナポレオン）は今でも鹿児島の西郷どん位の勢力はたしかにもつてゐるらしい、下手をいふと撲り飛ばされるかも知れない、謹んでお參りをする。この墓は大理石の綺麗なもので、入口にはかの有名な（少し耳障りかも知れぬが事實だから致し方がない）奈翁（ナポレオン）の遺言「予は予の愛する人々の間にセイヌ河畔に葬られんことを欲す」といふのが刻まれてゐる。フランス語もかう書いてあるのだとわけはないんだが、あの鼻聲でのべつ幕なしにまくし立てられると叶はない。墓の前の室には各國の分捕旗などが一面につるしてあつた。

こんなことでまづ巴里は一と通り見物を了へたことにし、午食はルーブル百貨店の食堂ですませた。こゝで夕方までいろ〳〵買物などをした。雨が降つてわびしい日だ。

二十五日は午前中グラン・パレーに行つてサロンの展覧會を見た。未來派だの立體派だの變手古な畫は一つもないので安心した。昨日見たルーブルのそれにはもとよりくらぶべくもないが概してうまいと思つた。見きれぬほど澤山あつたが、ひるになつたので割愛して歸つた。

午後は松永君の案内でセイヌ河を下る。巴里名物の一つとなつてゐる河縁の古本屋のならんでゐる邊りから汽船に乘つてサンクルーに向ふ、漸く町をはなれると兩岸の木が美しい。「どうです、あのマロニエがきれいではありませんか。」と松永君がしきりに賞讃を強る。段々聞いてみるとけふの遊山は特に僕への御馳走なさうで、春をひさぐ女のばつこすることや、白晝往來で怪寫眞を賣つけようとする男のゐる事や、ヲテルのギヤルソンがカヴアレをすゝめることやを例に擧げて僕が市中の惡口をいつたのに對し、郊外の自然美を味はせようといふのがこの行の目的ださうな。さうきくと僕も默つてはゐられなくなつて新緑の濃い色が水に映ずる趣きを口を極めて嘆賞した。

サンクルーで下船、パヴイヨン・ブルーで少憩してアイスクリームを飲むと、日本人と見て、樂隊が日本の子守唄を合奏してくれた。親しむべく愛すべき國民なるかな、郊外で氣に入つたのは自然美ばかりではなかつた。

公園をあるくと樹の色があくまで青い、サロンで見た風景畫の眞に迫つてゐる味はひが今更しみ〴〵と感心させられる。河を渡つてブーローニユの森に出ると、自動車が何十臺、ずらりと道の一方にならんで、涯のないほどひろい森も人で一杯だ、考へて見るとけふは土曜日であつた。池のほとりでしばらく休んで自動車で歸つた。序ながらパリーは自動車が非常に安いので滞在中は無暗に乘り廻した、五十錢も奮發すると隨分遠くまでゆける、それにメートルが正確だから決してボラれる樣な心配はない。どこで乘つてもポアソニエール・ヲテル・ヴイオレとさへいへばチヤンと宿まで連れて來てくれる、頗る重寶だ。倫敦では日本以上に高いらしいから、いつもバスとチューブばかりに乘つてゐる。

けふは大野さんたちが獨逸へ立つ。神戸以來、凡ての行動を共にして來たグループもいよ〳〵これで解散することになつた。金子さんは巴里上りでもうパンシオンに入つてゐる、大野さん夫婦と川本さんとはドイツへ僕は英國へ、それ〴〵袂を分つことになつた。イタリヤ街の料亭で夕食を共にしたのが名殘を惜しむ心もち、夜三人をガール・ド・ノールに見送ると、「からだを大切にしてね」と思はず女々しい口調になる、その中時間が來て、窓で握手をする間もそこ〳〵に、汽車は闇の中へ消へて了つた。

（二〇）英國へ

二十六日、いよ〳〵英国へ入國する日が來た。朝九時、ヲテル・ヴイオレから例の安いタキシに乘つてガール・ド・ノールに着、十時發の汽車でカレーに向ふ、同行は京都醫大の宮田氏、長崎高商の伊東君も室はちがふが同じ汽車だ。

伊太利の旅から歸つたといふ倫敦の銀行員と四方八方の話をしてゆく。英國人は恐ろしく無口な人種で、かうしてならんで掛けてゐてもいつまでも睨みつこをしてゐる。正

式に紹介されるか汽車が脱線するかでない限り決して口を開かない、と何かの本で見たことがあるが、その男は長らく大戦に參加してゐたので誰でもコムレツド扱ひにする癖がついたのらしい。僕がナポリで一杯五十錢のコーヒーを飲んだ話をしてゐるといままで室の隅でむつつりと默りかへつてゐた男が、何だか話が面白さうだから仲間にいれてくれといつて僕たちの漫談に加はつた。人がだまされた話、人がひどい目にあつた話ほど面白いものはない。この男も英人だがナポリに十年もゐて音樂をやつてゐるとか、この男に聞いたらナポリでコーヒー一杯の値段は二十五サンチーム、大凡わが二錢位のよし、僕たちは二十五倍拂はされた勘定で成程一寸面白い、氣の毒だといつてこの男が僕にたばこをすゝめてくれた。こんな話をしてゐて途中の景色は大方見ずに了つた、一時半カレー着、稅關でペラ〳〵と拂語の質問をうけたが大てい「ノン、ムシユ」で通じて了つた。但し一つだけどうしても「ノン、ムシユ」ではいけない奴があつたので、よくきいて見るといくら金をもつてゐるかといふ質問であつた。失禮なことをきく奴だ、僕の懐中淋しいのを知つて人前で耻をかゝせるのか知ら、と思つたが、ないものはないので仕方がないから正直にいふと「よろしい」と通してくれた。あとで聞いたらこれはフランの相場が安定せぬので見込買をするものがあるからそれを監督するのだとのこと、それなら分つてゐる。

二時出帆、船の食堂でサンドウイツチをたべる。例の銀行員が來て日本のことをいろ〳〵ときく。話してゐる中に甲板が騷々しくなつて來たので出てみると、削つた樣な白い崖が向かふに見へてゐる、アルビオンである。けふは船はあまりゆれなかつたが寒いのには驚いた、外套を着てふるへてゐた。

三時ドーヴアに着く。英國人はさつさと通りぬけて行くが、われ〳〵エトランゼはあとに殘されて、旅券やら手荷物やらの手嚴しい檢査をうける。こゝは大英國の表玄關とあつていはば箱根の關所である、ニウヘイヴンなんかはこんなでないかも知れない。

お役人の前に呼び出されて口頭試問をうける。

「英語を話すか。」

「話す。」

「英國で何をするか。」

「勉强する。」

「何を勉强する。」

「英語と英文學。」

「英國にどの位滯在するつもりか。」

さあお出なすつた、こゝで六ケ月以上ゐるといへば醫者のところへやられて、どうかすると裸にされて、連絡列車に乘り遲れる樣に出來てゐるのだ、その手はくはない。

「それは分らない、若し英國が氣に入れば長くゐる、氣に入らなければ大陸へ行く、イツト・オール・デペンヅ。」

それ見ろ、困つたらう！何か同僚とひそ〳〵話をしてゐたが、結局紙片に「サム・マンスス」と書いて通してくれた、これで第一の關所は無事通過。

次ぎは稅關の役人の前へ立つ。課稅品の名前を一々向ふでいふ、それに對してあるとかないとか答へる。かういはせて置いてからカバンをあけさせるのだからたちが惡い。カレーでの樣にちやらんぽらんのこんにやく問答をしてゐたらどんな目に會ふか知れない。まづは正直にいつて置いたから無事にパスした。

ところが同行の宮田氏がどうしてもやつてこないので困つてしまつた、三時半に汽車が出るのに二十五分になつてもまだこない、あとできいたら醫者のところへやられてゐたさうだが、待つてゐる僕も氣が氣でない。三十分になつてやつとやつて來ると、稅關の役人が悠々と前の手つゞきを繰返す。「急いでくれぬか。」といへば「プレンテイ・オヴ・タイム、汽車はいくらでもある！」ぜう談ぢやない、ヴイクトーリアに待つてゐる人がゐるのだ、これに遲れちや甚だ困る！

カバンの底から引つくり返された奴をむやみにつめこんで、プラットフオームを駈足！でも汽車が氣を利かして四五分出發を遲らせてくれたからやつと間に合つた、やれ〳〵、同じコムパートメントにドイツ語とフランス語との外、英語は一語も知らぬオーストリーの夫婦がゐて、伊東君とふたりこのお相手にはもてあました。こちらもこんな仕末で初めてゆく倫敦のことをいろ〳〵と尋ねる。知つてゐてもドイツ語とフランス語とをチヤンポンに使ひわけて返事をするのは甚だ苦しい、しまひにはいゝ加減にあしらつて、二人でお茶をとりよせて飲んだ、惡い心もちではない。

汽車はケントの野を走る。牧場が青々と連つて羊の群が餌をあさつてゐる、山のやうなものはちつとも見へない、ところ〴〵にホツプが植えてある。地圖で見ると小ぽけな島國だが、旅行をしてみると大陸をゆく樣な感がある、と誰やらがいつた言葉が成程とうなづかれる。こんな廣い野原をたがやしもせないで遊ばせて置く國は羨ましい、山のてつぺんまで畑にしてまだ食ふに困つてゐる日本は可哀想

だ。

伊東君とふたりでしきりに途中通る筈のキヤンタベリーの話をしてゐると、汽車は漸く野をはなれて町に入つた。

「大ぶん大きな都會らしいね、どこだらう。」と話してゐると大きいのも道理、もうロンドンにきてゐるのだ。笑つちやいけない、日本で、特急でも一時間三十哩しか走らぬ汽車に乗りつけてゐると、五十哩以上の速力を出す汽車では一寸見當が狂ふのだ。

まさしく倫敦に相違ない、そのうち汽車がとまるとこれは音にきくヴイクトーリア・ステーション、窓の外を見ると大阪外語の小西が迎へに來てゐる。こんなところで帽子をぬいでペコ〳〵したら人が笑ふだらう、鄕に從つて握手をする。だが言葉だけは日本語で「おい、どうだ？」

國を出てから四十五日目に無事目的地に着きました。「英國まで」の稿はこれで終ります。隨分下らないことを長々と書きましたが、元來この旅行そのものが下らない長つたらしいものなんですから止むを得ません。少し落ち着いたら筆硯を新にしてもう少し氣の利いた英京雜記を書くことにしませう。

（終り）

（原文を転載するに当たり、句読点を若干追加した。また、ルビは最小限に留めた。）